

旧伊賀良村の小字

【冷田】下殿岡

ヒエダ。

伊賀良消防署の県道駄科・大瀬木線を跨いだ広い小字になっている。

ヒエダとは何か。伊那谷南部には多い小字である。二説が考えられる。

① ヒエダ（稗田）で「田稗を栽培していた田んぼがあったところ」か。水温の低い水田では多く栽培されていたようで、水口によく栽培されていたという。

② ヒエタ（冷田）で、「水温の低い田んぼがあったところ」かもしれない。自然湧水の水温は低かった。井水が来る前には湧水を使わざるをえなかった。

この広い小字には、段丘崖の湧水地も含まれている。

【北村】下殿岡

キタムラ。

ヒエダ小字の南東隣で伊賀良井と鼎境の間にある。

キタムラは天正19年の下殿岡村検地帳にある分付主（地主）としての「北村」であろう（村史）。

その由来となるキタムラとは「（下殿岡の）北の方にある集落のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図には、キタムラ地名は58カ所も挙げられており、うち57カ所には「北村」の文字が宛てられている。

【垣外】

カイト。下殿岡。

この小字も多い。広い小字になっている。

カイトとは「有力者の居住地があったところ」と思われる。あるいは、カキ（欠）・ト（処）で、「崖のあると

ころ」の意とすることもできそうであるが（語源辞典）、ここでは前者の解釈としたい。

【宮後・宮ノ前】

ミヤゴ・ミヤノマエ。下殿岡。

ミヤゴとは「お宮のうしろにある土地」をいい、ミヤマエとは「お宮の前方の土地」をいう。

そのお宮は下殿岡の八幡宮で、ミヤゴ小字の最南部にあるが、ミヤマエ小字境の近くになる。

全国地図には、ミヤゴ地名は6カ所に、ミヤウシロ地名は8カ所に記載されている。

【大原】

オオハラ。下殿岡。

県道駄科・大瀬木線の周辺にあり、北側は鼎境となっている、伊賀良井と毛賀沢川の間にある広大な小字である。現在は、墓地や果樹・畑などが多く、水田は少ない。

オオハラとは、「広い平野」をいうのであろう。

なお、「原」には「耕地や宅地として利用されていない平坦地あるいは緩傾斜地。野以上に水利の便が悪く、採集や狩猟の場」（民俗大辞典）の意もある。この小字には、中世後半にこうした時代があったのかどうか。

全国地図には、オオハラ地名は中・大字として101カ所にも記載がある。

【大久保・下大久保】

オオクボ・シモオオクボ。

いずれも毛賀沢川と新川との間にある広い小字である。

クボとは「周辺より低く窪んだところ」をいう。従って、オオクボとは「広い周辺よりやや窪んだ土地」をいい、

シモオオクボとは「オオクボ小字の下流側にある土地」をいうのであろう。下流とは新川に沿った下流側を意味する。

オオクボ地名はどこにでもあり、全国地図には、中・大字として337カ所も挙げられている。

#### 【公文所前】

クモンシヨマエ。

伊賀良井を挟んでキタムラ・カイト小字の南側にある。これも大きな小字である。

公文所（クモンシヨ）は「院庁・撰関家・寺家・庄園で、所領に関する文書を納め、所領・年貢のことをつかさどった所」（広辞苑）である。

ここのクモンシヨマエとは、庄園の所領・年貢について取り扱う役所の前方になっていた土地」をいうのであろう。公文所の所在地は、この小字の内か、北隣のキタムラ小字かカイト小字にあったと思われる。

伊那谷南部には、クモンジヨ（シヨ）小字は何カ所かあるが、全国地図に中・大字として取り上げられているのは、わずかに1カ所にすぎず、しかも宛てられている文字は「久門所」となっている。

#### 【池田】

イケダ。

伊賀良井右岸にある、南に細長く延びる。

イケダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

- ① イケ（池）・ダ（処）で「水路のある土地」か（語源辞典）。すでに伊賀良井が通っていたとすれば、水路とは伊賀良井かその分流であろうし、伊賀良井以前であれば湧水の小川があったところであ

ろうか。

- ② イケダとは「わき出る泉の水で灌漑されていた田があった土地」かもしれない（国語大辞典）。高知の方言であるというので、可能性は小さいか。

全国地図には、イケダ地名は中・大字として96カ所に挙げられている。

#### 【松澤】

マツザワ。

伊賀良井と滝沢川の間にある大きな小字である。

マツザワとは何か。

- ① マツザワは固有名詞で、「この一帯の開発者」であったという（宮沢恒之氏『伊賀良の地名』）。天正19年の太閤検地帳には、分付主（地主）としてその名が記録されている（村史）。

- ② マツザワの由来は何かといえ、次のようなことが考えられる。マツは動詞マツワル（纏）から「巻いたような地形」をいう（語源辞典）。従って、マツザワとは「流水が巻くようにして曲流している場所」を意味するのであろうか。

全国地図にはマツザワ小字は26カ所に中・大字としてあげられており、いずれも「松沢」の文字になっている。

#### 【力石】

チカライシ。

伊賀良井右岸にある。円通寺に近い。

力石は若者が力試しに用いた石で、関東・東海地方に多く、「力石」を彫られていたり、その重量や寄付

した者の名前が彫り刻まれていることが多いという。氏神境内や若者宿の前庭などに置かれていたという（以上は民俗大辞典）。

従って、チカライシとは「力石が置かれていたところ」を意味するのであろう。

下殿岡のチカライシ小字に力石があったのかどうかは未確認。

全国地図には、チカライシ地名は12カ所に中・大字として挙げられており、その全てに「力石」が宛てられている。

#### 【市場屋敷】

イチバヤシキ。

上殿岡・三日市場との境にある。

イチバヤシキとは「市が開かれた土地で裕福な人の居住地もあったところ」であろうか。市は村境や川原で開かれることが多かったという。裕福な人というのは市場商人であった可能性が高い。

全国地図には、イチバヤシキ地名は記載されていない。

#### 【寺前】

テラマエ。

伊賀良井右岸の上殿岡境にあり、この小字内には円通寺がある。

テラマエとは「お寺の前の土地」である。

#### 【廣原片】

ヒロッパラカタ。

新川溪谷の段丘崖にある。

ヒロハラは「広い野原」（国語大辞典）の意もあるが、ここでは適切な解釈ではない。

ヒロはヒラ（平）の転じた語で「傾斜地」をいい、ハラはハラ（腹）で「山腹」を、カタはカタ（肩）で「山や丘の頂上からやや下の傾斜度の

変わる部分」を示す（以上は語源辞典）。以上から、ヒロッパラとは「段丘崖」を意味するものと思われる。

全国地図にはヒロッパラカタ地名は無いが、ヒロハラ地名は8カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【端上肩】

ハシカミカタ。

新川の氾濫原とその上の段丘の間の段丘崖にある。

ハシ（端）は「崖になっている台地の縁辺」のこと、カミはカム（嚙）の連用形が名詞化した語（語源辞典）。従って、ハシカミカタとは「段丘の縁辺にある段丘崖」をいうのであろうか。

全国地図にはハシカミカタ地名は記載がないが、ハシカミ地名は中・大字として8カ所に挙げられている。

#### 【苗釜肩】

ナエカマカタ。

これも新川氾濫原とそのすぐ上の台地の間の段丘崖にある。

ナエカマカタとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

- ① ナエは動詞ナユ（萎）の連用形が名詞化した語で、傾斜地の土砂が大雨などで萎えるように落ち込んでいく状態をいうのであろうか。カマ（釜）は「えぐったような崖地」（語源辞典）のこと。カタは「廣原片」のカタと同じ。以上から、ナエカマカタとは「段丘端の崖が抉られたようになっていくところ」か。
- ② あるいは、ナエはナへ（並）で二つのものの並んだ地形（語源辞典）で、ナエカマカタとは、「崩れた段丘崖が並んでいると

ころ」を意味するか。

全国地図には、ナエカマカタ地名は載っていない。

#### 【岩下】

イワシタ。

駄科境の新川左岸氾濫原にある。

イワシタとは字面の通りで「岩の露出した段丘崖の麓の土地」を意味しているものと思われる。

イワシタ地名は、全国地図に中・大字として48カ所に挙げられており、その全てに「岩下」の字が宛てられている。

#### 【練田】

ネリタ。

この小字は、駄科境の新川に向かって開いた小さな谷になっている。

ネリ(練)は動詞ネル(練)の連用形が名詞化した語で「湿地」をいう(語源辞典)。従って、ネリタとは「湿田の多い土地」を意味する。自然湧水の多いところであろう。

全国地図には、なぜかネリタ地名もネリダ地名も記載が無い。

#### 【中新川・下新川】

ナカシンカワ・シタシンカワ。

いずれも新川の沿岸にある。

ナカシンカワとは「新川に接する下殿岡沿岸の中流部分」をいい、シタシンカワとは「新川に接する下殿岡沿岸の下流部分」をいう。

#### 【樋口】

ヒグチ。

この小字は、ナカシンカワ小字とシタシンカワ小字に挟まれた新川左岸にある。

ヒグチとは「(新川からの)井水の取り入れ口のあるところ」をいうのであろう。

自然湧水よりも新川からの井水

の方が稲作にはよかったのであろう。

全国地図にはヒグチ地名が28カ所にあり、うち25カ所には「樋口」の文字が宛てられている。

#### 【流差】

リュウサ。

駄科・三日市場との境界地であり、新川の両岸にあるが、右岸の方が大きい。

リュウサはリュウサ(流砂)であろう。流砂とは「水に押し流された砂」(広辞苑)をいう。従って、リュウサとは「(新川とその支流に)押し流された砂が堆積した土地」をいう。

新川に三日市場からの支流が流れ込む場所で、氾濫原も広がっており砂礫が堆積しやすかったと思われる。

しかし、なぜか全国地図にリュウサ地名は記載が無い。

#### 【阪下】

サカシタ。

新川に滝沢川が流入する合流点の左岸にある。

サカ(阪)は「一方は高く一方は低く、傾斜している道」(広辞苑)のこと。従って、サカシタとは文字通り「坂道の下方にある土地」をいう。

全国地図には、サカシタ地名は中・大字として83カ所に挙げられており、うち82カ所が「坂下」となっている。

#### 【大沼】

オオヌマ。

滝沢川の左岸にあり、サカシタ小字の上流側になる。下殿岡の小字であるが、上殿岡にもある。

沼は「湖の小さくて浅いもの。ふつう水深5m以下…」であるという（広辞苑）。

従って、オオヌマとは「大きな沼があった所」をいうのであろう。

全国地図には、オオヌマ地名が中・大字として53カ所挙げられている。

#### 【甘漫沢】

アマヅラサワ。

三日市場との境になる滝沢川左岸のオオヌマ小字の上流側にある。

アマヅラサワとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

① アマはア（水）・マ（間）で「湿地」の意で、ヅラはツラ（連）で「連なった状態」をいう。以上から、アマヅラサワとは「細く連なった湿地」をいうか。

② アマ←アバ←動詞アバク（暴）の語幹で「浸食地形」をいう。従って、アマヅラサワとは「浸食された川岸が連なっている所」か。

全国地図には、アマヅラサワ地名は無いがアマヅラ地名は2カ所にあり、いずれも「天面」となっている。

#### 【向原】

ムカイハラ。

上殿岡南部にあり、三日市場境に接している。

ムカイハラとは「向こうの方にある原」であろうか。基準になっているのは、神明宮か上殿岡の中心部と思われる。ハラは水田などに利用されていない土地を表しているというがどうであろうか（民俗大辞典）。

全国地図にはムカイハラ地名は中・大字として45カ所に挙げられ

ており、うち43カ所は「向原」の字が宛てられている。

#### 【野畔】

ノグロ。

大瀬木と三日市場とに境を接している。

ノグロとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

① ノ（野）は「田畑」をいい、グロはクロで「傍」を意味する。従って、ノグロとは「田畑の周辺の土地」をいうか。

② ノ←ヌと転じた語で「湿地」を意味することがある。すなわちノグロとは「湿地の周辺部の土地」であろうか。

全国地図には、ノグロ地名は1カ所だけ中・大字として挙げられており、「野黒」となっている。

#### 【四本木】

シホンギ。

この小字は大瀬木境にある。

シホンギとは、字面の通りで「四本の大きな樹木があった所」と思われるがどうであろうか。樹種は不明であるが、アカマツであったか。

全国地図にはシホンギ地名は中・大字として1カ所にだけ記録されている。

#### 【永通り】

ナガトオリ。

上殿岡の南部にある。

ナガトオリとは何か。トオリは「道路」で、ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいう（語源辞典）。従って、ナガトオリとは、「傾斜地にある道路」となるが、ほかに意味があるのかもしれない。

全国地図にも中・大字として1カ所が記載されており、「長通り」

の字が宛てられている。

#### 【伊勢田】

イセダ。

上殿岡南部のノグロ小字の北側にあり、現在はほとんどが水田になっている。

イセダとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

- ① イセはイ（強意の接頭語）・セ（瀬）で「流水のある水田地帯」をいうか。この小字の南北両側には川が流れている。
- ② イセーイソ（磯）と転化したもので、イセダとは「砂地の水田になっているところ」かもしれない。
- ③ イセ（伊勢）は伊勢信仰と関わっている可能性もある。とすれば、イセダとは「伊勢信仰に関わる神社の所有田」か。北方には神明宮がある。

全国地図には、イセダ（伊勢田）地名が1カ所、中・大字として記載されている。

#### 【小屋田】

コヤダ。

上殿岡のイセダ小字の北隣にある小さな小字である。

コヤダはコ（小）・ヤ（菴）・ダ（田）で、「小湿地にある田地」か。

全国地図には、コヤダ地名も1カ所にあり「小谷田」となっている。

#### 【柿ノ木田】

カキノキダ。

上殿岡の南部、イセダ小字の北隣にある。

カキノキダとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

- ① カキは動詞カク（欠）の連用形

が名詞化した語、ノキはヌキ（抜）の転で「崩れ地」、タはタ（田か処）をいう。以上からカキノキダとは「崩れ地のあった田（処）」であろうか。

- ② ノキは下伊那の方言で「家の裏手」を意味する。従って、カキノキダとは「家の裏手で崩れたところがある土地（田）」かもしれない。

- ③ カキ（柿）・ノ（助詞）・キダ（階段）で、カキノキダとは「柿を栽培している階段状の土地」も可能性がないわけではない。

カキノキダ小字は伊那谷南部には多いが、全国地図には中・大字として1カ所に挙げられているにすぎない。伊那谷南部の特徴的な地名であろうか。

#### 【久米八】

クメハチ。

カキノキダ小字の上流側にある小さな小字。

クメハチとは何か。二説を挙げたい。

- ① クメハチは固有名詞か。とすれば、クメハチとは「久米八の所有地」ということになる。

- ② クメは動詞クム（朽）の連用形が名詞化した語で「崩れること」をいう。関東から三遠南信の方言か。この地方では今でも使われている。ハチは動詞ハツル（削）の語幹で「削られたような地形」の意。同義語を重ねたもので、クメハチとは「崩れ地のあるところ」を意味するか。

全国地図には、クメハチ地名は載っていない。固有名詞である可能性が高いか。

**【井溝】**

イミゾ。

上殿岡南部の二本の流水に挟まれている。

イミゾとは字面の通りで「井水が流れている所」をいうのであろう。

全国地図には、イミゾ地名は記載されていない。

**【久三】**

キュウゾウ。

上殿岡のイミゾ小字の西隣とその南の二カ所にある。

キュウゾウとは何か。

① キュウゾウは固有名詞か。であれば、キュウゾウとは「久三の所有地」となる。

② 念のために、もう一説を挙げたい。キュウはキ（木）・フ（生）が転じた語で「材木があるところ」をいい、ゾウハソフ（添）が濁音化した語（以上は語源辞典）。以上から、キュウゾウとは「材木のある場所に添った土地」かもしれない。材木集積所であることも考えられないことではない。

全国地図には、キュウゾウ地名は載っていない。

**【新屋田・新屋田水口】**

シンヤダ・シンヤダミゾグチ。

大瀬木境にある。

シンヤとは「分家」の意か（広辞苑）。従って、シンヤダとは「分家の所有田」を意味するのであろう。本家はどこにあるのか、わからないが。

シンヤダミゾグチは小字図にはないが、「シンヤダに水を入れる取り入れ口のある所」をいうのであろう。

全国地図には、シンヤダ地名は1カ所あるが、「新矢田」の字が宛てられている。

**【三角田・三角畑】**

サンカクダ・サンカクバタ。

サンカクダ小字は大瀬木境に突き出たところにあり、サンカクバタはヒエダ小字に突き出ている。いずれも上殿岡の小字である。

サンカクは「三角形をした土地」であろう。地形や・道路・水路などによって、そんな形の土地になっているものと思われる。

全国地図には、サンカクダ地名は中・大字として1カ所が挙げられている。

**【大水口】**

オオミゾグチ。

上殿岡最西端の大瀬木境にあり、滝沢川が大きく屈曲している。

オオミゾグチとは、文字通り「井水の大きな取り入れ口のある場所」をいうのであろう。滝沢川の屈曲点から井水を取り込んでいることを指している。

全国地図には、オオミゾグチ地名は無いが、ミゾグチ地名は12カ所に挙げられている。

**【大畝蒔】**

オオゼマキ。

上殿岡の大瀬木境にあり、滝沢川が曲流している。

オオは美称か。隣にあるオオミゾグチ小字と関連し合ったのであろうか。ゼ＝セ（瀬）で「流水」をいい、マキは動詞マク（巻）の連用形で「河流が巻いた所」の意（以上は語源辞典）。

以上から、オオゼマキとは「川が巻いたように曲流しているところ」

を意味しているのであろう。

全国地図には、オオゼマキ地名はもちろんのこと、ゼマキ地名もセマキ地名も記載が無い。

#### 【中通り】

ナカドオリ。

オオゼマキ小字の東に連なる東西に伸びた小字である。

ナカドオリとは「本通りと裏通りとの間の道路」（広辞苑）であるという。ここ上殿岡のナカドオリも同じ意味であろうと思われる。この東西に伸びる道路に対して本通りとなっている道路は現在の県道駄科・大瀬木線の前身であった道路であろうか。

全国地図には、ナカドオリ地名は67カ所に中・大字として記載があり、うち62カ所に「中通」の字が宛てられている。

#### 【新田】

シンデン。

上殿岡のムカイバラ小字に挟まれている。

シンデンについては二通りの由来が考えられる。いずれも語源辞典による。

- ① シンデン（新田）は「開墾地」をいう。それも近世以降の開墾地を指している。
- ② シンデン（神田）もある。「神社の諸費用に当てるための田」である。神社とは神明宮をいうか。

全国地図には、シンデン地名は572カ所という膨大な数になっている。当てられている文字は561カ所が「新田」で、「神田」は3カ所にすぎない。

#### 【三日月畑】

ミカヅキバタ。

上殿岡南部にあるオオヌマ・ナカドオリ・コヤダなどの小字に囲まれている。

ミカヅキバタとは「三日月の形をした畑」を意味していると思われるがどうであろうか。

全国地図には、ミカヅキバタ地名は載っていない。

#### 【水上】

ミズカミ。

上殿岡最西部の滝沢川右岸にある。

ミズカミとは「自然の湧水のある所」で、水神が祀られているところが多いというが、この上殿岡のスイジンはどうであろうか。

全国地図には、ミズカミ地名は中・大字として39カ所に挙げられており、うち37カ所が「水上」、2カ所が「水神」となっている。

#### 【薬師洞・薬師原】

ヤクシボラ・ヤクシハラ。

上殿岡西部にあり、二つの小字はつながっている。

ヤクシボラは「薬師堂がある小さな谷」をいい、ヤクシハラは「薬師堂の近くの緩傾斜地」をいうのであろう。ハラには神聖な土地という意味あいもあるという（語源辞典）。

村史によれば、上殿岡の薬師堂ははじめ南の方の薬師洞にあったが織田軍の兵火で焼かれ、無事で残った本尊は殿原に移されたという。

#### 【螺ノ尻】

ツボノシリ。

上殿岡の薬師小字に囲まれている。

ツボノシリとは何か。伊那谷南部には多い小字名であるが、はっきり



しないところもある。二説を挙げたい。

- ① ツボは「田の一画」であるといい、シリは「末端部」の意（語源辞典）。となれば、はっきりはしないが、ツボノシリとは「田を均等に区分けして行って、最後に残った土地」をいうのであろうか。井水が通るようになって、新田ができ区分けしていった名残でもあろうか。
- ② ツボはこの地の方言でマルタニシをいう。その尖ったところに見立てたのであろうか。つまりツボジリとは「マルタニシの尖ったところのような田んぼ」を意味しているとも思える。

全国地図には、ツボノシリ地名はないが、ツボジリ地名は2カ所にある。

#### 【田中】

タナカ。

上殿岡にあり、ヤクシボラ小字とナカハラ小字などに囲まれている。

タナカとは、字面の通りで「田んぼに囲まれた土地」をいうのであろうか。現在は二面に水田がある。

どこにでもある地名で、全国地図にも339カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【十通り】

トトオリ。

上殿岡の滝沢川と下新井沢川との間に挟まれている。

トトオリとはドトオリが清音化した語で、「川の合流点がある土地」をいうのであろう。ド（渡）は「合流点」をいう（語源辞典）。ここで滝沢川と下新井沢川が合流している。

全国地図には、トトオリ地名は中・大字として2カ所に挙げられており、うち1カ所は「十通り」となっている。

#### 【武久里】

ムクリ。

上殿岡の滝沢川に沿って2カ所にあり、いずれも沢に沿って細長く伸びている。

ムクリには「めくれて反ること」の意がある（国語大辞典）。従って、ここでいうムクリとは、「（川の浸食によって）剥がれたようになった場所がある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ムクリ地名は記載が無い。

#### 【中原】

ナカハラ。

上殿岡のヤクシボラ小字の滝沢川を挟んだ左岸にある。

ナカハラとは「（上殿岡の）中心部に

ある平坦地」であらうか。ヤクシボラ小字にも隣接しているので、”神聖な場所”の意も含まれているのかもしれない。

全国地図には、ナカハラ地名は中・大字として125カ所にもあり、一般的な地名と思われる。

#### 【鳥打場】

トリウチバ。

上殿岡最西部の大瀬木境にある。

トリウチ（鳥打）には「鴨が飛んで行く時、網で捕らえるために狩人が待っている場所」の意がある（日葡辞書）。従ってトリウチバとは「小鳥を捕らえる場所」を意味しているのであろう。網で捕らえたか、あるいは鷹狩りをしたところだったと思われる。

全国地図には、トリウチバ地名は

中・大字として1カ所あるにすぎない。

宛てられている字は「鳥打場」。

#### 【阿原・阿原田】

アワラ・アワラダ。

アワラ小字は上殿岡の下新井沢川の流域でナカハラ小字の北隣にあり、アワラダ小字は上殿岡東部の毛賀沢川左岸に在る。

アワラとは、じめじめしている低地で「湿地」をいう（語源辞典）。長野県

や飛騨の方言だという。現在でも水田の多い地域である。

アワラダとは「湿地で水田のある所」

をいうか。

アワラ地名は、全国地図にも8カ所に、アワラダ地名は1カ所に中・大字として挙げられており、うち4カ所が「阿原」となっている。

#### 【杓蔵】

モクゾウ。

上殿岡にあり、ハタダ・ナカハラ・ヤクシバラなどの小字に囲まれている。

モクゾウとは何か。二説を挙げておきたい。

- ① モクゾウ←モクゾと転じたもので、モクゾは長野県の方言にもなっているが、「ごみ」をいう。このゴミには「湿地」の意がある（語源辞典）。以上から、モクゾウとは「湿地」を意味しているのかもしれない。
- ② モクは「木材」であろうか。ゾウ（蔵）は「倉庫」のことか。従って、モクゾウとは「木材を貯蔵していた倉庫のあったところ」をいうことも考えられる。

全国地図には、モクゾウ地名は載っていない。

#### 【宿野】

ヤドノ。

上殿岡のヤクシバラ小字にほぼ囲まれている。

ヤドノとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ① ヤド←ヤ（屋）・ト（処）で、「集落」をいう。ヤドノとは「集落のある比較的平らな地形で小高い所」をいうか。
- ② ヤには「流水」の意味がある。ドはト（処）である。すなわち、ヤドノとは「流水のある平坦でやや小高い土地」をいうのかもしれない。

全国地図には中・大字として1カ所だけヤドノ地名があり、「宿野」となっている。

#### 【畑田】

ハタダ。

ハタダ。

上殿岡西部にある、下新井沢川に沿った長い小字である。

ハタダとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

- ① ハタダとは、字面通りに考えれば、「畑と田のあるところ」となるが、どうであろうか。
- ② ハタダはハタ（端）・ダ（処）で「（上殿岡の）端の村境にある土地」をいうか。

全国地図には、ハタダ地名は中・大字として12カ所に挙げられておりうち11カ所は「畑田」になっている。

#### 【新屋】

シンヤ。

上殿岡の下殿岡境にある。

シンヤとは「分家のある所」をいうか。この地域でも分家・新宅とともに新屋という語もよく使われていた。

全国地図には、シンヤ地名は6カ所と意外と少ないが、中・大字にまで広がることはあまりなかったためかもしれない。

#### 【庚申原】

コウシンバラ。

上殿岡の下殿岡境にある。

コウシンバラとは「庚申様をお祀りしている平坦な原」であろう。現在は庚申様の姿は無いが、トノハラ小字にまとめられたのであろう。殿原には青面金剛像が複数祀られているという。

全国地図には、コウシンバラ地名は1カ所にだけ、中・大字として祀られている。

#### 【三本松】

サンボンマツ。

上殿岡の下殿岡境にある。

三本木は「同じ所から枝が三つまたになって出ている木。山の神木として伐ることを避ける」（国語大辞典）という。三本松にも同じような由来があったのではないだろうか。すなわち、サンボンマツとは「一株から三本の枝が出ている松が神木とされていた所」をいうのであろうか。

全国地図にも、サンボンマツ地名は37カ所に中・大字として挙げられており、うち35カ所は「三本松」となっている。

#### 【平畑】

ヒラバタ。

上殿岡の伊賀良井と下新井沢川の間の中程にある。

ヒラバタとは字面の通りで「平坦な畑地になっている所」であろうか。

#### 【孝心】

コウシン。

上殿岡の北方境にあり、南沢川と下新井沢川に挟まれている。

コウシンはコウシン（庚申）であろう。すなわち「庚申様が祀られている所」をいうのであろうか。ここには六臂の青面金剛が祀られているという。

全国地図には、コウシン地名は6カ所に挙げられており、うち3カ所が「庚申」となっているが「孝心」の字は無い。

#### 【山道】

ヤマミチ。

県道駄科大瀬木線に沿った長い小字になっている。

ヤマミチとは何か。日本国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。

① 山道には「ジグザグ模様」の意がある。この小字の境界にジグザグ模様になっているところがあることをいうのかもしれない。従って、ヤマミチとは「ジグザグ模様になっている地形のある土地」であろうか。

② ヤマミチは「仏道修行に赴く道」をいうこともある。恐らくは寺院につながる道を指していると思われる。北方に真慶寺があり大瀬木には増泉寺があるが、そのいずれかのお寺をいうのであろうか。

全国地図には、ヤマミチ地名は5カ所に中・大字として挙げられており、その全てに「山道」の字が宛てられている。

#### 【西ノ原】

ニシノハラ。

上殿岡の北西部に二カ所ある。

ニシノハラとは何か。語源辞典によりながら二説を挙げる。

① ニシノハラとは、文字通りで「西

部にある平坦地」をいうのであろう。あるいは、「ハラ小字の西の方にあるハラ」という意味合いがあるのであろうか。

- ② ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化した語で、「湿地」をいう。すなわち、ニシノハラとは「湿地の多い平坦地」をいうのかもしれないが、可能性は少ないか。

全国地図にはニシホハラ地名は中・大字として22カ所に挙げられている。

#### 【久保田】

クボタ。

上殿岡のヤマミチ小字とニシノハラ小字に挟まれている。

クボタとは「窪地になっているところ（田んぼ）」であろう。タ（田）かタ（処）かは、はっきりしない。

#### 【角畑】

カクバタ。

上殿岡のクボタ小字とヒラバタ小字の間にある。

カクバタとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ① カクは動詞カクス（隠）の語幹で「隠れ地」をいう。従って、カクバタとは「隠れ地になっている畑」か。租税のがれになっている土地であろうか。
- ② カクは「角」の字音による語でスミ（隅）の意。つまり、カクバタとは「平地の隅にある畑」をいうのであろうか。

全国地図には、カクバタ地名は載っていない。

#### 【五郎平畑・平六畑・与三郎田】

ゴロウベイバタ・ヘイロクバタ・ヨサブロウタ。

上殿岡の田畑であるが、いずれも固

有名詞に田畑が付いている小字であろう。とすれば、個人が所有する田畑と思われる。

#### 【市場屋敷】

イチバヤシキ。

上殿岡の下殿岡境にあり、フルヤシキ小字に接している。

イチバヤシキ（市場屋敷）とは「市場商人の屋敷のあったところ」を意味するものと思われる。課税の対象となる裕福な人の住宅で、市場商人はその地方の物資を買い集め、他村にこれを積み出す問屋で、この活動範囲はいくつかの市にまたがっていたという（清水三男『日本中世の村落』）。

全国地図には、イチバヤシキ地名は記載されていない。

#### 【原】

ハラ。

上殿岡のほぼ中心部にある。

ハラは「平坦な土地」をいうのであろう。この小字が生まれた時には、水利の便が悪い場所であったかもしれない。

どこにでもある地名で、全国地図にも中・大字として450カ所にも挙げられている。

#### 【堀ノ内】

ホリノウチ。

上殿岡の運動公園通りが伊賀良井を渡る地点の南側に広がっており、イチバヤシキ小字やフルヤシキ小字と接している。

ホリノウチには「中世、在地領主の屋敷地内」（国語大辞典）の意がある。従って、ホリノウチとは「有力者の屋敷があった所」を意味していると思われる。イチバヤシキで触れたように、市場商人の屋敷であったかもしれない。

全国地図には、ホリノウチ地名は中・大字として154カ所に挙げられている。

#### 【古屋敷】

フルヤシキ。

上殿岡の下殿岡境にある。

フルヤシキとは「かつて有力者が住んでいた場所」をいうのであろう。ホリノウチ小字やイチバヤシキ小字にも接している。

#### 【井端】

イバタ。

上殿岡北部の伊賀良井に沿って、その両岸にある。

イバタとは字面の通りで「井水に沿う土地」をいう。

全国地図には、イバタ地名は無い。

#### 【モグラ】

上殿岡の中心部にある小さな小字である。

モグラといえば哺乳類のモグラで、「モグラが多くて農作物に対する被害があった土地」だったという由来が地元にはあるという。

ここでは、敢えて別の仮説を提示しておきたい。

モグは動詞モグル(潜)の語幹で「水の伏流する状態」をいい、ラは「場所」を示す接尾語(以上は語源辞典)。すなわち、モグラとは「水が伏流しているところ」かもしれない。井水の伏流水などが再び湧き出していた場所があったのかもしれない。

全国地図には、モグラ地名は2カ所に中・大字として挙げられており、「茂倉」の字が宛てられている。

#### 【石樋】

イシドヨ。

上殿岡最北西部の北方境にあり、毛賀沢川(南沢川)と伊賀良井が交差す

るところにある。

イシドヨとは「石製の樋が架かっているところ」をいうのであろうか。

全国地図には、イシドヨ地名は無いがイシトイ地名は1カ所に中・大字として挙げられており、「石樋」となっている。

#### 【荒屋】

アラヤ。

上殿岡の県道駄科・大瀬木線を跨いだ小さな小字である。

アラヤとは何か。二説を挙げる。

- ① アラヤ(荒屋)で「荒れ果てた家があった所」であろうか。地名にはなりにくいと思われるがどうであろうか。
- ② アラヤ(新屋)で「分家した家のあるところ」か。岐阜・愛知の方言であるが、こちらの方が可能性は高い。

全国地図にはアラヤ地名は127カ所に中・大字として挙げられており、宛てられている字は、「荒屋」は34カ所、「新屋」は43カ所となっている。

#### 【鍛冶屋】

カジヤ。

上殿岡にあり、県道駄科・大瀬木線に沿っている。

カジヤとは「金属を打ちきたえて、刃物・馬具・農具・釘などをつくること」を意味するか。

全国地図には、カジヤ地名は82カ所に中・大字としてあげられている。

#### 【南畑】

ミナミハタ。

上殿岡の県道駄科・大瀬木線の南側にある。

ミナミハタのミナミは方角を示しているものと思われる。従って、ミナ

ミハタとは「南の方にある畑地」を意味しているのであろう。基準になっているのは神明宮か。

全国地図には、ミナミハタ地名は8カ所に中・大字として記載があり、いずれも「南畑」の字を宛てている。

#### 【道端】

ミチバタ。

上殿岡の運動公園通りの北西側にあり、これと平行に走る道路の傍にある。

ミチバタとは、文字通りで「道路に沿った土地」をいう。ミチバタ小字の発生時にはこの道路も存在していたことになるので、この道路も中近世にはあった道であろう。

ミチバタ地名は全国地図には3カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【橋場】

ハシバ。

上殿岡の神明宮近くにあり、伊賀良井に沿っている。

ハシバとは「橋が架かっていたところ」をいうのであろうか。伊賀良井を渡る橋で、ミチバタ小字の道路が伊賀良井を渡る地点に当たる。

#### 【山屋】

ヤマヤ。

上殿岡の伊賀良井の左岸にあり、神明宮の境内にも懸かっている小字であろうか。

ヤマヤとは何を意味しているのか。二説を挙げておきたい。

- ① 江戸には山屋という造酒屋や豆腐屋があったという（国語大辞典）。上殿岡のヤマヤも固有名詞である可能性がある。従って、ヤマヤとは「有力者の屋敷があった所」であろうか。近くにはイチバヤシキ小字もあるので市場商人か、ある

いは庄屋クラスの村の有力者か。

- ② ヤ（接頭語で美称）・マヤ（馬屋）で「馬継ぎ所があった所」かもしれない。中世以降、自然発生的に営まれた民間の馬継ぎ所をマヤ（馬屋）と呼んでいたという（語源辞典）。

あるいは、ヤ（菴）を「流水」とみると、ヤマヤは「井水の傍の馬屋」になる。

全国地図には、ヤマヤ地名は37カ所に中・大字として挙げられており、うち15カ所に「山屋」、22カ所に「山谷」の字が宛てられている。

#### 【西垣外】

ニシガイト。

上殿岡北西部の国道153号線のバイパスと県道駄科・大瀬木線の間にある。

ニシガイトとは何か。二説を挙げる。

- ① ニシガイトとは字面の通り「（上殿岡の）中心から西の方にある有力者の屋敷があったところ」か。
- ② ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化した語で「湿地」をいう（語源辞典）。従って、ニシガイトとは「湿地もある有力者の屋敷跡」を意味するか。

全国地図にはニシガイト地名は6カ所に挙げられており、そのすべてに「西」の文字が入っている。

#### 【辻場】

ハズシバ。

上殿岡最北西端の伊賀良井沿いにある。伊賀良井はここで南沢川（毛賀沢川）と交差している。

ハズシバ地名は全国地図には記載がなく、辞書類にも載っていない。

ハズシバのハズシは動詞ハズス

(外)の連用形が名詞化した語で、バ(場)は「場所」のこと。従って、ハズシバとは、伊賀良井の水量が多くなりすぎた時や河流で井の改修をする時に、ここで水を毛賀沢川に逃がしたのであろう。すなわち、ハズシバとは「井水の水量を調整する場所」であろうか。

この地域の井水に沿った土地の小字名になっている。伊那谷南部の特徴的な小字名であろうか。

#### 【八幡免】

ヤワタメン。

上殿岡の最北端にあり、北方境・育良町境に接している。

ヤワタメンとは何か。二説を挙げる。

①ヤワタメンとは「八幡社の神事やお宮の維持費用に充てるための免田」をいうか。上殿岡には八幡社はないが、下殿岡や中村にはあり、北方や三日市場でも合祀社や末社になっている。

③あるいは、ヤハ(柔)・タ(田)・メ

ン(免)で、「毛賀沢川の氾濫原で災害地帯にある湿田であるために租税の減免されたことのある土地」かもしれないが、可能性は少ないか。

全国地図には、ヤワタメン地名は記載が無い。

#### 【北田】

キタダ。

育良町境の上殿岡の最北端にある。

キタダとは文字通り「上殿岡の北部にある田んぼ(ところ)」を意味するものと思われる。

全国地図には、中・大字として29カ所に挙げられており、その全てに「北田」の字が宛てられている。

#### 【赤麦田】

アカムギダ。

上殿岡北部のキタダ小字の南隣にある。

アカムギダとは何か。二説を挙げる。

①ムギタ(麦田)は「米麦の二毛作の行われる田」(国語大辞典)をいい、アカ(赤)は土壌の色か。従って、アカムギダとは「二毛作田となっている赤土の土地」をいうか。

②アカはアガリ(上)の略で「微耕地」をいう(語源辞典)。すなわち、アカムギダとは「二毛作田のある少し高い丘」か。

全国地図には、アカムギダ地名は載っていない。

#### 【新井・荒井】

アライ。

いずれも上殿岡の北部にあり、すぐ近くに並んでいる。

アライとは、双方ともに「新しく引いた井水のあるところ」の意であろうか。伊賀良井から分けた井水があったのであろう。

全国地図には、アライ地名は133カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【日影・日影田】

ヒカゲ・ヒカゲダ。

ヒカゲ小字は上殿岡の神明宮の西側にあり、現在は多くが畑になっている。ヒカゲダ小字は伊賀良井左岸にある。

これらの小字は共に「日当たりのいい土地」をいうのであろう。ヒカゲには、正反対の二つの意味があるが、ここは樹木が繁っていなければ日陰にはなりにくい場所ではないだろうか。

#### 【中屋田】

ナカヤダ。

上殿岡の北部にある。

ナカヤ（中屋）は「（上殿岡）村の中心となるような有力者の家」をいうのであろう。従って、ナカヤとは「村の有力者が所有している田んぼ」をいうのであろう。

全国地図には、ナカヤダ地名は記載が無い。

#### 【善門田】

ゼンモンダ。

上殿岡最北部の育良町境にある小さな小字である。毛賀沢川右岸になる。

ゼンモンはゼンモン（禪門）か。「禪宗。在俗のまま剃髪して仏門に入った男子」（広辞苑）をいう。従って、ゼンモンダとは「禪宗寺院の所有田」を意味するか。あるいは在俗のまま仏門に入った男子が耕作をしていたのかもしれない。

全国地図には、ゼンモンダ地名は記録されていない。

#### 【三ツ田】

ミツダ。

上殿岡最北部にあり、ゼンモンダ小字の東隣にある。現在は国道 153 号線バイパスになっている。

ミツダとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

- ① ミツダとは「三枚の田んぼが集まっていた所」であろうか。クボ小字を越えた東側にフタツダ（二ツ田）小字があるので、ミツは数字を表していると考えていいのかもしれない。
- ② ミツダ←ミズ（水）ダ（処）と転じた語で、「湿地」を意味するか（語源辞典）。フタツダ小字の名前と連動して転訛したとも考えら

れる。

全国地図には、ミツダ地名は 1 カ所にだけ中・大字として記載されている。

#### 【久保】

クボ。

上殿岡北部のフタツダ小字とミツダ小字の間にある細長い小字である。

クボとは文字通り「窪んだ土地」をいうのであろう。

どこにでもある小字である。

#### 【漆田】

ウルシダ。

上殿岡の最北部にあり、北方と育良町との境になっていて毛賀沢川が流れている。

ウルシダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

- ① ウルシダはウルシ（漆）・ダ（処）で「漆の木を栽培していたところ」であろうか。竜丘にもウルシバタ小字がある。
- ② ウルシはウル（潤）・シ（接尾語）で「湿地」をいう（語源辞典）。従って、ウルシダとは「湿地になっているところ（田）」を意味する。

全国地図には、ウルシダ地名は 3 カ所に中・大字として挙げられており、うち 2 カ所が「漆田」となっている。

#### 【半場】

ハンバ。

上殿岡の最北部にあり、現在は国道 153 号線バイパスが通っている。

ハンバはハバと同じで崩壊地をいい、「崖下に谷川が流れているところ」（語源辞典）をいうのであろうか。谷川は北端を流れている毛賀沢川を指すものと思われる。

ハンバ地名は全国地図に 10 カ所



が中・大字としてあげられており、うち6カ所に「半場」の字が宛てられている。

#### 【二ツ田】

フタツダ。

上殿岡北部にあり、クボ小字を北東側に越えたところにミツダ（三ツ田）小字がある。

フタツダとは何か。二説を挙げる。

- ① フタツダとは字面の通りで「田んぼが二枚ある土地」を意味するか。
- ② フタは副詞フタフタの「液体のしたたり落ちる様子」をいうか（語源辞典）。ツは「場所」を示す接尾語。従って、フタツダとは「田んぼで湧水のあるところ」もありうるか。

全国地図には、フタツダ地名は1カ所だけ中・大字として挙げられており、その文字は「二ツ田」となっている。

#### 【北向田】

キタムキダ。

上殿岡のフタツダ小字の南西側にある。

キタムキダとは「北向きの緩傾斜地にある土地（田んぼ）」か。北の方にある毛賀沢川に向かって緩い傾斜地になっていたのであろうか。

全国地図には、キタムキダ地名は載っていない。

#### 【溝跨】

ミゾマタギ。

神明宮の北方にあり、小字内にはカインズホームの駐車場もある。

ミゾマタギとは何か。二説を挙げたい。

- ① マタギは動詞マタグ（跨）の連用形で名詞化した語か。ミゾマタギとは字面の通りで「跨ぐことがで

きるほどの井水が流れているところ」をいうか。

- ② マタギはマタ（又）・ギ（「場所」接尾語）で、ミゾマタギとは「井水が枝分かれしているところ」か。現地がどうなっているかは未確認。

全国地図には、ミゾマタギ地名は記載が無い。

#### 【殿原】

トノハラ。

この小字内には、上殿岡の神明宮がある。

トノハラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ① トノは「貴人の屋敷のあった緩傾斜地」をいうか。上殿岡の中心となっていた有力者が住んでいたのであろうか。
- ② トノ←タナ（棚）と転訛した語で、「棚状の地形になっている神聖な土地」か。ハラには「神聖な地」という意味が含まれているという。

全国地図には、トノハラ地名は4カ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「殿原」の字が宛てられている。

#### 【湯川田】

ユカワダ。

上殿岡中部の運動公園通りを挟んだ広い小字になっている。

は（湯）には「溝」の意がある（語源辞典）。すなわち、ユカワダとは「人工の溝を流れる井水のある田んぼ（ところ）」をいうのであろう。

全国地図には、ユカワダ地名は無いが、ユカワ地名は25カ所にあり、うち23カ所には「湯川」の字が用いられている。

【宮下・宮ノ前】

ミヤシタ・ミヤノマエ。

上殿岡の神明宮の北東側と東側にある。

いずれも字面の通りで、ミヤシタとは「お宮の下の方の土地」をいい、ミヤノマエとは「お宮の前方の土地」をいう。いずれも神明宮から緩い傾斜地を下る方向を指していると思われる。

民衆が神宮に望んだのは農作の願いだけでなく、至福・長命・武運など多方面に及んだ。こうした民衆の生な願望は内宮・外宮に直接むけられるより別宮などを対象とした。近世に内宮80社、外宮40社の末社の活動に連なるものである。これらの末社は明治になりすべて排除されたという（民俗大辞典）。伊那谷南部でも、シンメイという地名は残っていても神社そのものは消えているところがあるのは、このことと関連しているのであろう。

【清水井】

シミズイ。

上殿岡の下殿岡境にある傾斜地に沿った細長く小さな小字である。

イ（井）には「泉や流水から水をくみ取る所」の意もある（語源辞典）。従って、シミズイとは「自然湧水のある所で、洗い物などをしていた場所」を意味しているものと思われる。

全国地図には、シミズイ地名は載っていない。

【赤土田】

アカツチダ。

上殿岡にあり東端は毛賀沢川になっている。

アカツチダとは字面のとおり「赤土になっている所（田んぼ）」であろうか。

全国地図には、なぜかアカツチダ地

名は記載が無い。

【祢宜屋田】

ネギヤシダ。

上殿岡のミヤノマエ小字の南東隣にある。

祢宜とは神社に奉仕する神職をいい、一般には神職の総称として用いる。従って、ネギヤダとは「祢宜の所有田」か。祢宜は変わってもネギヤダは引き継いでいったのであろう。この祢宜は神明宮に奉仕していたものと思われる。

全国地図には、ネギヤダ地名は無い。

【蓮臺場】

レンダイバ。

上殿岡の運動公園通りが伊賀良井を渡る北隅にある。

蓮台場は「墓地。火葬場」をいう（国語大辞典）。ここのレンダイバは「墓地のある所」を意味するか。現在でも墓地はある。

全国地図には、レンダイバ地名も記載されていない。

【西】

ニシ。

上殿岡の運動公園通りが伊賀良井を渡る東隅にある。

ニシとは、東方にあるヒガシ（東）小字と対にして考えなければならぬだろう。従って、ニシとは「ヒガシ小字の西の方にある土地」としておきたい。本家と分家の関係であろうか。

全国地図には、ニシ地名は162カ所にも中・大字として挙げられており、うち161カ所が「西」となっている。

【一畝田】

イトセダか。地名大鑑にはシトセタとある。

イ(シ)トセダとは何か。二説を挙げておきたい。

① シト(湿)は「湧水」で、セタ(瀬田)は「浅い川」の意か(語源辞典)。従って、シトセタとは「浅い川が流れている湿地」であろうか。

② イトセダ←イッセダ(一畝田)と転訛したと考えたい。つまりイトセダとは「面積が一畝ほどあった田んぼ」をいうのかもしれない。

全国地図には、イトセダ地名は無いがヒトセダ地名は1カ所だけ中・大字として挙げられており、「一畝田」の字が宛てられている。

#### 【角田】

カドダ。

上殿岡の県道駄科・大瀬木線と伊賀良井の間にある。

カドダとは何か。二説を挙げたい。

① カドダ←カハ(川)・ド(処)・ダ(田)と転訛したもので(語源辞典)、「川辺の田んぼがあるところ」であろうか。

② カドダ(門田)で「門の前に田んぼがあるところ」(国語大辞典)か。

全国地図にはカドダ地名の記載はないが、カクダ地名は2カ所に中・大字として挙げられ、うち一つは「角田」となっている。

#### 【溝口】

ミゾグチ。

上殿岡の伊賀良井左岸にある。

ミゾグチとは、文字通りで「井水からの取り入れ口のあるところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ミゾグチ地名は17カ所、ミゾクチ地名は12カ所にあり、うち26カ所に「溝口」の字が宛

てられている。

#### 【冷田】

ヒエダ。

上殿岡のイバタ(井端)小字の北側に2カ所ある。いずれも段丘崖の湧水がある所であろうか。

ヒエダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

① ヒエダ(稗田)で、「田稗を栽培していた田んぼ」をいうのである。

田稗は水温の低い田んぼでも収量がそれほど落ちないといわれている。

② ヒエダ(冷田)で、「水温の低い田んぼ」をいうか。

全国地図には、ヒエダ地名は34カ所に中・大字として挙げられており、うち26カ所に「稗田」、3カ所に「冷田」の字が宛てられている。

#### 【大坪・大坪後】

オオツボ・オオツボアト。

上殿岡の南東部にあり、県道駄科・大瀬木線の沿線にある。

ツボ(坪)には「生産している所」の意がある。群馬・山梨・上田の方言であるという(国語大辞典)。従って、オオツボとは「耕作地の大きな区画地」をいうか。

全国地図にも、オオツボ地名は62カ所に中・大字として挙げられており、その全てが「大坪」となっている。

#### 【柳田】

ヤナギダ。

上殿岡のオオツボ小字と小川に囲まれている。

ヤナギダとは「川べりなどに柳が自生している田んぼ」であろうか。

全国地図にもヤナギダ地名は20カ所に中・大字として挙げられてお

り、その全てに「柳田」が宛てられている。

#### 【下洞】

シモボラ。

上殿岡の下殿岡境にある。

シモボラとは何か。二説を挙げる。

①シモボラとは、字面の通りで「(緩傾斜地の)下の方にある小さな洞」か。小川が流れており、わずかな窪地になっていることを指すのであろうか。

③ホラ←ハリ(墾)と転じた語(語源

辞典)で、シモボラとは「下の方にある開墾地」をいうのかもしれない。

全国地図には、シモボラ地名は2カ所があり、いずれも「下洞」となっている。

#### 【丸千町】

マルセンマチ。

上殿岡の南東部にあって、下殿岡境に近い。

マルセンマチ←マルセマチと音便化した語であろうか。セマチは「畔などに囲まれた田の一区画」をいう(国語大辞典)。岐阜の方言である。

従って、マルセンマチとは「畔などで囲まれて丸い形をした田んぼがあったところ」を意味するのであろうか。

しかし、全国地図には、マルセマチ地名もマルセンマチ地名も記録されていない。

#### 【千本柿】

センボンガキ。

上殿岡の南東部にある。

センボンガキとは「たくさんの柿の木が植えられている所」をいうのであろう。柿の果樹園があった所か。

伊賀良では穀類以外の農産物で最も多かったのは柿であったらしい。中

馬などに運ばれて干柿が、江戸や三河・美濃などへ輸送されていったという。江戸では立石柿の名で呼ばれ正月には欠かすことのできない食品であったという(村史)。

全国地図にはセンボンガキ地名は載っていない。

#### 【東前・東・東後】

ヒガシマイ・ヒガシ・ヒガシアト。

ヒガシとは、「ニシ小字の東の方にある土地」をいうか。ニシ(西)とヒガシ(東)とは、本家と分家の関係かもしれない。

ヒガシマイとは「ヒガシ小字の前方の土地」をいい、ヒガシアトとは「ヒガシ小字の後方の土地」をいう。前方は緩傾斜地の下の方角を指しているのであろうか。

全国地図には、ヒガシ地名は196カ所にも中・大字として挙げられており、その全てに「東」の字が宛てられている。比較的が多い地名である。

#### 【神田】

カンダ。

上殿岡のヒガシアト小字の北隣にある。

カンダ←カミダ(神田)と撥音便化したものであろう。カミダとは「神社に所属している田。この田からの収穫で神事や造営の費用、神職の給料などをまかなう」(国語大辞典)ものであったと思われる。免租地であったであろう。神社とは上殿岡の神明宮を指す。

全国地図には、カンダ地名は36カ所に中・大字として挙げられているが、「神田」の字が宛てられている所は無い。

#### 【八畝田】

ハッセダ。

上殿岡のユカワダ小字の東隣にある。

ハッセダとは「8畝の面積の田んぼがあった所」か。地名発生時では広い田んぼという印象があったのであろうか。

全国地図には、ハッセダ地名は無い。中・大字にはなりにくい地名であったのかもしれない。

#### 【杉洞】

スギボラ。

上殿岡の毛賀沢川へ下る右岸の傾斜地にある。

スギボラとは何か。二説を挙げたい。

- ① スギボラとは、字面の通り「杉が自生していた洞のある所」か。
- ② スギ←スキと濁音化した語で、スキは動詞スク（剥）の連用形が名詞化したもので、「崩れ地」をいうのかもしれない。従って、スギボラとは「崩れ地のある洞」を意味することも考えられる。

全国地図にはスキボラ地名が1カ所にだけある。

#### 【山畔】

ヤマグロ。

上殿岡に二カ所ある。一つは毛賀沢川沿岸の傾斜地に、もう一つは毛賀沢川溪谷に臨む段丘端の緩傾斜地にある。

ヤマグロとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

- ① ヤマは「林」のことで、グロ←クロで「斜面」をいうか。つまり、ヤマグロとは「林になっている斜面」をいうのであろうか。
- ② クロには「そば。傍ら」の意があり、伊那谷南部でもよく使われて

いる。すなわち、ヤマグロとは「林の傍の土地」となるがどうであらうか。

全国地図には、ヤマクロ地名が1カ所にだけある。

#### 【唐松】

カラマツ。

上殿岡の段丘面にある。

カラマツといえばマツ科のカラマツということになるが、唐松は本州中部の深山に自生しているというから、上殿岡に生えていたことは考えられない。また各地に広く植林されていたというが、ここで庭木や盆栽にしていたことも考えにくい。

カラはカラ（涸）で「水が乏しい」の意があり、マツはマチ（町）の転訛した語で「田の一画」をいう（語源辞典）。すなわち、カラマツとは「水不足になりがちな水田があった所」と解したいが、どうであらうか。

全国地図には、カラマツ地名は中・大字として5カ所に挙げられており、うち3カ所には「唐松」の字が宛てられている。

#### 【教円田】

キョウエンダ。

上殿岡の段丘面にある。

キョウエン（教円）は固有名詞か。僧侶の名前であらうか。であればキョウエンダとは「教円の所有田」を意味することになる。寺田であらうか。

どこの寺か確証はないが、恐らくは下殿岡にある円通寺であらうか。

当然のことながら、全国地図には、エンキョウダ地名はない。

#### 【長田】

ナガタ。

上殿岡東部にある。

ナガタとは文字通り、「細長い土地

(田んぼ)」を意味する。

全国地図には、ナガタ地名は中・大字として108カ所も挙げられており、うち55カ所に「長田」の字が宛てられている。伊那谷南部にも何カ所かで見られる。

#### 【嘉吉】

カキチ。

上殿岡東部にあって下殿岡境に近い。

カキチとは何を意味するのか。三説を挙げる。

- ① カキチ（嘉吉）は固有名詞かもしれない。つまり、カキチとは「嘉吉の屋敷があった所」か、「嘉吉の所有地」であろうか。固有名詞そのものであることは気になるが。
- ② カキ（垣）・チ（地）で、「垣根があった所」かもしれない。居住地があったか、あるいは他に囲わなければならないような土地であったことも考えられる。
- ③ カキチ←カケ（欠）・チ（地）と転じた語で、「崩れたことがあった土地」であった可能性も否定はできない。

全国地図にはカキチ地名は記載が無い。

#### 【坂尻】

サカジリ。

上殿岡東部の毛賀沢川氾濫原の傾斜地にある小さな小字である。

サカジリとは字面の通りで「傾斜地の麓の土地」をいうのであろう。

全国地図には、サカジリ地名は4カ所に中・大字として挙げられており、いずれも「坂尻」となっている。

#### 【狐洞】

キツネボラ。

上殿岡の毛賀沢川とその支流の開析谷傾斜面にある。

キツネボラとは何か。二説を挙げておきたい。

- ① キツネボラとは、字面の通りで「狐がいるといわれている洞」か。
- ② キツネ←キツレ←クヅレ（崩）と転訛したもので「崩れ地」をいう（語源辞典）。従って、キツネボラとは「崩崖のある洞」ということになるが、どうであろうか。

全国地図には、キツネボラ地名は載っていない。ホラそのものが、伊那谷の特徴的な地名であるためなのかどうか。

#### 【細畑】

ホソバタ。

上殿岡の毛賀沢川氾濫原の山つけに沿った細長い小字である。

ホソバタとはホソ（細）・バタ（端）で「氾濫原の平地の縁になっている土地」をいうのであろう。

全国地図には、ホソバタ地名は4カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【毛賀沢・下毛賀沢】

ケガサワ・シモケガサワ。

シモケガサワ小字は毛賀沢川氾濫原に、ケガサワ小字は氾濫原南側の斜面にある。

ケガは動詞ケガル（汚）の語幹で「傷がつく」意（語源辞典）だという。従って、ケガサワとは「崩壊地のある谷川が流れているところ」であろう。

シモケガサワとは、「ケガサワの下流側にある土地」を意味するのであろう。

全国地図には、ケガサワ地名は記載されていない。

#### 【車屋】

クルマヤ。

上殿岡の毛賀沢川沿岸にある小さな小字である。

クルマヤとは、上伊那郡・岐阜県・静岡県磐田郡の方言でもあり、「水車小屋のあるところ」をいう。県にもクルマヤ小字はある。

全国地図には、クルマヤ地名は1カ所にだけ中・大字として記載されている。

#### 【後田】

ウシロダ。

上殿岡東部の毛賀沢川氾濫原にあり、クルマヤ小字の北側で山よりになる。

ウシロダとは「後ろにある土地（田んぼ）」をいうのであろうが、何の後ろを意味するのか。やはり水車小屋であろうか。酒造りにとっても一般住民にとっても水車小屋は必要なもので目立つ存在であったのだろうか。

全国地図には、ウシロダ地名は32カ所と意外と多い。その全てに「後田」の文字が宛てられている。

#### 【牧】

マキ。

上殿岡の県境の四カ所にあり、県の段丘と毛賀沢川氾濫原との間の段丘崖で気賀沢川にも接している。かつては、一つに繋がっていた小字か。

マキとは何か。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

- ① マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「河流が巻いている土地」をいうか。この付近は氾濫原も広く、気賀沢川が曲流していた時代もあったと思われる。
- ② 動詞マク（撒）には「散らし落とす」の意があり、「崩崖」をいう。マキとは「崩崖のある土地」とも考えられる。

- ③ 文字通りのマキ（牧）で、「馬の牧場があったところ」も考えられないわけではない。

全国地図にはマキ地名は84カ所が中・大字として挙げられており、うち51カ所には「牧」の字が宛てられている。

#### 【鉾ヶ谷】

ホコガタニ。

上殿岡最東端の毛賀沢川左岸の急傾斜地にある。

ホコガタニとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ① ホコはホ（秀）・コ（処）で、ホコガタニとは、「高いところがある谷になっているところ」か。独立峰があるわけではないが、上殿岡側の氾濫原から県の段丘を仰げば、そのように見えたということであろうか。
- ② ホコ←ボコ（凹）と清音化した語で、ホコガタニとは「凹地になっているような谷のあるところ」か。これは県の段丘端から俯瞰したときの地形であろう。

全国地図には、ホコガタニ地名は記録されていない。

#### 【道下】

ミチシタ。

上殿岡北東部の小さな小字である。毛賀沢川氾濫原にあり、道路と川の間にある。

ミチシタとは、文字通り「道路の下側にある土地」を意味する。

一般的な地名で、全国地図にも21カ所で中・大字として挙げられており、その全てで「道下」となっている。

#### 【河原・河原畑】

カワラ・カワラバタ。

上殿岡の毛賀沢川左岸にある。カワ

ラ小字は二カ所、その間にカワラバタ小字が挟まれている。

カワラは文字通り「河原になっている土地」であり、カワラバタは「河原にある畑地」をいうのであろう。

どこにでもある地名で、全国地図にも、カワラ地名は126カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【一ツ田】

ヒトツダ。

上殿岡の毛賀沢川氾濫原の段丘との境にある小さな小字である。

ヒトツダとは何か。三説を挙げる。

- ① 文字通りで「一枚の田んぼがあるところ」としたいが、田んぼがここにあったのかどうかははっきりしない。あるいは「一区画になっている土地」をいうか。
- ② ヒトは形容詞ヒトシの語幹で「凹凸がないさま」をいう(語源辞典)。ツは助詞(ノ)で、ダはタ(処)。ヒトツダとは「洞のなかの緩傾斜地」をいうのであろうか。
- ③ この地域ではシ→ヒと転ずることがある。ヒト←シト(湿)と転訛したか。ヒトツダとは「湿地になっているところ」をいうのかもしれない。

全国地図にはヒトツダ地名は1カ所に挙げられているが、「一ツ坦」となっている。

#### 【牧畑】

マキバタ。

国道153号線飯田バイパスの上殿岡交差点にある。

マキバタとは何か。二説を挙げる。

- ① マキ(牧)・バタ(畑)で、「マキ小字の近くにある畑」を意味するか。
- ② マキ(牧)・バタ(端)で「マキ

小字の近くの土地」をいうか。

全国地図にはマキバタ地名はないが、マキハタ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられている。

#### 【向坂】

ムコウザカ。

上殿岡の最北端部にある小さな小字である。

ムコウザカとは「向こう側にある坂道」を意味するのであろう。向こう側とは、上殿岡の中心部に近い南の方からみて、毛賀沢川かあるいは毛賀沢川の谷の向こう側ということであろう。あるいは、この毛賀沢川の洞は鼎になっているので、他村の向こう側ということかもしれない。

全国地図にも、ムコウザカ地名は3カ所に中・大字として挙げられていて、いずれも「向坂」の字が宛てられている。

#### 【土取】

ツットリ。

三日市場の大瀬木境にある。

ツットリ←ツチトリと促音便化したものであろう。では、ツチトリとは何か。由来解釈を二つ。

- ① ツチトリとは「土を取ったところ」をいう。つまり、土取場を意味する。地元で伝えられている由来。
- ② 敢えて、もう一つの説を挙げておきたい。ツチは「泥」さらに「湿地」をいい、トリは動詞トル(取)の連用形が名詞化した語(以上は語源辞典)。以上から、ツチトリとは「浸食で崩れた所がある湿地」かもしれない。この小字内を新川が流れている。

#### 【坂下】

サカシタ。

三日市場の奥位神社の北側の段丘



崖とその麓にある。

サカ(坂)は「一方は高く一方は低く、傾斜している道」(広辞苑)をいう。従って、サカシタとは「坂道の下側の土地」をいうのであろう。

全国地図には、サカシタ地名は83カ所にあり、うち82カ所には「坂下」の字が宛てられている。

#### 【井口】

イグチ。

三日市場の奥位神社の東側にある。

イグチ(井口)は「中世の灌漑制で、河川など用水路から田地へ引く、用水の取入れ口のこと」(国語大辞典)をいう。従って、ここのイグチも「井水の取入口のあったところ」をいうのであろう。

全国地図には、イグチ地名は12カ所にあり、うち11カ所は「井口」になっている。

#### 【宮ノ前】

ミヤノマエ。

三日市場の奥位神社の東側にある。緩傾斜地をゆっくりと下る方向になっている。

ミヤノマエとは字面の通りで、「お宮の前にある土地」をいう。

#### 【日影】

ヒカゲ。

三日市場の奥位神社の南東側にあり、大きな小字一つと小さな小字が四カ所にあるが、かつては一つに繋がっていたものと思われる。

ここのヒカゲは「日当たりのよくない土地」をいうのであろうか。段丘の北東向き斜面にある。

#### 【立埜】

タツノ。

三日市場集落センターと奥位神社を含む広い小字になっている。

タツはタチ、タテの転で「高くなった所」をいい、ノ(野)は「緩傾斜地になっている野原」か(以上は語源辞典)。

従って、タツノとは「緩傾斜地の段丘になっているところ」を意味するのであろう。

全国地図には、タツノ地名は15カ所に中・大字として挙げられており、うち10カ所に「立野」、3カ所に「辰野」の字が宛てられている。

#### 【清水】

シミズ。

三日市場の奥位神社東方の斜面の麓にある。

シミズとは「自然湧水のある所」をいう。段丘麓には湧水地が多い。

シミズ小字が多いのは、それだけ飲料水や水源に注意を払っていたということであろうか。

#### 【下ノ城】

シモンジョ。

三日市場の新川右岸の中位段丘の平坦地にある。

シモンジョ←シモノジョと音便化したか。ではシモノジョとは何か。三説を挙げたい。

- ① シモ(下)は「低い所」をいう(国語大辞典)。シモノジョ←シモノショウ(下庄)とさらに転訛した語で、「低地になっている庄園であった所」をいうか。
- ② シモは動詞シモル(滲)の語幹から「湿地」のこと(語源辞典)。従って、シモノジョとは「湿地になっている所」かもしれない。
- ③ もしかしたら、ここに城があったかもしれない。すなわち、シモンジョウとは「城のあった低地」であったことも考えられる。近くに

はホリジリ小字もある。

全国地図には、シモンジョ地名は載っていない。

#### 【家下】

ヤシタ。

三日市場の段丘の北東向き段丘崖やその麓に、五カ所ある。大きく分けると、段丘崖とその麓の平坦地に二カ所にまとまるか。

ヤシタとは何か。二説を挙げる。

① ヤ（屋）・シタ（下）で、「居住地の下方にある土地」をいう。すぐ上の方にはヒカゲガイト（日影垣外）小字があるので、その下方の土地を意味するか。段丘崖の下側にあるヤシタ小字群はこれだろうか。

② ヤ（菴）・シタ（下）で、「湿地の下方にある土地」か。すぐ上には、オオヌマ（大沼）小字がある。段丘崖の麓の平坦地にあるヤシタが該当しそうだ。

全国地図にはヤシタ地名が4カ所に挙げられているが、「家下」とあるのは1カ所だけ。

#### 【前田】

マエダ。

三日市場の新川の段丘に二カ所ある。

マエダとは「前の方にある土地（田んぼ）」と思われる。その基準になっているのが何なのかははっきりしない。二カ所とも近くにジンデン（神田）小字があるので、「神田の前」を意味するのであろうか。あるいは、かつてはもっと大きな小字であって、奥位神社近くまで広がっていたとすれば、「奥位神社の前」の意となるがどうか。

#### 【八百田】

ハッピークダ。

小字図にはないが、地番から判断するとオオヌマ（大沼）小字の近くにあるか。

ハッピークとは「物事の数の多いことをいう語」（国語大辞典）である。

従って、ハッピークダとは「たくさん田んぼがあるところ」を意味するのであろう。

全国地図には、ハッピークダ地名もハッピークダ地名も記載が無い。

#### 【大沼】

オオヌマ。

三日市場の新川の段丘にあり、奥位神社のある段丘の麓になっている。二カ所に分かれているが、小字発生時には一つに繋がった大きな小字であったと思われる。

ヌマは「沼地。湿地」をいう（語源辞典）。浅い水深の沼があったかもしれないし、なくても湿地であればそれをヌマと叫んだのであろう。

オオヌマとは「広い面積のある沼地があったところ」としておきたい。

#### 【溝端】

ミゾバタ。

新川の段丘の南西端にある。奥位神社の段丘の麓になる。

ミゾは「地を細長く掘って水を流す所」（広辞苑）をいう。井水のことであろう。ミゾバタとは「井水の傍の土地」を意味するものと思われる。

全国地図には、ミゾバタ地名は、2カ所に中・大字として挙げられており、うち1カ所に「溝端」の文字が宛てられている。

#### 【神田】

ジンデン。

三日市場の新川の段丘に二カ所ある。

ジンデンは「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」をいう（広辞苑）。むろん免租地であったと思われる。従って、このジンデンとは「神田のあった所」を意味する。

#### 【沖田】

オキタ。

三日市場の新川の段丘、オオヌマ小字の東隣と北側に二カ所ある。

オキタとは何を意味するのか。三説を挙げておきたい。

- ① オキタ←オギタと清音化した語で、「だぶだぶの田」をいう（語源辞典）。湿田である。
- ② オキ（沖）は「田畑の広い所」をいう（国語大辞典）。長野・新潟・伊勢などの方言であるという。従って、オキタとは「広い田んぼのあるところ」をいうのであろうか。一枚の田んぼが広いことを意味しているのであろう。
- ③ オキ（沖）には「南東」の意もある（国語大辞典）。愛知県の方言であるという。あるいは、オキタは「（奥位神社の）南東にある田んぼ」を意味していることがあるかもしれない。

全国地図には、オキタ地名は21カ所に中・大字として挙げられており、うち20カ所には「沖田」の字が宛てられている。

#### 【沖】

オキ。

三日市場のオキタ小字の近くに二カ所ある。

オキはオキタ（沖田）の由来解釈の②③が該当する。すなわち、二説を繰り返すと、①「広い田んぼになっている土地」と②「奥位神社の南東の方に

ある土地」を意味することになる。

全国地図には、オキ地名は95カ所も中・大字として挙げられており、うち90カ所が「沖」となっている。

#### 【宮ノ崎】

ミヤノサキ。

新川の段丘の南東側の末端部にあり、新川の支流に挟まれている。

ミヤノサキとは「神田のある段丘の末端部」を意味するのであろうか。奥位神社は、この小字の上の段丘面にあつて、この小字の段丘面には神田があるだけなので、このような解釈にせざるを得ないが、どうであろうか。

全国地図には、ミヤノサキ地名は3カ所にある。

#### 【丸山】

マルヤマ。

三日市場のミヤノサキ小字のある段丘末端部の南側の洞を一つ越えた段丘上にある。

マルヤマとは、「形の丸くみえる山のある所」であろう。ただ単に形が丸いだけでなく、山の神などが祀られていたところではないかと思われる。

マルヤマ小字は伊那谷南部にも多いが、全国地図にも352カ所にも中・大字として挙げられている。

#### 【横枕】

ヨコマクラ。

三日市場の新川右岸の氾濫原にある。

ヨコマクラとは「横に寝て枕するような形になっている土地」（国語大辞典）を意味するか。新川と段丘崖の間になっているので、結果的には「地形の都合上、地割の幹線に併行して区分できなかった部分」（語源辞典）にはなっている。

ヨコマクラもこの地域にはどこに

でもある小字名であるが、全国地図には18カ所と比較的少ないのは面積の関係で中・大字となりにくかったのであろうか。

#### 【新川】

シンカワ。

三日市場の新川左岸にある。現在も水田が多く、一部は畑になっている。

シンカワ←シモカワ（下川）と撥音便化した語であろうか。であれば、シンカワとは「（天竜川の）下流側にある川」で、天竜川の上流側にある毛賀沢川に対する”下川”と思われる。このモー（ム）の変化である、オ段からウ段へ変わるのは、各時代にわたって極めて多い例だという（国語学大辞典）。

全国地図には、シンカワ地名は90カ所も中・大字として挙げられており、うち88カ所は「新川」の字になっている。

#### 【サイカチ】

三日市場のヨコマクラ小字の南西隣にあり、新川の右岸となっている。

サイカチとは何だろうか。二説を挙げる。

- ① サイ←サキ（崎）と転じた語で、カチはカハ（川）・ウチ（内）で「河谷」をいう（以上は語源辞典）。従って、サイカチとは「段丘の末端部で谷になっている所」をいうか。
- ② サイカチは高さ10mにもなるマメ科の落葉高木で、本州中部以西の山野・川辺に自生しており、庭園に植えたり街路樹にしたりする。古くは果実の煎汁は染剤にし、漢方では利尿・去痰剤に使ったという。サイカチとは「サイカチが自生していた場所」であった可能

性もある。

全国地図には、サイカチ地名は中・大字として4カ所に記載がある。

#### 【貉坂】

ムジナザカ。

三日市場の新川右岸にあり、シモンジョ小字とサイカチ小字の間になる。

ムジナザカとは「よくムジナが出てくる坂道のある所」であろう。ムジナはアナグマの異称であるが、タヌキをいうこともあるという。

全国地図には、ムジナザカ地名もムジナサカ地名もない。

#### 【古屋敷】

コヤシキ。『伊賀良の地名』には「ふるやしき？」との書き込みもある。

地番でみると三日市場のムジナザカ小字の近くになるが、小字界図には見当たらない。

コヤシキとはコヤシキ（古屋敷）で、「屋敷跡になっている所」か。あるいはコヤシキ（小屋敷）で、単に「屋敷跡」か。コ（小）は、ほとんど意味をもたない接頭語か。

#### 【小屋敷】

コヤシキ。

三日市場の大瀬木境にある。

コヤシキとは何か。先にも触れたように、コ（小）はほとんど意味をもたない接頭語としたい。すなわち、コヤシキとは「屋敷跡になっている所」であろうか。現在でも居住地になっている。

全国地図には、コヤシキ地名は19カ所に中・大字として挙げられており、うち「小屋敷」が15カ所、「古屋敷」が4カ所となっている。

#### 【堀尻】

ホリジリ。

三日市場北部の新川右岸にある。

ホリジリとは何か。二説を挙げる。

- ① ホリジリとは「砦の空堀の末端部になっている所」をいうか。近くにはシモンジョ小字がある。
- ② ホリは動詞ホル（掘）の連用形が名詞化した語で「えぐり取られたような地形」（語源辞典）をいう。すなわち、ホリジリとは「抉られた崖の末端部」をういか。新川に浸食されたのであろう。

全国地図にはホリジリ地名もホリシリ地名も記録されていない。

#### 【大田】

オオタ。

三日市場のシモンジョ小字の西端の一部に張り付く、非常に小さな小字になっている。

オオタには「田植えの終わりの祝い」の意がある。長野県や佐渡の方言であるという（国語大辞典）。ここのオオタも「田植えの終わりの祝いをした所」かもしれない。おさなぶりの神事の行われたところであらうか。田んぼにしては小さすぎる。この小字が発生した当時は大きな田んぼであったことも考えられるが。

#### 【西田】

ニシダ。

三日市場の奥位神社の下の段丘面にある。

ニシダとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

- ① ニシダとは、文字通りで「西の方にある田んぼ」か。基準になっているのはシモンジョ小字であらうか。ここに砦があったとすれば、可能性は高い解釈になる。
- ② ニシ←ニジと清音化したか。ニジは動詞ニジム（滲）の語幹で「湿地」をいう（語源辞典）。すなわ

ち、ニシダとは「湿地にある田んぼ」をいうのかもしれない。湿地であらうか。

全国地図には、ニシダ地名は中・大字として、ニシダ地名は27カ所に挙げられており、その全てに「西田」の字が宛てられている。

#### 【瀧場】

タキバ。

三日市場の北西部にあり、新川を跨いでいる。

タキバとは「お宮の神事のために禊ぎをする場」であらうか。

伊那谷南部には多いが、全国地図にはタキバ（滝馬）が1カ所あるにすぎない。この地域の特徴的な小字の一つと思われる。

#### 【井下】

イシタ。

三日市場の大瀬木境にあり、新川が流れている。タキバ小字の上流側になる。

イシタとは「井水の下側の土地」をいうのであろう。新川から水を取り入れた井水が南に流れているが、その下側にある小字であることを意味している。

全国地図には、イシタ地名は2カ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている字は、いずれも「石田」となっている。

#### 【兵九峰】

ヒョウコウムネ。『長野縣町村字地名大鑑』にはヒョウクミネとある。

三日市場の大瀬木境にある。

なんとも分かりにくい地名である。ヒョウクムネとは何を表すのか。あやふやなところもあるが、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

- ① ヒョウ←ヒヨが長音化した語で動

詞ヒヨル（曲）の語幹で、コウ←カハ（川）が転訛した語、ムネ＝ミネで少し高くなった所をいうか。以上から、ヒョウコウムネとは「川が曲流していて、少し高い所もある土地」をいうのであろうか。

- ② ヒヨにはミネ（嶺）の意もある。クは動詞クユ（崩）の語幹。従って、「少し高い所もあって崩れ地もある土地」か。

全国地図には、ヒョウコウムネのような複雑な地名はない。

#### 【北原】

キタハラ。

三日市場北端の広大な小字である。

キタハラとは「（三日市場の）北部にある未墾の多い緩傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、キタハラ地名は91カ所が中・大字として挙げられており、うち90カ所で「北原」の字が宛てられている。

#### 【中島】

ナカジマ。

三日市場の最北端にある。上殿岡境と下殿岡境になっている。

ナカジマとは「滝沢川と新川氾濫原に挟まれた段丘の末端部が島のようにになっている所」をいう。

どこにでもある地名で、全国地図にもナカジマ地名は262カ所も中・大字として挙げられている。

#### 【天津良沢】

アマヅラサワ。

三日市場の下殿岡境にあり、滝沢川に沿った右岸の細長い小字である。

アマヅラはアマヅラ（案摩面）で「舞楽に用いる腫れた顔をした女面。またそれをかたどったもの」（国語大辞

典）をいう。従って、このアマヅラは「アマヅラの面のように脹らんで曲線を描いているように、谷川が流れている場所」をいうのであろうか。

舞楽は雅楽の楽器などを伴奏として舞われるもので、もともと宮廷や大寺社などで行われたが、その後地方へ伝播して民俗芸能となって各地に伝存しているという（神事と芸能）。

アマヅラサワ小字があるということは、この地でも舞楽が行われていた名残であろう。

全国地図には、アマヅラ地名は2ヶ所にあるが、アマヅラサワ地名は記載がない。

#### 【以奈場】

イナバ。

三日市場のキタハラ小字の段丘から降る、南東向きの段丘崖にある。

イナバとは「稲干場」をいう。”いなはざ”（伊那谷の方言）が現れる前は、日当たりのいい草刈り場などで、稲を干したのであろう。

伊那谷南部には多い小字名であるが、全国地図にも32カ所にイナバ地名は挙げられており、うち24カ所は「稲葉」で、3カ所は「稲場」となっている。

#### 【流寄】

ナガレザキ。

三日市場の新川氾濫原にあり、ミヤノサキ小字を囲む低地になっている。新川の支流が新川に合流するところでもある。

ナガレは動詞ナガル（流）の連用形が名詞化した語でナガレザキとは「土砂の流れ着いた場所」をいうのであろうか。合流点で川は流れが失速するのであろうか。

全国地図には、ナガレザキ地名は載

っていない。

#### 【なぎ尻】

ナギジリ。

三日市場のナガレザキ小字のさらに下流側になる。

ナギは「山で、薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）をいう。従って、ナギジリとは「土砂が崩れ落ちて堆積した、その末端部」をいうのであろう。

伊那谷南部には各地にある小字であるが、全国地図にはナギジリ地名の記載はない。

#### 【水呑原】

ミズノンバラ。

三日市場から桐林サンヒルズに抜ける道路の北側に広がる大きな小字である。

ミズノンバラはミズノミバラの促音便化した語であろう。ミズノミバラとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ミズノミバラとは「水利の便が悪く乾燥しやすい広い緩傾斜地」をいうか。雨が降ってもすぐに呑んでしまうような土地であろうか。

②ミズノミバラ←ミズノメバラと転訛した語かもしれない。エ段→イ段の変化は極めて多いが、特に中世ごろに目立って多いという（国語学辞典）。ミズノメバラとは「灌漑用水を確保するために利用を制限されていたところ」かもしれない。ミズノメハヤシ（水野目林）は「近世、灌漑用水を確保するために利用を制限された森林」であったようだ（広辞苑）。

全国地図には、ミズノンバラ地名もミズノミバラ地名も記載がないが、ミズノミ（水呑）は6カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【大平】

オオヒラ。

三日市場から桐林サンヒルズに抜ける道路の南側傾斜地にある。

オオヒラとは「広い傾斜地」をいうのであろう。ヒラは黄泉比良坂のヒラで傾斜地をいう（語源辞典）。

全国地図には、オオヒラ地名は中・大字として137カ所にも挙げられており、うち136カ所には「大平」の字が宛てられている。

#### 【鎌取平】

カマトリダイラ。

三日市場最東端の駄科境にある。

カマトリダイラとは何を意味するのか。

カマはカミ（嚙）・マ（間）で「えぐったような崖地」をいい、トリは動詞トル（取）の連用形で「切り取られたような地形」のこと、さらにダイラ（平）は「山頂または中腹の平らな場所」をいう（以上は語源辞典）。

以上から、カマトリダイラとは「嚙み取られたような断崖のある頂や中腹には平らな場所もある土地」であろうか。

全国地図には、カマトリダイラ地名は載っていないが、カマトリ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられている。

#### 【土器洞・河原毛洞】

カワラケボラ。

三日市場の臼井川東側の段丘崖に、二の小字は並んでいる。

カワラケボラとは「釉薬をかけずに焼いた素焼きの器の破片などが出てきている洞」をいう。

ここからは、あな窯を使い高温の還元炎で焼いた暗青色の土器が出土している。朝鮮半島系の技術によるとい

う（村史）。

全国地図には、カワラケボラ地名も載っていないが、カワラケ地名は1カ所にあり「河原毛」の字が宛てられている。

#### 【駒ケ洞】

コマガホラ。

三日市場のオオヒラ小字の南西側にある洞になっている。その西方にも小さなコマガホラ小字がある。

コマガホラとは何か。コマは高句麗からの渡来人と関わるのではないかという考えもあり、この小字の隣には朝鮮系技術によるといわれる須恵器が出ているが、コマ地名はあまりにも多い。ここでは取り上げないことにしたい。

では、コマガホラとは何を意味するのであろうか。語源辞典によりながら二説を挙げる。

①コマ←コメ（籠）と転じた語で、「入り込んだ地形」をいう。すなわち、コマガホラとは「谷が深く入り込んだ洞」をいうか。

②コマ（駒）は馬の飼育に関わる地名である可能性はある。コマガホラとは「馬を飼育した牧場のあった所」か。牧場の一部であろう。北側のミズノンバラ小字やオオヒラ小字が牧場の中心部ではなかったか。

しかし、コマガホラ地名は全国地図には記載がない。ホラ地名は全国的にそれほど多くはない。

#### 【臼井平】

ウスイビラ。

三日市場の臼井川氾濫原から上る段丘崖に二カ所ある。

ウスイビラとは「臼井小字に面した傾斜地」を意味する。

全国地図には、ウスイビラ地名は載

っていない。ウスイ地名は13カ所に中・大字として記載されている。

#### 【風吹原】

カゼフキハラ。

三日市場の桐林サンヒルズに通じる道路の南西向き傾斜地にある。

カゼフキハラとは「風の当たる未墾の草刈り場」か。風を意識したのはなぜだろうか。作業の間に涼んだところであったろうか。あるいは、イナバとして利用していたところかもしれない。

全国地図には、カゼフキハラ地名もカゼフキ地名も記載されていない。

#### 【藤塚原】

フジツカハラ。

三日市場の桐林サンヒルズに通じる道路に細長く伸びている。

フジツカハラはフジツカハラ（富士塚原）か。すなわち、「富士塚のあった未墾の草刈り地」であった所か。段丘の高い所を富士山に見立てて富士講が行われた所か。文化・文政期（1804～30）以降に盛行したといわれているが、その痕跡は明らかではない。

全国地図にはフジツカハラ地名は記載がないが、フジツカ地名は8カ所に挙げられており、いずれも「藤塚」となっている。

#### 【オノ神】

サイノカミ。

三日市場の桐林サンヒルズへ通じる道路の両側に3カ所ある。その一つのサイノカミ小字の一カ所に「塞神」の石碑がある。

サイノカミはサエノカミとも道祖神ともいわれ、外から襲い来る外敵や流行病などを村境、峠、辻などで防ぐと考えられていた。



サイノカミとは「サエノカミを祀っている所」をいう。通称”風吹峠”は近いが、ここを意識しているのかどうかは不明。

石碑には「大正八年秋」の銘があるという。毎年四月八日にお祀りをしているという。地名発生時は大正8年よりはかなり遡るのであろうが、そのときにはすでに祭祀も行われていたのであろう。

全国地図には、サイノカミ地名は中・大字として29カ所に挙げられている。

#### 【日影垣外】

ヒカゲガイト。

三日市場の桐林サンヒルズへ通じる道路の北側にある。

ヒカゲガイトとは「日当たりのよくないところもある屋敷跡」か。段丘の尾根筋から北側に降ったところにあるためか。

全国地図には、サイノカミ地名は中・大字として29カ所に挙げられている。

#### 【塚平】

ツカダイラ。

三日市場のヒカゲガイト小字に囲まれるようにして3カ所散在する。

ツカダイラとは何か。二説を挙げる。

①ツカは「円墳があった所」であろうか。ダイラは「山頂の平らな所」。従って、ツカダイラとは「円墳あった丘陵の尾根の平らな所」をいうか。しかし、ここに古墳があったという記録はない。

②ツカダイラとは「積み上げた石の小山がある山頂の平らなところ」をいうのかもしれない。開墾した時に耕作の妨げになる石を拾って少しずつ積み

上げた塚があったということも考えられる。

全国地図には、ツカダイラ地名は1カ所にしかない。

#### 【西武】

ニシブ。

三日市場の桐林サンヒルズに抜ける道路の南側に、二カ所ある。

ニシブとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ブーフ（府）と濁音化した語で「倉庫」をいう。すなわち、ニシブとは「西の方にある倉庫」か。方角の基準になっているのは、殿岡であろうか。殿岡にも倉庫があって、三日市場にもあったと考えたい。倉庫は藩の一時的に収穫した穀物を保管しておく所か、飢饉などに備える救荒作物を蓄えた倉庫であったか。

②ブーフ（節）と濁音化したもので「盛り上がった所」をいう。従って、ニシブとは「西の方にある高所」をいうか。これは東にあるマルヤマ小字に対するニシ（西）であったかもしれない。間には風吹峠がある。

全国地図には、ニシブ地名は2カ所に中・大字として挙げられ、いずれも「西部」となっている。

#### 【外平】

ソトヒラ。

三日市場の桐林サンヒルズに繋がる道路の南側にある。

ソトヒラとは「段丘の外側になる段丘崖」をいうのであろうか。

全国地図には、ソトヒラ地名は2カ所に中・大字として挙げられており、いずれも「外平」になっている。

#### 【橋削面】

ハシケズリメン。

三日市場にあり、臼井川に沿って両

岸に懸かっている小字。

あまり聞かない小字名であるが、  
①ハンケズリメンとは「橋を渡すために一方を削って兩岸の高さを等しくした面」をいうのであろうか。現在でも道路が通っていて橋がある。

②あるいは、ハシはハシ（端）かもしれない。その場合は、ハンケズリメンとは「川縁を削った土地」をいうか。

全国地図には、ハンケズリメン地名は無い。

#### 【柵口】

マセグチ。

三日市場には三カ所にある。大きなマセグチ小字は運動公園通りの三日市場交差点付近にあり、他の二つの小さな小字は、谷にそって細長く伸びている。

マセグチ小字は、この地域には多い。マセグチとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①マセは「馬塞」で、マセグチとは「牧場の出入り口があった所」であろうか。広いマセグチは、この解釈の方がいいのかもしれない。

②マセはマセ（間塞）か。マセグチは「狭い谷の口」を意味する。小さな細長い小字の方はこの解釈にしたい。竜丘の例でも、川幅が変わるところに、この小字はある。

しかし、ほぼ同じところにある小字の由来が異なるのはいぶかしいのかもしれない。とすれば、②がより適切か。

マセグチ地名は、全国地図にも中・大字として6カ所に挙げられており、うち4カ所は「馬瀬口」に、1カ所が「柵口」になっている。

#### 【八王子】

ハチオウジ。

三日市場の北西部にあり、八王子稲荷社が鎮座している。

ハチオウジとは「稲荷神の眷属神である八王子を祀っている土地」を意味するのであろう。

全国地図にはハチオウジ地名は13カ所に中・大字として挙げられており、うち9カ所には「八王子」が、3カ所には「八王寺」の字が宛てられている。

#### 【観音堂】

カンノンドウ。

三日市場の北西端、大瀬木境にある。

観音堂とは「観音菩薩の像を安置した堂」（広辞苑）をいう。従って、カンノンドウとは「観音菩薩を祀っていた御堂のあったところ」と思われるが、詳細は不明。

全国地図には、カンノンドウ地名は32カ所に中・大字として挙げられており、うち31カ所は「観音堂」の字が宛てられている。

#### 【堂遠】

ドウエン。

三日市場の大瀬木境にある。カンノンドウ小字の南隣になる。

ドウエンとは何か。二説を挙げる。  
①ドウエン←ドウウエ（堂上）と転訛したとみる。北隣にあるカンノンドウ（観音堂）よりわずかに高いとしている。すなわち、ドウエンは「観音堂より少し高い土地」をいうか（伊賀良の地名）。

②ドウエンは固有名詞か。それも僧侶の名前ではないだろうか。ドウエンとは「ドウエンという僧の所有地」か、あるいはドウエンが住職となっている寺の寺田があった所」と思われるがどうであろうか。もおしそうであるな

らば、ドウエンは「道円」であろう。  
全国地図には、ドウエン地名は記載がない。

#### 【紙屋】

カミヤ。

三日市場最北西部の大瀬木境にある。

カミヤとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カミはカミ（上）で「高い所」をいい、ヤは「流水」を意味する。つまり、カミヤとは「少し高い所で流水のある土地」をいうか。井水であろうか。

②カミヤは文字通りで「紙すきをしていたところ」かもしれない。伊那谷南部にはいくつかある地名である。

全国地図には、カミヤ地名は43カ所に中・大字として記載があるが、「紙屋」の字が宛てられているのは13カ所。

#### 【南田】

ミナミダ。

三日市場最西部の大瀬木境にある、比較的大きな小字である。現在は水田と畑が半々ぐらいになっている。

ミナミダの由来については二説を挙げたい。

①ミナミダとは字面の通りで「南の方にある田んぼ（土地）」か。方角の基準になっているのは北の方にあるカンノドウ（観音堂）小字であろうか。

②ミナミはミ（美称の接頭語）・ナミ（滑）で「緩傾斜地」をいう。ナミ←ナメと転じたという（以上は語源辞典）。従って、ミナミダとは「緩傾斜地にある田んぼ（土地）」をいうのかもしれない。

全国地図にはミナミダ地名は15カ所に挙げられており、その全てが「南田」になっている。

#### 【一丁田】

三日市場の北西部にあり、ミナミダ小字の東隣になっている。現在はほとんどが田んぼである。

イッチョウダとは「合わせると一町歩にもなる田んぼのあったところ」であろうか。

全国地図には、イッチョウダ地名は16カ所に中・大字として記載がある。

#### 【赤坂】

アカサカ。

三日市場のイッチョウダ小字の東隣にある。

アカサカとは、「赤土のある緩傾斜地」をいうのであろうか。

伊那谷南部には多い地名である。

全国地図には、アカサカ地名は中・大字として135カ所にも挙げられており、うち131カ所に「赤坂」が、1カ所だけ「赤阪」の字が宛てられている。

#### 【山田】

ヤマダ。

三日市場には二カ所にある。いずれも緩い傾斜地になっていて、大きい方のヤマダ小字は現在、果樹園になっている。

ヤマダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ヤマには「平地林を含む林」の意がある。ヤマダとは「林になっている所」をいうか。

②ヤマは「耕作地」か。であれば、ヤマダとは「耕作地になっている所」となる。

全国地図には、ヤマダ地名は296カ所に中・大字として挙げられており、うち291カ所が「山田」になっている。

### 【島垣外】

シマガイト。

運動公園通りの三日市場交差点の南西角にある。

シマは奥位神社から見て少し盛り上がっている土地を島に見立てたものであろうか。

すなわち、シマガイトとは「やや盛り上がった土地で屋敷跡のある所」を意味するか。

全国地図には、シマガイト地名は1カ所にあり、「島垣外」となっている。

### 【屋敷前】

ヤシキマエ。

三日市場のシマガイト小字の西隣にある小さな小字。

ヤシキマエとは字面の通りで「有力者の屋敷の前の土地」をいうのであろう。

全国地図にはヤシキマエ地名は9カ所が中・大字として挙げられている。

### 【花村】

ハナムラ。

三日市場の運動公園通りを挟んだ広い小字になっている。

ハナムラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①ハナ←ハナワ(塙)と転じた語で「台地」を意味し、ムラはムラ(斑)で「凹凸の多い土地」をいう。以上から、ハナムラとは「凹凸の多い台地」をいうか。

②ハナは「突き出た地形」をいい、ムラ←モリ(盛)と転訛したもので、ハナムラとは「段丘の先端部で少し盛り上がっている所」をいうのかもしれない。

全国地図には、ハナムラ地名は1カ所だけ中・大字として挙げられてお

り、「花村」の字が宛てられている。

### 【洞田】

ホラダ。

三日市場の臼井川右岸にある。

ホラダとは「小さい谷になっている所」であろうか。ダはダ(田)ではなく、ダ(処)と思われる。小さい溪谷で、水田はつくれなかったのではないだろうか。

ホラダ地名は、全国地図には1カ所が中・大字として記載があり、「洞田」の字が宛てられている。

### 【屋敷畑】

ヤシキバタ。

三日市場のハナムラ小字に三方を囲まれている。

ヤシキバタとは文字通りで「屋敷があった跡地の畑」であろうか。

全国地図には、ヤシキバタ地名はないが、ヤシキハタ地名は1カ所にだけある。

### 【奥出】

オクデ。

三日市場のほぼ中央部にある小さな小字である。

オクデとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①オクは「川の上流部」をいい、デ(出)は「分村」を意味するという(語源辞典)。従って、オクデとは「分家してでてきた(臼井川の)上流部の土地」をいうのであろうか。宅地でもあり耕作地でもあったか。

②オク(奥)とは「他村との境界地ではない中央部」の意もあるか。すなわち、オクデとは「村の奥まったところに分家して出たところ」の意味もあるかもしれない。

全国地図には、オクデ地名は5カ所に中・大字として挙げられており、す

べてが「奥出」となっている。

#### 【垣外・大垣外】

カイト・オオガイト。

三日市場の西部に、オオガイト小字は大小二カ所、カイト小字は一カ所ある。

カイトは「有力者の屋敷があった所」であろうか。オオガイトのオオは美称の接頭語でカイトと同じ意味で、土地を分ける時に、オオを付けたものと考えたい。

全国地図には、カイト地名は8カ所、オオガイト地名は13カ所が中・大字として記録されている。オオガイト地名の方が多いの、オオが美称であることを意味するか。

#### 【上ノ原】

ウエノハラ。

三日市場の最北西端に二カ所あり、大瀬木境になっている。大堤の周辺である。

ウエ（上）は緩い傾斜地になっている段丘の上流部を指す語であろうか。ウエノハラとは、「緩傾斜地の上流部にある草刈り地であった所」であろうか。

全国地図には、ウエノハラ地名は中・大字として81カ所に挙げられている。

#### 【仲原】

ナカハラ。

三日市場の最西端にあり、ウエノハラ小字の南隣にある。

ナカハラとは「南北の中央部にある主に草刈り地であった緩傾斜面」をいうか。ナカはナカ（中）で西端にあっても、南北では中央になっていることを意味しているのであろうか。

全国地図には、ナカハラ地名は中・大字として125カ所も挙げられて

おり、うち6カ所が「仲原」、118カ所が「中原」の字を宛てている。

#### 【原田】

ハラダ。

三日市場の南西端にあり、小茂都計川に沿った左岸に長く延びている。大小のハラダ小字が三カ所にあるが、小字発生時には繋がっていたものと思われる。現在は、ほとんどが果樹園と畑地になっている。

ハラダとは「草刈り地であった緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図には、ハラダ地名は74カ所が中・大字として挙げられており、うち73カ所が「原田」の字となっている。

#### 【市屋敷】

イチヤシキ。

三日市場の南西部にあり、ハラダ小字にほぼ囲まれている。

イチヤシキは下殿岡のイチバヤシキと同じ由来をもつものと思われる。すなわち、イチヤシキは「市場の関係者の屋敷があった所」であろう。市場商人がいたのであろうか。

全国地図には、イチヤシキ地名は1カ所にだけ記載があり、「市屋敷」の字が宛てられている。

#### 【猿ヶ辻】

サルガツジ。

三日市場の南西部に三カ所ある。中村境に近い。

サルガツジとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①サルはサル（申）で、西南西の方角をいう。サルガツジとは「地区の中心から西南西の方にある辻」であろうか（伊賀良の地名）。三日市場地名にゆかりの定期市発祥の地か、としている。

②サルガツジとは「猿回しなどが芸能を演じた辻がある所」をいうのかもしれない。辻は道路の交差点であるが、境界性と公共性という二の特性があるという。オノ神を祀ることが多く、芸能の場でもあった。猿回しはお宮の神事やお寺の仏事にも関係していた。猿楽とともに七種の道の者でもあった（日本民俗大辞典、中世賤民と雑芸能の研究）。

全国地図にはサルガツジ地名は載っていない。

#### 【南原】

ミナミバラ。

三日市場のハナムラ小字とハラダ小字に挟まれている。

ミナミバラとは「南の方にある草刈り場になっている緩傾斜地」をいうか。方向の基準になっているのは、三日市場の中心であろう。

全国地図には、ミナミバラ地名は7カ所と少ないが、ミナミハラ地名は中・大字として42カ所の記載がある。

#### 【松ノ木畑】

マツノキバタ。

三日市場の南西部に二カ所ある。

マツノキバタとは何か。難しい地名である。語源辞典に依りながら三説を挙げたい。

①マツ←マチ（町）と転じた語で「市場」をいうか。ノは助詞で、キバタはキハ（際）・タ（処）。以上から、マツノキバタとは、「市の近くの土地」をいうのであろうか。

②ノギハは「野辺」の意。従って、マツノキバタとは「市の立つ野辺になっている所」も考えられるか。

③可能性は小さいが、マツノキバタとは、文字通りで「松が自生している畑」

か。畑の周辺にアカマツがあったのであろうか。

さすがに全国地図には、マツノキバタ地名もマツノキハタ地名も記録されていない。

#### 【油面】

アブラメン。

三日市場のサルガツジ小字の南側、最南西端の中村境にあり、現在はほとんどが果樹園と畑地になっている。

アブラメンとはアブラ（油）・メン（免）で「寺社の灯明に宛てるために免租になっている土地」であろう。収穫物を灯明の費用に当てたのか、それとも灯明の原料を栽培していたのか、はっきりしない。

中世には、ゴマ・エゴマが原料で油座が製造・販売の特権を与えられていたが、中世末から庶民の間に需要がひろまり油商人が進出、原料もナタネ油が中心になっていったという（日本民俗大辞典）。

全国地図にはアブラメン地名は1カ所だけ中・大字として挙げられており、「油免」の字が宛てられている。

#### 【姥ヶ洞】

ウバガホラ。

三日市場の南西部にあり、臼井川が流れている。南面する緩傾斜地と東に流れる臼井川の谷からなる。

ウバガホラはウバガフトコロと同じ意味をもっているのであろうか。ウバガフトコロ（姥懐）は「風の来ない暖かい場所。とくに、南面の山ふところをなす地形で、日だまりの地をいう」（国語大辞典）の意。従って、ウバガホラとは「風のこない、暖かい洞」をいうのであろう。

全国地図には、ウバガホラ地名は載っていない。

### 【ドドメキ】

三日市場の臼井川の支流が合流する地点の流域にある、大きな小字である。

ドドメキ←トドメキと濁音化した語で、動詞トドメク（轟）の連用形が名詞化した語（国語大辞典）。

以上から、ドドメキは「川音のとどろく所」をいうのであろう。川の合流するところに多いようだ。

全国地図には、トドメキ地名は1カ所、ドドメキ地名は3カ所に中・大字として挙げられている。

### 【森ヶ塚】

モリガツカ。

三日市場の臼井川の氾濫原が広がったところにある。

モリガツカとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①モリ（森）は「神の祀ってある森」か。ツカは「土が盛り上がって高くなった所」をいう。従って、モリガツカとは、「神を祀った森のある丘」をいうか。奥位神社のある丘の裾の部分に、この小字はある。丘の一部であることが気になる解釈ではある。

②モリには「林」の意があり、ツカ←ツガ←ツギ（継）と転訛した語で「段差のある地形」をいうか。以上から、モリガツカとは「林になっている段丘崖」を意味するか。

モリガツカ地名は全国地図には記載がない。

### 【臼井・下臼井】

ウスイ・シモウスイ。

ウスイ小字は三日市場の臼井川の氾濫原に五カ所あり、川に沿っている。シモウスイ小字は、最下流部のウスイ小字に囲まれて二カ所にある小さな小字である。

ウスはウス（薄）で「浅い」の意。古語のウス（薄）にはアサ（浅）と類似する意義があるという（語源辞典）。イは「流水」のこと。

以上から、ウスイとは「浅い川」をいうものと思われる。シモウスイは「ウスイ地名の下流側にある土地」をいうか。

全国地図には、ウスイ地名は13カ所に中・大字として挙げられており、うち9カ所に「臼井」、3カ所に「薄井」の文字が宛てられている。

### 【原尻】

ハラジリ。

三日市場の臼井川の本流と支流の間に延びる丘陵の先端部の南向きの傾斜地にある。

ハラはハラ（腹）で「山の頂と麓の中間の部分」をいう（国語大辞典）。人の腹に見立てたのであろう。従って、ハラジリとは「段丘の先端部の中腹にある傾斜地」を意味するのであろう。

全国地図には、ハラジリ地名は4カ所にあり、その全てが「原尻」となっている。

### 【狐洞・大狐洞・小狐洞】

キツネホラ・オオキツネボラ・コキツネボラ。

これらの小字は、三日市場の県営野球場のある段丘とその段丘に食い込んでいる谷に分布している。キツネホラ小字は広大な面積を持ち、コキツネボラは小さいが、オオキツネボラ小字はさらに小さい。

キツネホラは「狐が住んでいる谷のある所」で、コキツネボラは字面の通りで「狐が住んでいる小さな谷のあるところ」であろうか。

オオキツネボラのオオ（大）は美称

の接頭語であろう。オオキツネボラとは「キツネボラ小字であったところ」ぐらいの意味ではないだろうか。キツネボラと区別するためにオオを付けたのかもしれない。

#### 【長釣根】

ナガツルネ。

三日市場の臼井川と小茂都計川の合流点に向かって突き出ている段丘の岬にある。三カ所にあるが、この小字発生時には繋がっていたものであろう。

ツルネとはツルネ（蔓畝）で「蔓のように長く伸びて連なった小高いところ」（国語大辞典）をいう。

従って、ナガツルネとは「長く伸びている段丘の先端部の土地」をいのであろう。

全国地図には、ナガツルネ地名は載っていない。

#### 【日影田】

ヒカゲダ。

三日市場の臼井川右岸の氾濫原にある。

ヒカゲダとは「日当たりのいい田んぼ」をいうのであろう。東側に開けた河原で、日当たりはいい土地と思われる。

全国地図には、なぜかヒカゲダ地名は一件も記載が無い。

#### 【中尾】

ナカオ。

三日市場のナガツルネ小字の南東隣のさらに先端部にある。

ナカオは「真ん中にある尾根筋」を意味するのであろう。臼井川と小茂都計川の合流点近くで、二の川に挟まれた三つの尾根筋がある。その真ん中に、この小字がある。

全国地図には、ナカオ地名は中・大

字として148カ所にも挙げられており、うち143カ所に「中尾」の字が宛てられている。

#### 【経塚原】

キョウヅカバラ。

三日市場の県営野球場の南側にある、段丘頂上部の広大な小字である。近くには二カ所にキョウヅカバラ小字もある。

キョウヅカとは「経典を永く後世に伝えるため、経筒などに入れて地中に埋め納めて塚を築いたもの」（広辞苑）という。

従って、キョウヅカバラとは「経筒などを埋納した野原」をいうのであろう。野原は草刈り地の多い緩傾斜地である。ここで経筒を確認したのかどうかは不明。

全国地図には、なぜかキョウヅカバラ地名もキョウヅカハラ地名も載っていない。

#### 【大原】

オオハラ。

三日市場の県営野球場のある小字で、広い台地の頂上部にある。

オオハラとは字面の通りで、「広い緩傾斜地で水利の便が悪く採集や狩猟の場や草刈り地であった所」を意味するか。

全国地図には、オオハラ地名は中・大字として101カ所に挙げられており、うち98カ所で「大原」となっている。

#### 【北国田】

キタクニダ。

北方の鼎境にあり、毛賀沢の谷に接する段丘崖縁になっている。

キタクニダとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げる。

①クニ←クネで「凹凸に富んだ状態」



をいう。従って、キタクニダとは「北方の高くなった台地にある田んぼ」をいうのであろうか。方角の基準になりそうなのは神明社しかない。神明社は旧上殿岡村にあるのが問題であろうか。

②キタ←キダ(常)と変わった語で「きざみめ。段」(国語大辞典)をいい、クはク(処)で、ニダ←ニタと転じた語でヌ(沼)・タ(処)と同義。以上から、キタクニダとは「段丘崖のある湿地(田んぼ)」をいうのであろうか。

③キタクはキ(割)・タク(崖)で、「段丘崖」をいうか。タクは動詞タクレルの語幹で恵那方面の方言であり「滑り落ちる」の意だという。従って、キタクニダとは「段丘崖のある湿地(田んぼ)」を意味するのかもしれない。

全国地図には、キタクニダ地名は載っていない。

#### 【荒田】

アラダ。

北方南部にあり、キタクニダ小字の北隣にあって、現在は水田と畑になっている。

アラダ←アラタと転じたか。アラタとは何か。広辞苑に依りながら二説を挙げる。

①アラダはアラタ(新田)で、「新しく開墾された水田のあるところ」か。西側を流れる水路によって、ようやく稲作が可能になったのであろうか。

②アラダはアラタ(荒田)か。すなわち、アラダとは「大雨などで荒れてしまったことのある田んぼのある所」かもしれない。西側の川による土砂災害があったのかどうか。

全国地図にはアラタ地名は41カ所に中・大字として挙げられている

が、アラダ地名は3カ所と少ない。

#### 【高見】

タカミ。

北方の最東部にあり鼎境に接する。

タカミは「高い場所」(国語大辞典)で、日葡辞書にもある。従って、タカミとは「周辺より少し高い所」を意味するのであろう。中世末に監視所が設けられていたことも考えられる。

全国地図には、タカミ地名は20カ所で中・大字として挙げられており、その全てに「高見」の字が宛てられている。

#### 【中尾田】

ナカオダ。

北方の鼎境にある。

ナカオ(中尾)とは「真ん中にある尾根筋」で、ナカオダとは「段丘の少し高い所が尾根のように伸びている土地」をいうのであろう。

全国地図には、ナカオダ地名は3カ所に中・大字として挙げられているが、宛てられている字はすべて「中小田」となっている。

#### 【大瀬町】

オオセマチ。

北方東部の台地の頂上部にあり、現在は果樹園と住宅になっている。

オオセマチとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①セマチ(畝町)は一区画の田のことで、オオセマチとは「面積の大きな水田」であるという(長野県の地名その由来)。この小字発生時に、ここが水田であったかどうかはわからないが、現在は周辺が田んぼではないことが気になる。

②オオセはオオセ(大背)で、「背中のように脹らんだところ」を意味するのであろう。マチが分かりにくいのが、

「市場」か、あるいは「耕地」か（国語大辞典）。従って、オオセマチとは「段丘上の大きく脹らんだ土地で市があったところ」か、あるいは「段丘上で少し高くなっているところの耕作地」かもしれない。

オオセマチは伊那谷でもあちこちにある地名であるが、その解釈は定まらない。

全国地図には、オオセマチ地名は中・大字として1カ所に挙げられている。宛てられている字は「大瀬町」。

#### 【一ツ田】

ヒトツダ。

北方東部の鼎境にある小字。

ヒトツダとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヒトツダとは、一般的には「大きな一枚の田んぼがあった所」を意味する。ここも現在は畑地が多く、小字発生時に田んぼになっていたのかどうか。

②ヒトは形容詞ヒトシの語幹で「段丘面」をいい、ツは助詞ノ、ダはタ（処）のこと（以上は語源辞典）。従って、ヒトツダとは「段丘面にある土地」となるか。

伊那谷南部には各地にある小字名であるが、全国地図には1カ所にだけ中・大字として記載があり、「一ツ垣」の字になっている。

#### 【西ノ原】

ニシノハラ。

北側の最東部にあり鼎境になっている。

ニシノハラとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ニシノハラとは「西の方にある緩傾斜地」をいうか。北方の西部にはなっていないので、方角の基準になっ

るのは近くにある鼎の諏訪神社しかないように思えるがどうであろうか。基準を隣村に置くことはありうるのかどうか。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹の清音化で「湿地」をいい、ノハラ（野原）は「原野」をいう（以上は語源辞典）。従って、ニシノハラとは「湿地のある原野」を意味するか。

全国地図には、ニシノハラ地名は中・大字として2カ所に挙げられている。

#### 【南原・南方】

ミナミバラ・ミナミガタ。

これらの小字は、いずれも北方の北東部にある。

ミナミバラ（南原）は「南の方にある緩傾斜地」をいうのであろうか。この小字の北西の方角には、キタノハラ（北ノ原）小字があり、この小字に対応しているものであろう

ミナミガタ小字には二説が考えられる。

①文字通りに「南の方にある土地」をいうか。旧村名のキタガタ（北方）は、キタ小字群ともいうべきキタの付く小字が多かった村であるということから名付けられたものであろうか。キタノハラ・キタダイラ・キタクニダ・キタダ・キタイチバなどの小字である。

②ガタはカタ（肩）が濁音化した語で、「山や丘の頂上からやや下の傾斜度の変わる部分」をいう（語源辞典）。地形を人体の肩に見立てたものであろう。以上から、ミナミガタとは「南の方にある段丘の肩の部分の土地」をいうのであろう。

全国地図には、ミナミバラ地名は7カ所に過ぎないが、ミナミハラ地名は

42カ所に中・大字として挙げられている。また、ミナミガタ地名は23カ所に記載されている。

#### 【羽柴】

ハシバ。

北方の北東部隅にある。

ハシはハシ（端）で「台地の端」を意味する（語源辞典）。バはバ（場）か。従って、ハシバとは「（北方の）段丘の縁」をいうのであろうか。

全国地図には、ハシバ地名は中・大字として38カ所に挙げられているが、うち36カ所は「橋場」となっている。

#### 【戌玄原】

イヌイバラ。

北方の最北東端にある。

イヌイバラとは何か。二説を挙げる。①イヌイ（戌亥）は北西の方角をいう。つまり、イヌイバラとは「戌亥の方角にある緩傾斜地」をいう。方角の基準になっているのは、鼎一色の諏訪神社であろうか。

②イヌイバラとは「ノイバラ」の異名でもある（国語大辞典）。すなわち、イヌイバラとは「野茨の自生している場所」をいうのかもしれない。

全国地図には、イヌイバラ地名は載っていない。

#### 【阿弥陀原】

アミダバラ。

北方の北部のミナミガタ小字に囲まれている小字。

アミダバラとは「阿弥陀堂があったところ」であろう。しかし、その痕跡については不明。

伊那谷南部には多い小字名であるが、全国地図にはアミダバラ地名は1カ所に挙げられているにすぎない。

#### 【笛吹】

フエフキ。

北方北部の鼎切石境にある、大きな小字である。国道256号線の両側に広がっている。

フエフキとは何か。二説を挙げる。

①笛吹池があったという口碑が残っている。フエフキとは「笛吹池があった土地」をいうのであろうか。笛を吹く都からきた役人の娘が、ある三月に笛吹池のほとりにあった大きなシキミの樹の下で笛を吹いていて落雷のために死亡したが、毎年三月が近づくと笛が聞こえてくるようになった。やがて池が埋まると笛の音も消えてしまった。村人が小さな池を造ると再び笛が聞こえるようになった。「笛吹」小字と「三月」小字の由来だという（伊賀良の民俗）。

②フエは動詞フユ（振）の連用形が名詞化した語で「揺れ動くこと」から「崩壊地形」をいい、フキ←フケ（沮）と転じた語で「沼地」をいう（以上は語源辞典）。以上から、フエフキとは「崩壊地のある湿地」をいうか。

全国地図には、フエフキ地名は4カ所に中・大字として挙げられており、いずれも「笛吹」の字が宛てられている。

#### 【森】

モリ。

北方北東部の鼎切石境にあり、育良神社がある。育良神社と名付けられたのは嘉永五年（1852）だという（村史）。

モリは「神社などのある神域で、心霊の寄りつく樹林が高く群がり立った所」（国語大辞典）をいう。従って、このモリとは「神社の神域のある所」をいうのであろう。神社とは、むろん育良社をいう。

全国地図には、モリ地名は128カ

所に中・大字として挙げられている。

#### 【宮の上・宮下】

ミヤノウエ・ミヤシタ。

北方の育良神社の周辺にある。

ミヤノウエとは字面の通りで「(育良神社の)上の方にある土地」をいい、ミヤシタとは「(育良神社の)下の土地」をいう。北方のミヤシタ小字は隣村の鼎切石のミヤシタ小字に続いている。

#### 【大坪】

オオツボ。

北方のミナミガタ小字の南隣にある。

ツボ(坪)はもともと面積の単位で一つの区域を表すようになってきたのであろうか。はっきりしない地名である。

ツボは「生産している所」(国語大辞典)で、「開墾して開かれた耕作地」をいうもの考えたい。すなわち、オオツボとは「大きな耕作地になっている所」か。

全国地図には、オオツボ地名は中・大字として62カ所に記載があり、その全てに「大坪」の字が宛てられている。

#### 【庚申原】

コウシンバラ。

北方のオオツボ小字に囲まれた小さな小字である。

コウシンバラとは「庚申塔のある所」であろう。ここでは経典供養塔や不動尊などと共に庚申塔も祀られている。

全国地図には、コウシンバラ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられている。

#### 【北田】

キタダ。

北方のオオツボ小字の北西隣にある。

キタダとは何か。二説を挙げる。

①キタダとは字面の通りで「中心部より北の方にある田んぼ(土地)」だろうか。

②キタはキダハシ(階)で「階段状の地形」をいうのかもしれない。すなわち、キタダとは「段差のある土地(田んぼ)」とも考えられる。

全国地図には、キタダ地名は29カ所に中・大字として挙げられており、その全てが「北田」となっている。

#### 【財京】

ザイキョウ。

北方の北東部にあり、フェフキ小字の南隣になる。

ザイキョウとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①「財」←「在」と、「京」←「易行」と転訛した語で、ザイキョウとは「在家衆易行の場であった所」か、あるいは単に「在家集落のあった所」を意味するか(以上は『伊賀良の地名』)。

②ザイキョウはザイ(在)・キョウ(郷)で「在郷町」をいうのではないだろうか。すなわち、ザイキョウとは「商工業の集落があった所」としたい。在郷町とは「江戸時代、農村部に成立した商工業を総称していう。地域によって呼称は異なる。…初期には大工・鍛冶・紺屋などの職人や、若干の商人や運送業者がいたにすぎないが十七世紀末には商職種は多様になり、茶屋・饅頭屋などの消費的な商業も多くなった。…農業とも分離しておらず、商人地主や小作をしつつ小商いにできるものが多かった」(国史大辞典)という。「在郷」(ザイゴウまたはザイキョウ)とも呼んでいた所もある(民

俗大辞典)らしい。

全国地図には、ザイキョウ地名はないが、ザイゴウ地名は4カ所にある。

### 【三月】

サンガツ。

北方北部のフエフキ小字とサイキョウ小字の間にある。

サンガツとは何か。二説を挙げておきたい。

①フエフキ小字に関わる口碑がある。サンガツとは「笛吹池から笛が聞こえはじめる三月」で、フエフキ地名の一部がサンガツ小字に変わったということであろうか。付会地名であろうか。

②サン←サハ(沢)・ミ(水)と転じた語で「流水のある所」で、ガツ←カツミと省略語の濁音化した語で「低湿地」を意味するか(以上は語源辞典)。以上から、サンガツとは「川の傍の低湿地」を意味するものと思われる。

全国地図には、サンガツ地名は記載されていない。

### 【下リ】

サガリ。

北方のフエフキ小字に三面を囲まれ、国道256号線に沿った小字である。

サガリは「傾斜地を降っていく所」をいうのであろう。国語大辞典にはサガリは「高い所から低い所へ移ること。また、ある部分より低くなっていること」とある。

全国地図には、サガリ地名は中・大字として8カ所に挙げられている。

### 【田螺尻・ツボの尻・ツボ尻】

ツボノシリ・ツボジリ。

いずれも北方の中部以北に散在しており、形は直線で囲まれてはいない。

ツボノシリ(以下ツボジリも同じ)とは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ツボノシリとは「地割の最後のところで、半端になってしまった土地」をいうか。

②マルタニシのことを伊那谷ではツボという。そのマルタニシの尻に似た土地をいうのかもしれない。ツボノシリとは「ツボに似た形の土地」か。

全国地図にはツボノシリ地名は載っていないが、ツボジリ地名は2カ所にある。

### 【禰宜屋】

ネギヤ。

北方のザイキョウ小字の南隣にある。

ネギヤ(禰宜屋)は、文字通りで「神官の家のあった所」であろうか。少し離れているが、育良神社に仕える神職であったか。

ネキヤという地名もあるが、山城の麓にある居館の意だが、ここでは当てはまらないであろう。

全国地図にはネギヤ地名は6カ所に挙げられているが、「禰宜家」と「禰宜弥」の字が1カ所ずつ宛てられている。

### 【天神田】

テンジンダ。

北方のネギヤ小字の東隣にある。

テンジンダとは「収穫物を天神様のお祀りに宛てた田んぼ」であたか。あるいは、天神様を祀る寺子屋の費用に充てたのかもしれない。

全国地図には、テンジンダ地名は1カ所、中・大字として挙げられている。

### 【桑木原】

クワノキバラ。

北方のテンジンダ小字の東隣と南

隣にあり、その二面をクワノキバラ小字が囲んでいる。

クワノキバラとは何か。二説を挙げる。

①クワノキバラはクワ・ノキ（抜）・ハラ（原）か。クワはクエ（崩）・ハ（端）の約で「崖」をいう（語源辞典）。従って、クワノキバラとは「土砂が抜けて土手が崩れたことのある緩傾斜地」をいうか。

②クワノキバラとは、字面の通りで「桑の木が植えられていた緩傾斜地」を意味しているのかもしれない。

全国地図には、クワノキバラ地名は1カ所にだけ、中・大字として挙げられている。

#### 【松張】

マツハリ。

北方東部にある小さな小字である。

マツハリとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①マツハリ←マツバリと濁音化した語。マツバリは「へそくり」を意味する愛知県の方言であるという（国語大辞典）。そこから「ひそかに開墾した田」をマツバリダということもあった（語源辞典）。以上から、マツハリとは「隠地で租税のがれの土地」であろうか。集落の共有地であったかもしれない。

②マツハリ←マツバリと転じたもの、動詞マツバル（纏）の連用形が名詞化した語で「集まる」の意がある。マツハリとは「人が集まる所」であったかもしれない。近くに集会所があるのは、その名残と考えられないこともない。

全国地図には、マツハリ地名もマツバリ地名も載っていない。

#### 【仲沼】

ナカヌマ。

北方東部の低地にあり、二本の流水に沿った長い小字になっている。

ナカヌマ←ナガヌマ（長沼）と清音化した語か。従って、ナカヌマとは「細長い湿地」を意味しているものと思われる。

全国地図には、ナカヌマ地名は8カ所に中・大字として挙げられており、その全てに「中沼」の字が宛てられている。また、ナガヌマ地名は41カ所の記載がある。

#### 【南前田】

ミナミマエダ。

北方北東部のニシノハラ小字の南隣に位置する。

方角（ミナミ）と位置（マエ）との関係がはっきりとつかめないので分かりにくい。隣の鼎一色にある諏訪神社からは南西の方向にある。従って、「諏訪神社の南の方にある南側の土地」とするには、かなり無理がある。

そこで次のように考えたい。ミナミは、この小字の北側にあるミナミガタ小字とミナミハラ小字の「二つのミナミ地名の前方にある土地」とするのはどうであろうか。

全国地図には、ミナミマエダ地名は記載されていない。

#### 【赤土田】

アカツチダ。

北方の南東部にあり、現在は主に果樹園になっている。

アカツチダとは、文字通りで「赤土のある土地」であろう。

全国地図には、なぜかアカツチダ地名は記録されていない。中・大字にはふさわしい地名と思えるのであるが。

#### 【キジヤ・キジヤ田】

キジヤ・キジヤダ。

北方の中部付近に並んでいて、現在は水田の多い土地となっている。

キジヤ（木地屋）は「轆轤などを用いて木材から盆や椀などの日用器物を作る人」（広辞苑）をいう。従って、ここのキジヤとは「木地師が住んでいたことのある土地」で、キジヤダは「木地師が耕作していた田んぼであった所」であろうか。

ここ北方の木地師は、定住に近い生活をしていて、西部の山地で材料を求めながら生活をしていたのであろうか。山中には木地小屋があったのかもしれない。

全国地図には、キジヤ地名は3カ所に中・大字として記載がある。むろん全て「木地屋」となっている。

#### 【餅田】

モチダ。

北方の東部にある。

モチダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①モチダはミヤモチダ（宮持田）の上略形で「神社の所有田」をいうか。神社の神事・神職の経費・建物の維持等に宛てられたと思われる。むろん免租地であったはずである。どこのお宮のものであったかは不明。

②モチダは「餅米をつくる田」であったことも考えられる。神前の供物にしたのであろうか。

モチダ地名は、全国地図には23カ所に中・大字として挙げられており、うち14カ所は「持田」、5カ所が「餅田」となっている。

#### 【蟹田】

カニダ。

北方の南東部にあり、現在は住宅地と畑になっている。

カニダとは何か。語源辞典に依りな

がら三説を挙げる。

①カニ←カナ（搔薙）と転じた語で「崩れ地」をいう。従って、カニダとは「崩れたところがある土地」をいうか。

②カニ←ハニ（黄赤色の粘土）と転訛したか。「粘土が出たところ」かもしれない。

③毛賀沢に流れ込む場所から「蟹が生息していた所」か（新井利彦氏『伊那谷の地名3』）。

全国地図には、カニダ地名は記載がない。

#### 【白田】

シロダ。

北方の南東部にあり、現在はほとんどが住宅地で、一部が畑になっている。

シロダとは何か。二説を挙げる。

①大洞から流出した砂が白いからで、土質による地名だという（新井利彦氏『伊那谷の地名3』）。すなわち、シロダとは「白っぽい砂地の土地」をいうか。

②シロダ←シロタと濁音化したもので、シロタは「畑」をいう。畠の字を白と田に分けた語とも、ハクデン（白田）の訓読みともいう（以上は国語大辞典）。従って、シロダとは「畑になっているところ」を意味するのであろう。

全国地図には、シロダ地名は記載されていない。

#### 【紙漉】

カミサラシ。

北方南東部にあり、中を毛賀沢川の支流が流れている。

紙漉の行程のひとつに楮の皮を干した黒皮を白皮（しろかわ）にする作業がある。浅瀬の中で、足で踏んだり晒したりする。

以上から、カミサラシとは「紙漉をした浅瀬のあるところ」を意味するのであろう。『楮及楮紙考』には「紙を漉くには山川の清き流れありて泥気なく、小石にて浅く滞りなく流るる川の浄地を佳とす」とある（日本職人辞典）。

全国地図にはカミサラシ地名は載っていない。

#### 【井下】

イシタ。

北方の中部付近にあり、西側は伊賀良井に接している。

イシタとは文字通りで、「井水の下方にある土地」をいうのであろう。

伊那谷南部では各地にある小字であるが、全国地図には2カ所に中・大字として挙げられているが、いずれも「石田」の字が宛てられている。

#### 【入野田】

ニューノダ。

北方の南部付近、タナカ小字の東隣でナカタ小字の南隣にある。

ニューノダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる

①ニュー←ニ（丹）・フ（生）と転じた語で、ノダはヌタと同系の「湿地」のこと（語源辞典）。以上から、ニューノダとは「赤土のある湿地」を意味していると思われる。

②あるいは、ニュー←ニブ（鈍）と転じたか。すなわち、ニューノダとは「緩傾斜地になっている湿地」をいうのかもしれない。

全国地図には、ニューノダ地名もニューノタ地名も記録はない。

#### 【二反田】

ニタンダ。

北方のニューノダ小字の南隣にある。

ニタンダとは、これも字面通りで、「面積が二反歩ほどある田んぼがあった土地」をいうのであろうか。

全国地図には、ニタンダ地名は16カ所に挙げられており、うち15カ所が「二反田」の文字になっている。

#### 【稲荷面】

イナリメン。

北方のあすなろ保育園のあるところで、ニューノダ小字の東隣、ニタンダ小字の北隣に当たる。

イナリメンとは何か。二説を挙げたい。

①イナリメンはイナリメン（稲荷免）で、「収穫物をお稲荷様を祀るのに必要な経費に当てる田んぼ」としたい。しかし、北方のお稲荷様を勧請したのはいずれも明治以降だと（伊賀良の民俗）いうので、この解釈は成立しにくいかもしれない。

②イナリメンはイ（井）・ナリ（平）・メン（面）で、「井水が流れている平坦な土地」をいうのであろうか。ナリはナル（平）の転訛した語（語源辞典）。

全国地図には、イナリメン地名は載っていない。

#### 【中田】

ナカダ。

北方公園とその東側に広がっている小字である。現在は住宅地と畑が多くなっている。

ナカダとは文字通りで、「（北方の）中心地区の土地」をいうのであろうか。小字発生時には、あるいは水田であったかもしれない。

全国地図には、ナカダ地名は67カ所に、ナカタ地名は35カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【文治田】

ブンジダ。



北方の中央部、北方公園の西方にある。

この小字は古くは「文次郎下」で、ブンジダは「ブンジという人が耕作していた田んぼ」であろうか（新井利彦氏『伊那谷の地名3』による）。

全国地図には当然のことながら、ブンジダ地名は載っていない。

#### 【田中】

タナカ。

北方南部にある大きな小字。

タナカは「稲田にかこまれたところ」（国語大辞典）の意だから、タナカとは「周辺が田んぼになっている土地」をいうのであろう。

どこにでもある地名で、全国地図にもタナカ地名が中・大字として339カ所にも挙げられている。

#### 【溝マタギ】

ミゾマタギ。

北方の南部にある。

ミゾ（溝）は「地を細長く掘って水を流す所」（広辞苑）で本来は人工の水路をいうのであるが、細い川もミゾと呼んでいたかもしれない。マタギは動詞マタグ（跨）の連用形が名詞化した語で、「股を開いて物の上を越えること」（広辞苑）をいう。

以上から、ミゾマタギとは「溝を渡る場所があるところ」をいうか。伊賀良井の分流か、あるいは毛賀沢川の支流のあったところであろうか。

全国地図には、ミゾマタギ地名は見えない。

#### 【沖】

オキ。

北方の最南端にあり、毛賀沢川に接する大きな小字である。

オキには「田畑の広い所」と「山寄りに対して川に面する低い方」の意が

ある（語源辞典）。

従って、オキとは「川に面する広い耕作地」ではないだろうか。

伊那谷南部にもオキのつく小字は何カ所かにある。全国地図には、オキ地名は95カ所にも中・大字として挙げられている。

#### 【又蔵】

マタゾウ。

北方南部のタナカ小字とニューノダ小字の間にある。

マタゾウとは固有名詞であろうか。であれば、マタゾウは「マタゾウが所有していた土地」をいうのであろう。

もちろん、マタゾウ地名は全国地図にはない。

#### 【大仙坊】

ダイセンボウ。

北方の北部、中央道の西側と中部の育良公園の近くの二カ所ある。

ダイセン（大仙）は「仏陀の称」（広辞苑）だというので、僧坊にふさわしい名称であろう。ダイセンボウとは「大仙という名の僧坊のあった所」か。

全国地図には、ダイセンボウ地名が1カ所だけ、中・大字として挙げられており、「大戦防」の字が宛てられている。

#### 【清水】

シミズ。

北方の北部、西部、南部の四カ所にあり、いずれも毛賀沢川や伊賀良井などの水路に接している。

シミズは字面の通りで「自然湧水のあるところ」をいうのであろう。

全国地図には、シミズ地名は236カ所に中・大字として記載されている。

#### 【三四郎屋敷】

サンシロウヤシキ。

北方南部の伊賀良井とタナカ小字の間にある。

サンシロウは固有名詞であろうか。すなわち、サンシロウヤシキとは「サンシロウとい有力者の屋敷があったところ」を意味するものと思われる。

#### 【砂垣外】

スナガイト。

北方の最南端にあり上殿岡に接し、南沢川（毛賀沢川）に沿う。

スナガイトとは字面の通りで「砂地になっている有力者の屋敷跡」か。

全国地図には、スナガイト地名は記録がない。

#### 【向林】

ムコウバヤシ。

北方の最南端で、大瀬木・上殿岡との境にある。

ムコウバヤシとは「向こう側にある樹木の群がりはえた所」か。基準になっているのは、南沢川（毛賀沢川）の対岸にあるコガイト・コガイト小字付近であろう。ハヤシは人手の入らないモリとは反対に人工的で継続的な管理、たとえば植林・伐採・落葉掻きが常時行われている樹木の集まっているところをいう（民俗大辞典）。

全国地図には、ムコウバヤシ地名は載っていない。

#### 【小垣外】

コガイト。

国道 153 号線バイパスが南沢川を渡る付近にある。

コガイトとは何を意味するのか。コ（小）は「ほとんど意味を持たない単なる接頭語」か、コ（古）の意で、どちらにしても、コガイトとは「有力者の屋敷があった所」をいうのであろう。

全国地図には、コガイト地名が 3 カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【南沢】

ミナミザワ。

北方の南端に四カ所ある。

ミナミザワとは「（北方の）南部にある谷川の流れている所」をいう。流れている川を南沢川（毛賀沢川）という。

全国地図には、ミナミザワ地名は中・大字として 40 カ所が挙げられており、いずれも「南沢」の字が宛てられている。

#### 【沖明】

オキミョウ。

国道 153 号バイパスと国道 256 号線が交差する飯田インター西の北東角にある。

オキミョウとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①円寂道場の一画で夜明けまで念じとおす水上の念仏踊屋をさしたのであろうか。（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）

②オキ（沖）は「山寄りに対して川に面する低い方」（語源辞典）をいい、ミョウ（名）は名田のことで「平安時代以降、中世を通じて、公領・庄園の賦課単位」（広辞苑）であるという。律令制の解体で、開墾、買得などにより、私有化された土地の区画をいうのであろう。以上から、オキミョウとは「私有化された川よりの土地の賦課単位の区画」を意味すると思われる。川は南沢川（毛賀沢）か。

全国地図には、オキミョウ地名は記録がない。

#### 【河原・川原】

カワラ。

北方の西部や南部の毛賀沢川（南沢

川)の流域に四カ所ほどある。

カワラとは、字面の通りで「川沿いの緩傾斜地」をいうのであろう。

どこにでもある地名で、全国地図にも126カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【柿の沢】

カキノサワ。

北方の南部にあり育良公園のある所で、東端を伊賀良井が流れている。

カキノサワとは何か。二説を挙げたい。

①カキノサワとは、字面の通りで「柿が栽培されていた流水のある土地」であらうか。穀類以外では柿が最も多い農産物であったという。干柿である。そのために柿の栽培も多かったのであろうか。

②カキは動詞カク(欠)の連用形が名詞化した語(語源辞典)であらうか。従って、カキノサワとは、「崩れ地があり、流水のあるところ」を意味するのであろうか。

全国地図には、カキノサワ地名は3カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【中島】

ナカジマ。

北方の中部以南に二カ所ある。

ナカジマとは「島のように少し高くなっている所」をいう。見る方向によって異なるのであるが、島のように少し高くなっているように見える方向があるはずである。

どこにでもある地名である。

#### 【中沼】

北方の東部にある。

ナカヌマとは何か。二説を挙げたい。

①ナカ(中)で、「南北の中間の部分」

であらうか。であれば「北方の南北の中間部分にあった沼」であらうか。しかし、中間とするにはやや南に寄りすぎているかもしれない。

②ナカ←ナガ(長)と転訛した語で、ナカヌマとは「細長い沼があったところ」であらうか。

全国地図には、ナカヌマ地名は8カ所にあつて、いずれも「中沼」の文字になっている。

#### 【細沼】

ホソヌマ。

北方の南部で、周辺にはカワラ・オキミヨウ・オオミゾグチ・ミナミザワなどの小字がある。

ホソヌマとは「細長い沼があった所」をいうか。小字の形は、ほぼ長方形であるが。

全国地図には、ホソヌマ地名は1カ所にだけ中・大字として記載があり、「細沼」の字が宛てられている。

#### 【井合】

イアイ。

北方の南部にあり、国道256号線に沿う。

イアイとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アイはアヒ(間)で、イアイはイ(井)・アイ(間)で「井水の間の土地」をいうのであらうか。複数の井水がこの小字内を流れている。

②アイは「湿地」をいう地名用語。イアイとは「井水が流れている湿地」かもしれない。

全国地図には、イアイ地名は5カ所に中・大字として挙げられており、その全てに「居合」の字が宛てられている。

#### 【大水口】

オオミゾグチ。

中央道のナカジマ小字の周辺に二カ所ある。

オオ(大)は「大きい」を意味するのか、あるいは単なる接頭語かはっきりしない。ミゾは「地を細長く掘って水を流す所」(広辞苑)であるから、「井水」のことをいう。クチは「出入口」。

以上から、オオミゾグチは「井水の出入口のある所」をいうのであろうか。

全国地図には、オオミゾグチ地名は記載されていない。

### 【三壺淵】

ミコブチ。

北方南部のオオミゾグチ小字の周りに二カ所ある。

ミコブチとは何か。二説を挙げる。

①親鸞は阿弥陀三尊仏を三骨一廟三尊位」とよんだという。ミコこの「三骨」か。ブチ←フチで「仏」の訓に「フチタウ」(佛道)、「アマタフチ」(阿弥陀佛)(本願寺図録唯信抄)とある。以上からミコブチとは「三体仏からなる阿弥陀如来を祀った所」であろうか。(宮澤恒之氏『伊賀良の地名』による)

②ミコはミコ(巫女)で「神に奉仕して神楽などをする者。未婚の女性が多い」(広辞苑)か。フチはフチ(縁)で「川べり」をいう(語源辞典)。従って、ミコブチとは「巫女が住んでいたことのある川縁」か。ミナミサワ小字に接しており、カワラ小字も近い。毛賀沢が曲流していたか、ミナミサワに関わる流水があったのかどうか。

全国地図には、ミコブチ地名は1カ所に中・大字として挙げられており、「巫女淵」の字が宛てられている。

### 【道下】

ミチシタ。

北方南部の中央道の西側にある。

ミチシタとは、文字通り「道路の下側にある土地」をいうのであろう。

全国地図には、ミチシタ地名は21カ所にあり、その全てが「道下」になっている。

### 【世茂木田】

ヨモギダ。

北方南部の中央道とその東側にある。りんごの里が小字の東端部になる。

ヨモギダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ヨモ←ヨボ←ヨボロ(膝の裏の窪み)と転じた語で、「湿地」をいい、キは「場所」を示す接尾語で、ダはタ(田)か。以上からヨモギダとは「湿地にある田んぼ」を意味するか。バ行→マ行の変化は中世には優勢であったという(国語学大辞典)。

②ヨは美称、モギは動詞モグ(挽)の連用形が名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう。従って、ヨモギダとは「崩れ地のある田んぼ」を意味するか。

全国地図には、ヨモギダ地名は15カ所に中・大字として挙げられており、うち14カ所は「蓬田」となっている。

### 【竿尻】

サオジリ。

北方南部のりんごの里の東側にある。

サオジリとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①サオはアラと同意で「湿地」の地名用語で、ジリはシリが濁音化した語で「背後」をいうか。以上から、サオジリとは「湿地の背後になっている土

地」を意味するのであろうか。

②ジリは形容詞ジルの略で「湿地」をいう。サオジリとは、同義反復で「湿地のある土地」を意味するか。

全国地図には、サオジリ地名は載っていない。

#### 【日向】

ヒナタ。

北方の中央道西側にある。伊賀良低区配水池があるところ。

ヒナタは文字通りで「日当たりのいい土地」であろう。東向きの緩い傾斜地になっている。

全国地図には、ヒナタ地名が141カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【寂円】

ジャクエン。

北方の中南部に広がる小字で、広いのは一カ所、小さいのが五カ所ほどあり、小字発生時には一つながりになっていたものと思われる。国道256号線の西側を中心に東側にも及んでいる。

ジャクエンとは何か。敢えて二説を挙げておきたい。

①ジャクエン（寂円）は宮澤恒之さんが『伊賀良の地名』で述べられている通りであろう。すなわち、親鸞の孫にあたり本願寺の創建者である覚如が1319年に三河から飯田に入り伊賀良の寂円の所に滞在したという文書があり、そのときの僧名である寂円が小字名になっているという。

②可能性はないとはいえないので、もう一説を挙げておきたい。ジャクエンが「寂円」となる以前には、ジャクエンはジャクエ（蛇喰）であったか。ジャクエ＝ジャグエで「地崩」をいう（地名基礎辞典）。すなわち、ジャクエンとは「地崩があって土砂が押し出した

土地」であったかもしれない。三六災害のことが思い出される。ジャクエ→ジャクエンの語末音添加は一般的であったかどうかはわからないが、ビクニ→ビクニン（比丘尼）の例が国語学大辞典には挙げられている。

当然のことながら、ジャクエン地名は、全国地図には記載がない。

#### 【佐平屋敷】

サヘイヤシキ。

北方の南部で、ジャクエン小字に含まれている。

サヘイは固有名詞であろうか。従って、サヘイヤシキは「佐平の屋敷があった所」か。

ジャクエン小字より後に生まれた小字であろうか。市場商人である可能性も高い。

全国地図には、サヘイヤシキ地名は記載が無い。

#### 【西垣外】

ニシガイト。

北方南部にあり、サヘイヤシキ小字の北隣に当たる。

ニシガイトとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ニシガイトを字面の通りに解すれば、「西の方にある有力者の居住地」となる。東西方向でいえば、この小字は中部にあるが、カイト小字の中では西側になることをいうのであろうか。それともフルジョウ小字からみれば、西の方角になるということかもしれない。

②ニシは動詞ニジム（滲）の語幹が清音化した語とすることも考えられる。すなわち、ニシガイトとは「周辺に湿地がある有力者の居住地」を意味するか。

全国地図には、ニシガイト地名は6

カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【吉野垣外】

ヨシノガイト。

北方の中部にある。大きな小字が一つと小さな小字も一つある。

ヨシノガイトとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ヨシノは固有名詞か。すなわちヨシノガイトとは「ヨシノという人が住んでいた屋敷跡」か。市場商人であったらうか。

②可能性は薄いだが、ヨシノは「吉野紙」か「吉野織」に關与する人物がいたかもしれない。ヨシノガイトとは「吉野紙か吉野織に關わる人が住んでいた屋敷跡」か。

全国地図にはヨシノガイト地名は無い。

#### 【上院名】

ジョウインナ。

北方の中央部にある。

ジュインナとは何を意味するのか。あえて二説を挙げておきたい。

①ジョウインナは『下郷村々記』にあるように、当時はジョウアンナといわれていたが長安美（長阿弥）のことであり「上院名は長阿弥の別名」ではないかという（新井利彦氏『伊那谷の地名3』）。その通りであろうと思われる。

②あえて、別の解釈も挙げておきたい。ジョウイン←ショウイン（小院）と濁音化した語で「小さな寺」をいい（国語大辞典）、ナは「場所」を示す接尾語で「土地」をいう古語のナであろうという（語源辞典）。従って、ジョウインナとは「小さなお寺があった所」を意味する。あるいはジョウインはジョウイン（浄院）で「寺院」のこ

と（国語大辞典）。つまりジョウインナとは「寺院のあった所」とも考えられる。

全国地図にはジョウインナ地名は記載されていない。

#### 【ハチヤシキ】

北方中部のジョウインナ小字の北隣にある。

ハチヤシキとは何か。「鉢叩きなどの念仏僧居所」（宮澤恒之『伊賀良の地名』）であろう。ハチはハチヤ（鉢屋）のことで（国語大辞典）、墓地の管理などに従事した民間の宗教者で、鉢屋・鉦打・念仏者など三昧聖と称されていて、托鉢や竹細工などもたずさわっていたという。

全国地図には、ハチヤシキ地名は中・大字として2カ所にあり、「八屋敷」「蜂屋敷」の字が宛てられている。

#### 【浅垣外】

アサガイト。

北方中部のジョウインナ小字の東隣にあり、現在は水田になっている。この付近はカイト名の小字が多い。

アサガイトとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アサはオソ（遅）に通じ、「緩傾斜地」をいう。アサガイトは「緩傾斜地にある屋敷跡地」か。

②アサはオソ（鈍）に通じ、「水の滞る地」だという。とすれば、アサガイトは「湿地にある屋敷跡地」であろうか。屋敷の周辺に沼があれば、侵入しにくい土地になるのであろうか。この種の小字が目につく。

全国地図には、アサガイト地名は記載がない。

#### 【三角】

サンカク。

北方の中央道西側にある小さな小

字である。

サンカクは「三角形の形をしている土地」であろう。

全国地図にもサンカク地名は4カ所に中・大字として挙げられている。小字の数でいえばもっと多いと思われる。

#### 【松垣外】

マツガイト。

北方のカイト小字群の一つで、中央道の西側に接している。

はっきりしない地名であるが、マツガイトとは、「目につくアカマツの樹があった屋敷跡」をいうのであろうか。

全国地図には、マツガイト地名は載っていない。

#### 【川原】

カワラ。

北方南部の中央道の両側に二カ所あり、毛賀沢川・南沢川左岸にある。

カワラとは「川辺の水が少なくして砂石の多い所。川沿いの平地」（広辞苑）をいうのであろう。

全国地図にもカワラ地名は多く、中・大字として126カ所にも挙げられている。

#### 【マセロ】

マセグチ。

北方のりんごの里の北の方にある。

マセは「放牧場の入り口の横木」をいい、長野県の方言でもあるという（国語大辞典）。従って、マセグチとは「牧場の出入口のあった所」を意味するのであろう。

長野県には多いといわれている地名であるが、全国地図にはマセグチ地名が6カ所に中・大字として挙げられている。

#### 【久保田】

クボタ。

北方のマセグチ小字の東隣にある。

クボタとは「窪地で田んぼのあるところ」をいうのであろう。

どこにでもある地名で、全国地図には81カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【四通田】

ヨトオリダ。

北方のクボタ小字の北隣に一カ所、西に離れてもう一カ所ある。

ヨトオリダとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①ヨトオリダは「比較的平地が広く、南北四段に造成された四枚の水田である」（新井利彦氏『伊那谷の地名3』）という。これだけはっきりしておれば、付け加えることはないか。

②それでも、もう一つ加えておきたい。ヨトオ←ヨド（淀）と転訛したことも考えられる。トオはトの長音化した語、母音添加の一つで、カカー←カカ（嚙）の例が挙げられている（国語学大辞典）。リは「場所」を示す接尾語（語源辞典）。以上から、ヨトオリダとは「湿地にある田んぼ」を意味すると考えられないこともない。

全国地図には、ヨトオリダ地名は記録されていない。

#### 【古城】

フルジョウ。

東西の二つのヨトオリダ小字の間にあり、北側にはコンヤガイト小字、南側はマセグチ小字に接する。

フルジョウとは何をいうのであろうか。一般的には「以前に砦があった所」となるが、どうであらうか。

2.5万分の一の全国地図には、フルジョウ地名は12カ所にあり、いずれも「古城」の字が宛てられている。な

お、コジョウ地名は23カ所にあり、うち「古城」の字は17カ所で、残りは「小城」となっている。

#### 【南田】

ミナミダ。

北方のコンヤガイト小字の南隣にある。

ミナミダとは「南の方にある田んぼ」をいうのであろうか。方角の基準になっているのは、北側に接しているコンヤガイト小字かさらに北側にあるクボガイト小字にあった屋敷と思われる。

全国地図の中・大字にはミナミダ地名は15カ所が挙げられており、その全てが「南田」となっている。

#### 【かぎ田】

カギダ。

北方の中央道沿いにある。

カギダ小字はここ伊那谷南部には各地に見られるが、全国地図には載っていない。

カギダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①カギダとは「鍵状に曲がった田んぼ」か。多くの田んぼや地形が、L字形の鍵状に見えないこともないので、問題もあるが、ここでもそれらしく見える。

②カギタ←カキ(欠)・タ(処)と濁音化した語で「崩れ地のある土地」を意味するのかもしれない。

さらに、カキタには、カキ(垣)・タ(処)で、「獣の害を防ぐために設けた垣」と取れないこともないが、山地から少し離れすぎていると判断して挙げないことにした。

#### 【半場】

ハンバ。

中央道の両側にあり、特に西側は国

道256号線近くまで伸びている。

ハンバ=ハバ(岨)には「川べりの緩傾斜地」の意がある。従って、ハンバとは「(扇状地の)緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図には、ハンバ地名は中・大字として、10カ所が挙げられており、うち6カ所が「半場」の字が宛られている。

#### 【栗綿】

クリワタ。

北方の中央道と国道256号線の間にある。

ワタクリとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①クリワタ(繰綿)には「木綿(きわた)を綿繰り車にかけて、種を取り去っただけで、まだ精製していない綿」の意がある(国語大辞典)。以上から、ワタクリとは「木綿にかかわる作業が行われていた土地」をいうのであろうか。綿を栽培して木綿にするか、木綿を織っていたか、あるいは、木綿の流通に関与していたか、詳しいことはわからない。

②クリワタはクリ(礫)・ワ(曲)・タ(処)か(語源辞典)。ワタは「窪地」をいうこともあるという。すなわち、クリタとは「小石混じりの窪地」を意味するか。

全国地図には、クリワタ地名は記載が無い。

#### 【味噌萩】

ミソハギ。

北方の中央道と国道256号線間にあり、クリワタ小字やクラヤシキ小字に接している。

ミソハギとは何を意味するのか。これも二説を挙げておきたい。

①ミソハギとは文字通りのミソハギ



(禊萩)か。つまり「禊萩が群生していた所」かもしれない。ミソハギは本州・四国・九州の山野の湿地に群生し、人家でも栽培され、盆に仏前に供える、という(国語大辞典)。

②ミソはミ(水)・ソ(「場所」接尾語)で「流水」をいい、ハギは動詞ハグ(剥)の連用形が名詞化した語で「崩れ地」をいう(以上は語源辞典)。従って、ミソハギとは「水路が通っていて崩れ地のある土地」をいうか。

全国地図には、ミソハギ地名は載っていない。

#### 【蔵屋敷】

クラヤシキ。

北方の国道256号線に沿っており、北側にはトノクラ小字、南側にはハチヤシキ小字がある。

クラヤシキとは何か。これも二説を挙げておきたい。

①蔵屋敷は「江戸時代、幕府、諸大名が年貢米や国産物を販売するために設けた倉庫兼取引所」(国語大辞典)。ここのクラヤシキも「藩の年貢米や産物の倉庫であり、流通に乗せる基地があった所」であろうか。上郷にもクラヤシキ小字はある。

②語源辞典に依れば、クラは動詞クル(剝)の連用形で、「崩れ地」を意味することもあり得る。すなわち、クラヤシキとは、「崩れ地もある有力者の屋敷跡」か。

クラヤシキ地名は全国地図に、中・大字として7カ所に記載があり、うち5カ所は「蔵屋敷」となっている。

#### 【金谷】

カナヤ。

北方の中央道の西側に添っている。

カナヤ(金屋)は「1288年以降各地に多くの金屋、鋳物師の諸国への定着

と併行している。…その後も近世を通じて長く鋳物師の拠点となっていく」(網野善彦『日本中世の百姓と職能民』)という。

ここ北方のカナヤもカナヤ(金屋)で、「鋳物師が住んでいた所」を意味する。この地域でも鋳物師を必要とするようになっていたのであろう。伊那谷南部も、各地にイモジ小字がある。

全国地図には、カナヤ地名は105カ所も中・大字として挙げられており、うち54カ所が「金谷」、46カ所が「金屋」となっている。

#### 【紺屋垣外】

コンヤガイト。

北方のカナヤ小字の東隣、中道道の東側に沿う。

コンヤガイトとは、「紺屋が住んでいた所」をいうか。

紺屋はコウヤともいうが、「藍染を業とする者。後には一般に染物屋をいう」(広辞苑)とある。江戸時代には農家の副業が多かったが、ここには時代を先取りした、こうした職人もいたのであろうか。

全国地図には、カナヤガイト地名は記載がない。

#### 【久保垣外】

クボガイト。

北方の中央道に沿った、その両側に二カ所ある。

クボガイトとは「屋敷跡のある窪地」をいうか。

全国地図には、クボガイト地名は中・大字として3カ所しか中・大字として挙げられていない。

#### 【山口田】

ヤマグチダ。

北方の中央道に接して、その西側にある。現在はほとんどが畑地になって

いる。

ヤマグチダはヤマグチ（山口）・ダ（処）で、「山に入るための神事がとり行われた場所」をいうのであろうか。

杣人たちは新年の神事を、狩人たちは山口祭を行っていた土地と思われる。

全国地図には、ヤマグチダ地名は載っていない。

#### 【殿蔵】

トノグラ。

北方の国道 256 号線に沿って、クラヤシキ小字の北東に隣接している。

トノクラ（殿蔵）は「江戸時代、諸藩において年貢米を収めておく倉庫」をいう（国語大辞典）。従って、トノグラ＝トノクラで、クラヤシキ（蔵屋敷）と同義である。分筆などの必要性があつて名付けられたものであろう。

全国地図にはトノグラ地名は記載がなく、トノクラ地名が 1 カ所にだけのもっているが、当てられている字は「外袋」である。

#### 【相ノ沢】

アイノサワ。

北方の国道 256 号線に沿った、トノグラ小字の北東隣にある。

分からない小字名である。アイノサワとは「二本の流水の間の窪地」が最も近い解釈と思われるが、他にぴったりの解釈があつてもいいと思われるが、思いつかない。

新井利彦氏は「唐沢と南沢または栃沢の”間の沢”であろう」としている。

全国地図には、アイノサワ地名は中・大字として 15 カ所に挙げられているが、当てられている字はばらばらでまとまっていない。

#### 【砂田】

スナダ。

北方にあり北西端は国道 256 号線に接している。

スナダ←スナタと濁音化した語で、スナダとは「砂地の田」をいう（国語大辞典）。このスナダは、現在居住地と田んぼが半々になっているが、やはり「砂地の田んぼがある所」を意味しているのであろう。

全国地図にも、スナダ地名は 16 カ所に中・大字として記載されており、その全てに「砂田」となっている。なお、スナタ地名も 6 カ所にありこれにも「砂田」の字が当宛てられている。

#### 【日ノ出】

ヒノデ。

北方の中央道上に二カ所あり、ヒヤケ小字やクボガイト小字と混じり合っている。

ヒノデとは「太陽が昇ること」であるが、瑞祥地名として使われるという（語源辞典）。従って、ここでは「日の出も見られる、縁起のいい土地」としておきたい。

全国地図には、ヒノデ地名は 34 カ所が挙げられており、うち 32 カ所には「日・出」の字が使われている。

#### 【唐沢】

カラサワ。

北方の中央道と伊賀良井の間にある。現在は一部が大井公園になっている。

カラサワとは何か。二説を挙げる。  
①カラサワはカラサワ（涸沢）で「水の涸れやすい沢があつた土地」をいうのであろうか。この小字の扇状地の上の方、中央道の北西側には細いが流水はある。

②大洞の土砂の流出によって次第に毛賀沢洞が埋まり現在の南沢の方に

川が移動した結果、「水が涸れた沢」になったために名付けられたという（新井利彦氏）。

全国地図には、カラサワ地名は56カ所も挙げられていて、うち42カ所は「唐沢」となっている。

#### 【観定坊】

カンジョウボウ。

北方のカヤマ小字とシトオリダ小字の間にあり、西端は唐沢に接し、東端は伊賀良井に接している。

カンジョウボウとは「観定坊という僧坊があった所」をいうのであろうか。観定坊は真慶寺の僧坊だったと思われる。真慶寺は一時、「中央部の唐沢の地へ移った」（村史）とあるので、隣のカラサワ小字にあったと思われる。

カンジョウボウ地名は、当然のことながら全国地図には載っていない。

#### 【嘉山】

カヤマ。

東側は伊賀良井に接し、ブガイト・カラサワ・カンジョウボウなどの小字に囲まれている。

カヤマとは何か。二説を挙げる。

①ここには「嘉山塚」があったので、カヤマという小字名になっているという。ここには嘉山四良右衛門の墓碑があったという（新井利彦氏）

②カヤマ←カヤマ（茅山）と転じた語とも考えられる。カヤマ＝カヤバ（茅場）で「草葺屋根の材料であるカヤを供給するための土地」（民俗大辞典）をいう。従って、カヤマとは「草葺屋根の材料であるカヤのある土地」かもしれない。

全国地図には、カヤマ地名は12カ所にあり、うち4カ所に「鹿山」、1カ所に「嘉山」の字が宛てられている。

#### 【日焼】

ヒヤケ。

北方の中央道付近に二カ所あり、カラサワ小字の北西隣に接する。

ヒヤケとは「水はけがよくて、干ばつに弱い土地」をいうのかもしれない。カラサワ小字に接し、スナダ小字も近い。

全国地図には、中・大字としてヒヤケ地名は2カ所にある。

#### 【ウナリ石】

ウナリイシ。

北方の国道256号線と中央道の間にある。

ウナリイワ小字が三穂にある。そこには娘が打ち殺されたという伝説があるという。ウナリイシ地名は、全国地図には無いが、修善寺近くのバス停の名前になっていたり、愛知県対馬にも地名がある。いずれも何らかの伝説が付会されている。ウナリイシ地名は全国地図の中・大字にはないのだから、これらは小字名なのかもしれない。

ウナリイシとは、「川か風が当たってうなりを生じたことがある石のある所」をいうのであろう。大雨で増水した川や強い風の時には音が出ることは十分に考えられる。

#### 【松立】

マツタテ。

北方の国道256号線とその北東側にある井水の間広がる扇状地上の大きな小字である。

マツタテとは「正月の門松を立てること」をいうが、このままでは小字名にはなりにくい。

タテには「台地などの高くなった所」の意がある（語源辞典）。従って、マツタテとは「アカマツが自生してい

る、緩傾斜地の少し高くなっている所」を意味するか。

マツタテ地名は、全国地図には、2カ所が中・大字として記載されており、うち1カ所だけが「松立」となっている。

#### 【坊垣外】

ボウガイト。

北方の伊賀良井右岸にあり、対岸にはネギヤ小字がある。少し南にはカンジョウボウ小字もある。

ボウ（坊）は「堂宇」をいい（語源辞典）、堂宇は「神仏を祀る建物」（広辞苑）である。一般的には坊は寺院の僧坊をいうのであるが、神社の堂を指す場合もある。神仏習合の結果であろうか。

以上から、ボウガイトとは「御堂のあった所」としておきたい。お寺かお宮か、どちらかは不明。

ボウガイト地名は、全国地図に2カ所が中・大字として挙げられている。

#### 【竹越】

タケノコシ。

北方の国道256号線と伊賀良井の間にある。

タケノコシ小字は伊那谷南部には多いが、全国地図に記載がある中・大字には2カ所にあるだけ。従って、中・大字と小字との違いがあるので断定的にはいえないが、伊那谷南部の特徴的な小字である可能性は高い。

タケノコシとは何をいうのか、はっきりはしないが、二説を挙げる。

①タケは「竹藪」をいうか。コシ（越）には「付近」の意がある（語源辞典）。以上から、タケノコシとは「竹藪の付近の土地」をいうか。タケには藪神がこもる所という含意もあるのかもしれない。

②タケは「高くなった所」で、コシ（腰）は「麓」を意味するか（語源辞典）。従って、タケノコシとは「少したかくなった所の麓」を意味するのであろうか。

#### 【鍛冶垣外】

カジガイト。

国道256号線と中央道の間にある。ニザダ小字とボウガイト小字の間にある。

カジガイトとは「鍛冶職人の屋敷があった所」を意味すると思われる。

全国地図には、カジガイト地名は2カ所にだけ中・大字として挙げられている。

#### 【二座田】

ニザダ。

中央道と国道256号線が交差するところで、マツタテ小字とカジガイト小字の間にある。

ニザダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ニザ（二座）は「猿楽の座で長に次ぐ、第二の番目の地位にあった太夫」をいう（国語大辞典）。従って、ニザダとは「猿楽の芸能集団にかかわる土地」であろうか。猿楽は中世後期を代表する芸能で田楽よりも比較的専門色の濃い芸能集団の座組織で、都市部から地方郷村の社寺の祭礼に進出していったという（山路興造ほか）。

②ニザは動詞ニジル（躓）の語幹ニジから転訛した語で「崩壊地形」をいうこともある（語源辞典）。ダはタ（処）。従って、ニザダは「崩れ地のある所」を意味することも考えられる。

全国地図には、ニザダ地名は記載がない。

#### 【三昧原】

サンマイバラ。

中央道と国道256号線に交わる  
ところにあり、ニザダ小字の北東側に  
接する。

サンマイはサンマイバ（三味場）の  
ことで、「火葬場か墓地」を意味する。  
従って、サンマイバラとは「墓地のある  
緩傾斜地」をいうのであろう。

全国地図にはなぜか、サンマイバラ  
地名は載っていない。

#### 【池田】

イケダ。

北方のサンマイバラ小字の北東隣  
にあり、国道256号線が貫いている。

イケダとは何か。語源辞典に依りな  
がら二説を挙げる。

①イケダとは字面の通りで「池がかり  
の田んぼがあった所」であらうか。こ  
の小字発生当時には池があったので  
あらうか。

②イケには「流水」の意もある。ダは  
タ（処）で「場所」を示す接尾語。以  
上から、イケダとは「流水のあるとこ  
ろ」を意味するか。

全国地図には、イケダ地名が96カ  
所に中・大字として挙げられており、  
うち92カ所には「池田」の字が宛て  
られている。

#### 【下木戸】

シモキド。

北方の中央道と国道256号線の  
間にあり、南側のイケダ小字と北側の  
モリ小字に挟まれている。

キド（木戸）は「柵に作った門」を  
いう（国語大辞典）。街道筋になると  
ころには大きな門があったという。警  
備のための門であったのだらう。

以上から、シモキドとは「街道筋の  
下の方にあった警備のための木戸が  
あった所」をいうのであらう。シモと

いうのは、かつての北方の中心部より  
低い方をいうのか、京から下る方を指  
しているのか、どちらかであらう。街  
道は伊那街道である。

カミキドもあつたと思われるが、小  
字には残っていない。

シモキド地名は、全国地図には7カ  
所が中・大字として挙げられており、  
いずれも「下木戸」の字が宛てられて  
いる。

#### 【市場・北市場】

イチバ・キタイチバ。

北方の中央道に沿って、サンマイバ  
ラ小字から北に向かってイチバ小字、  
キタイチバ小字が並んでいる。

イチバは「定期的に市が開かれる場  
所」である（民俗大辞典）。古くから  
市が開かれた場所は、河原・中洲・山  
野・坂・寺社の門前など、境界領域で  
あつたという。物と物との交換だけ  
ではなく人と人との交流が行われた場  
所であり、日常を離れたハレの空間で  
あり、アジールでもあつたという（民  
俗大辞典など）。

以上から、このイチバは「山地と  
平地の境界にあつて、市が開かれてい  
た場所」であらうか。

キタイチバは①「市が開かれていた  
ところの北側の土地」を意味するか。  
あるいは、②ここでも「北側の市が開  
かれていた場所」かもしれない。

全国地図には、中・大字として、イ  
チバ地名は164カ所にもあり、うち  
158カ所には「市場」の字が宛てら  
れている。また、キタイチバ地名は2  
カ所にあり、すべて「北市場」となっ  
ている。

#### 【久保川】

クボカワ。

北方の中央道と新井川の間にある、

流水に沿った長い小字になっている。

クボカワとは「井水が流れている窪地」をいうか。この井水には「久保川」という名が付けられているのかもしれない。

全国地図には、クボカワ地名は中・大字として14カ所が挙げられており、うち12カ所は「久保川」となっている。

#### 【堀ノ内】

ホリノウチ。

北方北部にあり、南側はキタイチバ小字に、北側はミヤノウエ小字に接している。

ホリノウチ（堀内）は、「中世、在地領主の屋敷地内」をいう（国語大辞典）。従って、ここ北方のホリノウチは「地頭の江間氏の居館があった所」と思われる（村史）。

#### 【赤坂】

アカサカ。

北方の北部にあり、西部を伊賀良井と中央道が通っている。

アカサカとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①アカは「赤土」のこと。従って、アカサカとは「赤土の目立つ坂道のあった土地」をいうのであろうか。

②アカはアカ（垢）で「湿地」をいう。従って、アカサカとは「湿地もある傾斜地」かもしれない。すでに伊賀良井が開鑿されていたのであろう。

全国地図にはアカサカ地名は135カ所が中・大字として挙げられており、うち131カ所が「赤坂」となっている。

#### 【宮の上】

ミヤノウエ。

中央道の西側にあり、伊賀良井とは北側と東側に接している。伊賀良井は

この小字の北東角で屈曲しているからである。

ミヤノウエとは「お宮の上の方にある土地」をいうのであろう。お宮は育良神社で、モリ（森）小字にある。ミヤノウエ小字の中央道を越えた東側になる。

全国地図には、ミヤノウエ地名は、中・大字として29カ所が記載されている。

#### 【宮下】

ミヤシタ。

北方の最北端で切石境にある。

ミヤシタも字面の通りで「お宮の下の土地」を意味する。お宮とは育良神社のこと。

ミヤシタ地名は全国地図には中・大字として84カ所が挙げられており、ミヤノウエ地名よりもかなり多い。

#### 【北平】

キタダイラ。

北方の最北端で、中央道より西側の切石境にある。

キタダイラとは「（北方の）中心部より北の方にある平地」をいうか。この地名発生時には、西隣のキタノハラ小字にくらべると、土地利用は進んでいたのであろう。

全国地図には、キタダイラ地名は7カ所に中・大字として挙げられており、そのすべてに「北平」の字が宛てられている。

#### 【洞】

ホラ。

北方北部のキタダイラ小字とミヤノウエ小字に挟まれた平地になっている。

ホラは「小さな谷」をいう。上段の段丘端がへこんでいて、下段にあるホロ小字がその分だけ脹らんでいる。

ハラ地名は全国地図に、中・大字として26カ所が載っており、その全てが「洞」になっている。

#### 【北の原】

キタノハラ。

北方の切石境にあり、伊賀良井の西側に当たる。扇状地の下方にはキタダイラ小字がある。

キタノハラとは「(北方の)中心から北の方にある、未墾地のある緩傾斜地」を意味していると思われる。ハラには、耕地や宅地として利用されていない緩傾斜地で、野以上に水利の便が悪く、採集や狩猟の場をいうらしい(民俗大辞典)。

全国地図には、キタノハラ地名は中・大字として5カ所に挙げられている。

#### 【樋ノ原】

トヨノハラ。

北方の最北部にあり、キタノハラ小字の西側になる。北端には伊賀良井が、南端には新井川が流れている。現在は多くが果樹園などの畑になっていて、下流側に田んぼが少しある。

トヨはトヒ(樋)が転じた語で、「水路。川」の意(語源辞典)。この地域の方言でもある。

従って、トヨノハラとは「流水はあるが、未墾地も残っている緩傾斜地」をいうのであろうか。

全国地図には、トヨノハラ地名は、中・大字として1カ所だけ挙げられている。

#### 【荊界山】

ケイカイザン。

北方の最北端の村境にあって急傾斜地になっている。

ケイカイは「境界」のこと(広辞苑)。従って、ケイカイザンとは「村境にあ

る山地」をいうのであろうか。

全国地図には、ケイカイザン地名は記載がないが、駄科にはケイカイザン小字がある。

#### 【真慶地】

シンケイジ。

これも北方最北端にあり村境に接している広大な小字である。

シンケイジとは「真慶寺のある土地」をいうものと思われる。シンケイの字からみて、小字名が先にあったとは考えにくい。

#### 【五輪】

ゴリン。

北方の入野沢左岸にあって、新井川と交差する地点の上流側になる。

ゴリンとは何か。二説を挙げておく。

①一般的には、ゴリンといえば、「五輪の塔があった所」をいう。果たして、この地に五輪塔があったのかどうか。

②ゴリン←ゴリ←コリ(凝)と転訛した語で、「ゴツゴツした所」、「岩石の多く集まった所」をいう(語源辞典)。ここのゴリンは「大きな石がごろごろしていた土地」だったかもしれない。入野沢が急傾斜地から緩い傾斜地にかかる場所にあり、大きな石が置き去りにされた土地とも考えられる。

全国地図には、ゴリン地名が11カ所に中・大字として挙げられており、うち9カ所に「五輪」の字が宛てられている。

#### 【井上】

イノウエ。

北方の入野川を挟んでゴリン小字の対岸にある。

イノウエとは、「井水の上側にある土地」をいう。井水とは新井川を指している。

イノウエ地名は、中・大字として全国地図に56カ所の記載がある。うち1カ所はひらがなで表記されているが、あとの55カ所は「井」と「上」の字が使われている。

#### 【砂原】

スナハラ。

北方の入野川右岸にあり、ゴリン小字の下流側になる。

スナハラは「広い砂地」をいう(国語大辞典)。すなわち、ここのスナハラとは「広い砂地のある所」をいうのであろう。扇状地の緩傾斜地になっているが、ここで土石流などの強い流れが緩むのであろうか。上流側のゴリン小字にあるような石ではなくて、砂が堆積したものと思われる。

全国地図には、スナハラ地名は25カ所に中・大字として挙げられており、その全てが「砂原」になっている。

#### 【九ノ木】

クノキ。

北方の新井川左岸にあり、スナハラ小字の南に接している。

クノキとは何を意味するのか。新井開鑿に関わった尾曾九助の名が村史に挙げられている。その”九”が気になって、「九助さんの屋敷の裏手にある土地」とも考えたかったが、無理かもしれない。

クノークネ(語源辞典)と転じたか。クネは「垣根」をいう。恐らくは「猪垣」のことではないだろうか。キは「場所」を示す接尾語。以上から、クノキとは「猪垣があった所」としたいがどうであろうか。

猪垣は石積み・木柵・シシドテと呼ぶ土塁などがあって、いずれも猪の体をわずかに越える程度の高さながら、これを飛び越えて侵入することはほ

とんどない。その外側に沿って進み、田畑をそれていってしまう。しかし少しでも決壊した箇所があると、そこを鼻先で広げて侵入するという(民俗大辞典)。

全国地図には、クノキ地名は1カ所にだけ中・大字として挙げられており、「久の木」の字が宛てられている。

#### 【鈴ヶ免】

スズガメン。

BLUE MAPによれば、この小字は、北方の「九ノ木」小字と「道下」小字に挟まれており、北側は「北の原」小字に、南側は「西山」小字に接しており、南には御玉稲荷神社がある。現在は田んぼになっている。

スズガメンとは何を意味しているのか。スズ(鈴)は南側にある御玉稲荷□社の”御玉”をいうのかもしれない。京都の出世稲荷神社に出世鈴があり、東京港区には鈴振稲荷神社がある。稲荷社と鈴と関係がないこともないのだが、全国に2970社あるという稲荷社の中で2社ほどあってもこれと関係があるとはいいきれまい。いずれにしても、分かりにくい小字名である。三説を挙げたい。

①スズは「湧水地」をいう(語源辞典)。メン(免)は「荘園で、特定の田地や在家の領主に対する年貢・課役分を荘官などに報酬として支給すること」(国語大辞典)をいう。以上から、スズガメンとは、「自然湧水のある荘官に与えられた給田」をいうのであろうか。

②猿樂などで鈴が使われていたのではないだろうか。能の三番叟は後半の鈴の段では鈴が主役になる。能の前身である猿樂でも鈴の出番があったと思われる。中古から中世にかけて寺社



に所属する猿楽などの職業芸能人は社寺の神仏事や祭礼を支えていた(国語大辞典)。それらの芸能人が所有し耕作する田畑もあつたのではないだろうか。以上から、スズガメンとは「免租地になっていた寺社に所属する芸能集団の所有する田畑」を意味するか。

全国地図には、スズガメン地名は記載が無い。

#### 【清水】

シミズ。

北方の北部、キタノハラ小字の南隣にある。

シミズとは、字面の通りで「自然湧水のある土地」をいうのであろう。

全国地図には、シミズ地名は236カ所も、中・大字として挙げられている。

#### 【猿垣外】

サルガイト。

北方の北部、シミズ小字の南、ホリノウチ小字の北に二カ所ある。小字名発生当時には繋がっていたと思われる。

サルガイトとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①サルガイトとは、「猿楽芸能人が猿飼が住んでいた所」であろうか。猿楽も猿飼も寺社の神仏事や祭礼に奉仕していたものと思われる。高森町には「猿屋」とか「猿屋敷」という所があつて猿を飼っていたという(水野都生)。

②サルはサラ、サリ、サレなどの転で「崖地」をいう。サルガイトとは「崖地のあつた居住地跡」をいうのかもしれない。

サルガイト地名は、全国地図に中・大字として、1カ所にあり「猿谷外」

の字が宛てられている。

#### 【山口】

ヤマグチ。

北方の御玉稲荷神社の東隣を含めて、その近くに三カ所ある。

ヤマグチとは何か。二説を挙げたい。

①ヤマグチとは、字面の通りで、「山地への入口になっていた所」を意味するものと思われる。それは単なる山への入口というだけではなくて、そこで山口祭などの神事が行われていたのであろう。

②ヤマには「墓地」の意もある(語源辞典)。よつて、ヤマグチは「墓地のある西方山地への入口」をいうのかもしれない。

全国地図には、ヤマグチ地名は中・大字として233カ所にあり、うち231カ所で「山口」となつている。

#### 【道下】

ミチシタ。

北方のヤマグチ小字の間にある。

ミチシタとは、文字通りで「道路の下側にある土地」を意味する。ただ、その道路がはっきりしない。南側にある道路は”下”とはいえない位置にあるので、今はなくなつている道路を指すのかもしれない。

ミチシタ地名は、全国地図には21カ所が中・大字として挙げられており、その全てが「道下」となつているが、意外と少ない。

#### 【辰野】

タツノ。

北方の西部にあり、新井川を挟んだ広大な面積を有する小字で、その西方にさらに三カ所の小さな小字もある。

タツノとは何か。二説を挙げる。

①タツ←タチと母音交替したもので、

タチは動詞タツの連用形が名詞化した語で「崩壊地形」をいう(語源辞典)。イ段からウ段への交替はかなり多いという(国語学大辞典)。ノ(野)は「水のかかりが悪く、耕作すること、特に水田を開くことが困難で雑木林や竹林になっていることが多い」(『地図から歴史を読む』)という。以上から、タツノとは、「崩れ地のある傾斜地になっている野原」を意味するか。

②タツはタチ、タテの転訛した語で「高くなった所」をいう(語源辞典)。従って、タツノとは「(北方中央から見て)高くなっている野原」をいうか。扇状地の中腹に当たる。

タツノ地名は、全国地図に中・大字として、15カ所あり、うち3カ所が「辰野」になっている。

#### 【樋ノ下】

トヨノシタ。

北方の広大なタツノ小字の東隣にくっついている。

トヨはトイ(樋)の伊那谷南部の方言で「井水」をいう。

従って、トヨノシタとは「井水の下の方にある土地」をいう。この小字は井水である新井川の東方の下の方にある。

全国地図には、トヨノシタ地名は中・大字として、1カ所にだけある。地域語であれば、当然の数であろうか。

#### 【西山】

ニシヤマ。

この小字も北方のタツノ小字の東隣にあり、御玉稲荷神社の境内を重なる。

ニシヤマとは何か。二説を挙げておく。

①ニシヤマとは文字通りで「(北方の中央部からみて)西の方にある山地」をいうか。

②ニシは動詞ニジム(滲)の語幹の清音化したもので「湿地」をいい、ヤマは「墓地」を意味する(語源辞典)。従って、ニシヤマとは「湿地で墓地のある所」かもしれない。

全国地図にはニシヤマ地名は中・大字として170カ所が挙げられており、うち167カ所が「西山」となっている。

#### 【堤田】

ツツミダ。

北方の御玉稲荷神社の南方にあって、周辺にはニシヤマ・トヨノシタ・ミズグチ・クボカワなどの小字がある。

ツツミダとは、「沼のある土地(田んぼ)」をいうのであろう。かつては、湿地の水を集めた沼があったのであろう。

ツツミダ地名は、全国地図には中・大字として6カ所が挙げられており、その全てに「堤田」の字が宛てられている。

#### 【水尻】

ミズジリ。

北方のヤマグチ小字とクボカワ小字の間にある小さな小字である。

ミズジリは「流れ込んだ水の出口」をいう(国語大辞典)。したがって、ここ北方のミズジリは「湿地帯の水を川に落とす出口のある所」を意味するものと思われる。

全国地図には、ミズジリ地名は中・大字として1カ所に挙げられており、「水尻」となっている。

#### 【南田】

ミナミダ。

北方のミズジリ小字の下流側にある、これも小さな小字。

ミナミダとは「南の方にある土地（田んぼ）」をいう。方向の基準になっているのは御玉稲荷神社であろうか。ミナミダ小字は稲荷社の南方にある。

#### 【門口】

カドグチ。

北方のヤマグチ小字の南側にあり、御玉稲荷神社も近い。

カドグチは「門の入口。また、そのあたり」をいう（国語大辞典）。従って、ここのカドグチも「（御玉稲荷神社への）入口のあたり」を意味するのであるか。お宮ではなくて、あるいはお宮を含めて、ヤマグチ小字への入口を指していることも考えられないこともない。

2. 5万分の1全国地図には、カドグチ地名は、中・大字として2カ所が挙げられており、いずれも「門口」の字が宛てられている。

#### 【元前田】

モトマエダ。

北方のカドグチ小字の南東方向の下流側にある。

モトマエダとは、文字通り「以前、前田であった所」を意味するのである。ここで、この小字が移動したということは考えにくいので、この小字の北～西の方向に寺社か有力者の屋敷があったと思われる。それが何かは未確認。

全国地図には、モトマエダ地名は、さすがに記載がない。

#### 【洞】

ホラ。

北方のホラ小字は二カ所にある。一つはモトマエダ小字の南隣に、もう一

つは北部のキタダイラ小字の南隣にある。

ホラは下伊那や北設楽郡の方言で「山あいの地。谷間」の意がある（国語大辞典）。ここ北方のホラも「低い崖と水路に囲まれた土地」をいうのであろうか。

#### 【原】

ハラ。

北方のトヨノシタ小字やクボガワ小字の南隣にある。現在は大部分が果樹園になっている。

ハラは「広い緩傾斜地」をいうのであろう。扇状地の中腹にある。この小字名の発生時には、開墾地もあったであろうが、多くは未墾の地で「野以上に水利の便が悪く、採集や狩猟の場」（民俗大辞典）であったと思われる。

全国地図には、ハラ地名はさすがに多く、中・大字として450カ所に挙げられており、うち447カ所が「原」となっている。

#### 【梨ノ木】

ナシノキ。

ナシノキ。

北方のクボガワ小字とチトリバラ小字に南北を挟まれている。

ナシノキとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ナシは動詞ナラス（平）の連用形の名詞化した語で「緩傾斜地」をいい、ノキは下伊那郡や北設楽郡の方言で「裏手」の意（語源辞典）。以上から「屋敷の裏手にある緩傾斜地」をいうのであろうか。屋敷とは、南側にあるツジガイト小字にあった屋敷であろうか。

②ナシノキ＝ナシで、野生種のナシが自生していたのであろうか。栽培種があったとは思われない。従って、ナシ

ノキとは「梨の木が自生していた土地」を意味するのかもしれない。

全国地図には、ナシノキ地名は22カ所が中・大字として挙げられており、その全てに「梨」の字が入っている。

#### 【神生地】

シンセイダと地元では言っているという。

北方のナシノキ小字の下流側の南東隣にある。

シンセイダとは何を意味するのだろうか。二説を挙げたい。

①シンセイ←シンゼイ（神税）と清音化した語で「古代、神社の修造、祭祀などの経費に充てるため、神戸から上納した租税」をいう（国語大辞典）。中世末になってそうした習わしが残っていて、氏子たちが収穫した穀物を神社の修造や祭祀に充てたことは考えられる。以上から、シンセイダとは「収穫物を神社の諸費用にあてた田んぼ」をいうのではないだろうか。神田であり、免田でもあったと思われる。

②シンセイはシンセイ（新生）で、シンセイダとは「新たに造成された田んぼ」をいうか。瑞祥地名である（語源辞典）。

全国地図には、シンセイダ地名は記載されていない。

#### 【小倉】

オグラ。

北方の南側と東側がイチバ小字に、西側はシンセイダ小字に接している。

オグラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①オグラはオ（小）・クラ（倉）。オは語調を和らげる接頭語で、クラは倉庫。従って、オグラとは「倉庫があっ

た所」をいうのであろう。隣にある市場に必要な施設だったと思われる。

②オグラ←オ（御）・クラ（座）と濁音化した語で、クラは「神の鎮座する所」のこと。つまり、オグラとは「神を祀ったことのある場所」であった可能性もあるが、根拠は西隣にシンセイダ小字があることだけ。

全国地図には、オグラ地名は71カ所に中・大字として挙げられており、うち66カ所が「小倉」となっている。

#### 【辻垣外】

ツジガイト。

北方のチトリバラ・イチバ・マツダテなどの小字に囲まれている。

ツジガイトとは「辻にある屋敷跡」であろうか。辻は道路が十字形に交叉している所であるが、「交通、交易のチマタであり、わずらわしいものを置いてきて禍を福に変えるには由縁ある場所だったし、精霊・旅人の送迎の場、他界に通ずる境の地でもあった」（民俗地名語彙事典）。

全国地図にはツジガイト地名は、なぜか記載が無い。

#### 【血取原】

チトリバラ。

北方のナシノキ小字の南隣に、ツジガイト小字の西隣にある。

チトリバラ（血取原）＝血取場で、「定期的にハクラク（伯楽）などと呼ばれる民間の獣医がやってきては、馬のひづめを削ったり悪血を抜いたりした場所。ムラなどの共有地に設定されることが多い」（民俗大辞典）という。長野県内では牛のひづめを削ったところもあるようだ。

以上から、チトリバラとは、「馬や牛のひづめを削ったり、悪血を抜いたりした所」を意味するのであろう。

### 【殿村】

トノムラ。

北方の国道 256 号線の北西側にあり、反対側の北東側にはトノクラ小字がある。

トノムラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①トノ←タナ(棚)と転訛した語で「棚状の地」をいい、ムラは「村落の中心部」をいうか。以上から、トノムラは「棚状の傾斜地にある村落の中心部」をいうのであろうか。しかし、ア段→オ段の母音交替は稀だという(国語学大辞典)のが気になる。

②トノは「有力者の屋敷」をいうのかもしれない。すなわち、トノムラとは「有力者の屋敷がある集落の中心部」を意味するのかもしれない。松尾城主が隠居した庵は近い。

### 【長阿弥】

ジョウアミ。

北方の新井川の西側にあるが、より小さなジョウアミ小字が東側にもある。

ジョウアミとは「長阿弥庵があった土地」を意味するのであろう。長阿弥は、弘安七年(1284)に松尾城主小笠原長政が隠居した時の号だという(村史)。かなり広い面積になっているが、所領付きの庵だったのであろうか。

### 【二ツ塚】

フタツヅカ。

北方の西部にあり、ジョウアミ・ヨシノガイト・ジャクエンなどの小字が周辺にある。

フタツヅカとは「二の古墳が近くにある土地」をいうのだろうか。二の古墳とは、二ツ塚1号墳と二ツ塚2号墳を指す。いずれも円墳で、フタツヅカ小字の近くのイギョウ小字とジャク

エン小字にある(村史)。

### 【仲休】

ナカヤスミ。

北方の西部にある。

ナカヤスミとは何を意味するのであろうか。語源辞典を参考にしながら二説を挙げる。

①ナカはナカ(中)で、二本の流水をいい、ヤはイハ(岩)の約で、スミ(隅)は「奥まった所」をいう。以上から、ナカヤスミとは「二本の川に挟まれた石の多い扇状地の奥まった土地」を意味するか。

②あるいは、ナカ(中)は「山へ入る二本の道路」をいうか。すなわち、ナカヤスミとは「二本の道路に挟まれた、石の多い扇状地の奥まった土地」か。

### 【富士塚】

フジヅカ。

北方のナカヤスミ小字の南側にある広大な小字である。

フジヅカとは「富士塚が築かれていた土地」をいう。現在はないが、江戸時代には築かれていたが、明治20年ごろ崩して畑にしたが、その祟りで腸チフスが流行したといわれたという(伊賀良の民俗(1))。富士塚は富士山を模した小型の築山であるが、この富士塚には富士登山をしたのと同じ御利益を求められるとされていた。特に近世中期以降に爆発的な人気を博したが、幕府により富士講の結成が弾圧されることがあった。富士講を母体にして、扶桑教・実行教・丸山教に再編成されていったという(民俗大辞典)。

### 【垣外原】

カイトバラ。

北方西部のタツノ小字に北側に貼

り付いている、小さな細長い小字である。新井川に合流する支流の開析した小さな谷にある。

バラ←ハラ（原）と濁音化した語で「場所」の意か（語源辞典）。

従って、カイトバラとは「屋敷があった所」をいうのであろうか。

#### 【入野】

ニュウノ。

北方の最西端の山地にある。

ニュウノとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ニュウはニ（丹）・フ（生）の転じた語で「赤土」をいい、ノ（野）は「緩傾斜地」か。以上から、ニュウノとは「赤土のある緩傾斜地」をいうか。この小字は山地の傾斜地の傾斜が緩む場所にある。

②ニュウ←ニブ（鈍）と転訛した語で「緩傾斜地」をいい、ノ（野）には「入会草刈地」の意がある。従って、ニュウノとは「入会の草刈地がある緩傾斜地」を意味するか。

#### 【財京原】

ザイキョウバラ。

北方西部の谷部にある細長い小字である。

ザイキョウ（財京）小字については、すでに①「在家衆易行の場であった所」か、あるいは②「商工業の集落のあった所」ではないかとした。

ではザイキョウバラとは何をいうのであろうか。これにも二説を挙げておきたい。

①ハラ（原）は「場所」の意とすれば、ザイキョウと同じで「在家衆の易行の場であったところ」となる。

②ザイキョウ←サイキョ（斎居）で「身を清め、慎んでいること」をいい（国語大辞典）、ハラ（原）には「神聖な

地」の意がある（語源辞典）。従って、ザイキョウバラとは「神事や法会も前に潔斎する、神聖な場所であった所」かもしれない。

#### 【原林】

ハラバヤシ。

北方西部の扇状地にある台地状の緩傾斜地にある。

ハラバヤシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ハヤシには「傾斜地」の意がある。ハラバヤシとは「草刈入会地のある傾斜地」をいうのかもしれない。

②ハラバヤシとは「水利の便が悪く、草刈入会地になっている、樹木のある緩傾斜地」をいうのであろうか。

#### 【観音堂原】

カンノンドウバラ。

北方最西端の谷間の緩傾斜地にある。真慶寺が阿弥陀原から、一時この地に移っていた場所である（村史）。

カンノンドウバラとは、「真慶寺の観音堂があった所」をいうのであろうか。

#### 【堂平】

ドウダイラ。

北方の最西端にあり、ニュウノ小字の北隣になる。

ドウ（堂）は「神仏を祭る建物」（広辞苑）で、ダイラ←タイラの濁音化した語で「山の中腹の平らな場所」（語源辞典）をいうのであろうか。

以上から、ドウダイラとは、「神仏を祀る御堂のあった緩傾斜地」としておきたい。

#### 【大ナギ・内大ナギ・外大ナギ】

オオナギ・ウチオオナギ・ソトオオナギ。

これらの小字は北方西部の扇状地の上部にある。大ナギ小字は三カ所、

ウチオオナギ・ソトオオナギ小字は小さなのが一カ所ずつ。

ナギ（薙）は「山で、薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）をいう。従って、オオナギとは文字通りで「大きな崩崖のある所」をいうのであろう。

ウチオオナギのウチ（内）は「奥まった所」（国語大辞典）をいう。ウチオオナギとは「谷の奥まった所にある崩れ地」を意味する。

ソトオオナギのソト（外）は「傍。かたわら」（国語大辞典）の意で、ソトオオナギとは「（オオナギの）傍らにある崩れ地」をいうのであろう。ソトオオナギ大字はオオナギ小字に瘤のようについていて、堤がある。

#### 【大原】

オオハラ。

北方西部の側稜と接する扇状地の最上部にある、広い面積をもった小字。

ハラ（原）には「耕地や宅地として利用されていない緩傾斜地で野以上に水利の便が悪く、採集や狩猟の場」（民俗大辞典）の意がある。

オオハラとは「水利の便のよくない未墾地の多い、広大な緩傾斜地」を意味するのであろうか。

#### 【久保】

クボ。

北方西部の入野沢南側の丘を越えた谷にある、細長い小字である。

クボは字面の通りで、「細長い窪地になっている所」をいうのであろう。

#### 【傳平】

デンベイ。

北方西部のオオナギ小字・ツチダイラ小字の扇状地下流側にある、広大な小字である。

デンベイとは何を意味するのか、分かりにくい地名である。

上川路にデンペイジョウ（傳平城）という小字がある。解釈はデンペイ←テッペン（天辺）で「頂上にある砦」か、あるいはデン（天）・ベイ（平）で「山の上にある砦」としたが、北方のデンベイは何だろうか。二説を挙げたい。

①デンベイとは、やはり「高い所にある緩傾斜地」であろうか。北方の中央から見て、“高いところ”としたのかもしれない。

②思い切って、デンベイとは固有名詞ではないだろうか。“傳平”あるいは“傳兵衛”ということになる。従って、デンベイとは「デンベイさんの所有地のあったところ」となるが、未開地であれば、入会地の多かった時代だから、成立しにくい解釈かもしれない。

#### 【土平】

ツチダイラ。

北方の扇状地の上部にある広い小字で、オオハラ小字の下方になる。

ツチダイラとは何か。二説を挙げておきたい。

①ツチには「階段。きざはし」の意があり、ダイラは「山の中腹から麓のあたり」をいう（国語大辞典）。以上からツチダイラとは「階段状になっている山地の中腹から麓のあたり」を意味するか。ダイラに緩傾斜地の意を辞書類から探し出せないで、やや苦しい解釈になる。

②ツチ←ツキ（尽）と転じた語で「台地の端」の意がある（語源辞典）。ツチダイラとは「台地の端になっている中腹から麓のあたり」か。台地の端とは上方の端、すなわち尾根地域に接する

付近とみれば成立する解釈ではないだろうか。

#### 【大原尻】

オオハラジリ。

オオハラ小字の下方にある細長い小字である。

オオハラジリは字面の通りで「オオハラ小字の下方にある土地」をいう。

#### 【勅当原】

チョクトウバラ。

北方西部にあり、オオハラ小字やオオハラジリ小字に囲まれている。大原集会所の北方になる。

チョクトウ←チョクドウ（直道）と清音化した語であろうか。チョクドウ（直道）とは「まっすぐな道路」をいう（国語大辞典）。

従って、チョクトウバラとは「まっすぐな道路がある水利の便のよくない傾斜地」を意味するのであろうか。

#### 【位京・位京原】

イキョウ・イキョウバラ。

北方の南西部にあり、ジャクエン小字群の西側で扇状地の上側になる。イキョウバラ小字は台地の南向き傾斜地にあり、イキョウ小字はその南側の谷にあり現在は水田地帯になっている。また、南部には、イキョウ小字群ともいふべき、小さなイキョウ小字がたくさんある。

イキョウとは何か。二説を挙げたい。

①イキョウ←イギョウ（易行）と清音化したもので、「だれにでもたやすく行える仏道修行」をいう（国語大辞典）。

『伊賀良の地名』には「真宗教団の法師たち易行の場」（宮澤恒之氏）とある。

②イキョウ←イギョウ（圍繞）と、こ

れも清音化した語で、「回りをとり囲むこと。古くは囲まれるものに対する敬意を伴って用いられることが多い」（語源辞典）という。以上から、イキョウとは「台地に囲まれた土地」をいうことも考えられる。この中には宗教関係の施設があったかもしれない。

イキョウバラも同様で、「仏教修行を行った、未墾地の多い傾斜地」をいうか。あるいは「ほぼ平坦な緩斜面に囲まれた神聖な土地」を意味するのであろう。

#### 【河原】

カワラ。

北方西部の毛賀沢川の沿岸にあり、北端には大原集会所がある。現在は果樹園などの畑と住宅地が多く、一部には水田や荒地がある。

カワラは「川辺の水がなくて砂石の多い所」（広辞苑）で、そのままに適用できそうな土地になっている。

#### 【弥平塚】

ヤヘイツカ。

北方西部にある小さな小字である。ここには弥平塚と呼ばれている円墳があり横穴石室もあったという。この円墳の東側には、中世火葬墓群もある（村史）。

ヤヘイは固有名詞か。であれば、ヤヘイツカとは「弥平所有の塚」をいうのであろう。

#### 【細田・細田原】

ホソダ・ホソダッパラ。

北方南部の大瀬木境にある。細田沢川左岸になる。

ホソダとは何か。二説を挙げる。

①ホソ（細）・ダ（処）で、「（台地が下方に向かって）細長く突き出ている所にある土地」を意味するか。細田沢川と支流に挟まれた細長い台地に



なっている。

②ホソダとは「細田沢川が流れている所」をいうのかもしれない。

ホソダッパラは「(下方に向かって)細長く突き出ている、水利の便がよくない台地」であろうか。

#### 【能化】

ノウケ。

北方の大瀬木境付近で、国道 256・153 号線の西側に、三カ所。毛賀沢川の左右の両岸にある。また、大瀬木にもノウケ小字がある。

ノウケとは何か。二説を挙げる。

①ノウケ(能化)は「師として他を教化できる者。寺院・宗派の指導者」(国語大辞典)をいう。従って、ノウケとは「寺院・宗派の指導者が住んでいた所」だろうか。宮澤恒之氏も「弟子を教化する師匠をさし、念仏僧・聖・徳の高い人や真宗本願寺派では学頭職の称にも用いられた」(伊賀良の地名)としている。

②ノウケ←ノケと転じた語で、ノケ(徐)に通じ、「崩壊地形、浸食地形」をいうか(語源辞典)。すなわち、ノウケとは「(川の)浸食で崩崖のある土地」をいうのかもしれない。ノウケ小字群の間を毛賀沢川が流れている。

#### 【野池】

ノイケ。

北方南部の大瀬木境にあり、ノウケ小字に挟まれたり接したりしている。

ノイケとは何か。二説を挙げたい。

①ノイケ←ノウケ(能化)と転訛した語で「弟子を教化する師匠」をさす(宮澤恒之『伊賀良の地名』)。

②ノ(野)は「自然の広い平地。多く、山すその傾斜地」(広辞苑)をいい、イ(井)・ケ(「場所」接尾語)か。以上から、ノイケとは「山すその傾斜

地を流れる川のある土地」をいうか。イケには「川」の意もあるという(語源辞典)。

#### 【文吾林】

ブンゴバヤシ。

北方最南部の大瀬木境にある広大な小字である。

ブンゴバヤシとは何を意味するのか。三説を挙げたい。

①ブンゴ←ブツボ(仏後)と転訛した語。従って、ブンゴバヤシは「仏に変身した仏後の居場所(墓域)が林野に変容していく仏後林の転訛とみたい」という(宮澤恒之『伊賀良の地名』)。

②ブン←フミと転じた語で「フモト(麓)」の意で、ゴはコ(処)の濁音化したもの(以上は語源辞典)。以上から、ブンゴバヤシとは「山地の麓にある林地」をいうか。

③ブンゴは固有名詞である可能性も。豊後国か人名であろう。すなわち、ブンゴバヤシとは「豊後国に関わる林地」か「文吾さんの所有地のあるところ」かもしれない。

#### 【梶屋敷】

カジヤシキ。

北方の南部にあり、すぐ北側には毛賀沢川が流れている。

カジヤシキとは何か。二説を挙げる。

①カジはカジ(鍛冶)で、カジヤシキとは「鍛冶職の屋敷のあったところ」か。

②カジは動詞カジル(搔。嚙)の語幹で「ひっ搔かれたような地形」をいう(語源辞典)。つまり、カジヤシキとは「(近くに)崩れ地のある屋敷跡のあるところ」か。

#### 【沢端】

サワバタ。

北方南部の国道が毛賀沢川を渡る、その右岸にある。さらに西方のも小さな小字がある。

サワバタは、字面の通りで「川の沿岸の地」であろう。川とは当然ながら毛賀沢川のこと。

#### 【北沢】

キタザワ。

大瀬木最北端部の北方境にある。

キタザワは字面の通りで「(大瀬木の)北の方の川の流れている土地」をいうのであろうか。あるいは「北方から流れてくる川のある土地」とも考えられないわけではない。

#### 【北沢尻】

キタザワジリ。

大瀬木最北端の北方境にあり、中央道の飯田インターにかかっている。

キタザワジリとは「キタザワ小字の下流側の土地」をいうものと思われる。

#### 【手取桶】

テドリオケ。

これも大瀬木最北端部にあり、北側は北方境で東側は上殿岡境になっている。

テドリオケとは何か。これも分りにくい地名である。”手桶”と関わりがあれば分かり易いが、小字の形で判断するのは難しい。語源辞典に依りながら、二説を挙げておきたい。

①テドリオケ←テ(接頭語)・ドロ(泥)・オキ(沖)と転訛したと考える。テは単に語調を整える接頭語、ドロは「湿地」のこと、オキは長野県ほか各地で使われているように「田畑の広い所」をいう。なお、オキ→オケのイ段からエ段への母韻交替は極めて多いという(国語学大辞典)。以上から、テドリオケとは「湿地もある田畑

の広い土地」をいうのであろうか。

②ドロはトロの濁音化した語で「緩傾斜地」の意味もある。従って、テドリオケとは「田畑の広い緩傾斜地」をいうのかもしれない。

#### 【下原】

シモハラ。

大瀬木南東部の三日市場境にある。

シモハラは2.5万分の1地図で中字になっている「霜原」と出世?した地名であらうか。

かつて、この地は桑園が多かった時代には、晩霜の被害を受けやすいところだったと聞いたことがある。

従って、シモハラとは「霜が降りやすい土地」を意味するものと思われる。

#### 【榎田】

エノキダ。

この小字も大瀬木の三日市場境にあり、シモハラ小字の南隣になる。新川が屈曲している左岸にある。

エノキダとは何か。二説を挙げる。

①エノキはエ(江)・ノキ(抜)で、「川がある所の崩壊地」をいうのであろうか。すなわち、エノキダとは「川が流れていて崩崖もある田んぼ」を意味するか。

②エノキダとは、字面の通りで「目立つようなエノキの木があった田んぼ」であらうか。村境で意識的に植えられたものか、あるいは単に自生していただけなのかは不明。

#### 【柳坪】

ヤナギツボ。

ヤナギツボ。

大瀬木の南東部の中央道の南西側にあり、新川と井水に挟まれている。

ヤナギツボとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①ヤナギはヤナ(斜面)・ギ(「場所」接尾語)で、ツボは「窪地」をいう(語源辞典)。であれば、ヤナギツボとは「傾斜地で窪地もある土地」をいうのであろうか。

②ヤナギは植物で、ツボは「方一町の区画のこと」(国語大辞典)をいう。すなわち、ヤナギツボとは「周辺にヤナギの木が自生していた区画のあったところ」であらうか。その区画は水田であったのであろうか。

#### 【十通田】

ジットウリダ。

『伊賀良の地名』の小字図にはないが、地番から判断して、大瀬木のヤナギツボ(柳坪)小字の中デエスティールの南東側にあったと思われる。

ジットウリダとは何か。ジットウリダ←シトオリダ←シトリと転訛したか、あるいは、ジットウリダ←ジトリと転じたか、どちらかであらう。国語大辞典に依りながら、三説を挙げておきたい。

①シトリは動詞シトル(湿)の連用形が名詞化した語で、ジットウリダとは「湿地にある田んぼ」をいうのかもしれない。

②ジトリハジトリ(地取)で「地割り」のこと。従って、ジットオリダとは「地割りをした田んぼ」か。何らかの理由で地割りをしたことがあった水田かかもしれない。

③シトリはシドリ(倭文)か。古代の織物の一つで梶の木や麻などを青や赤などに染めて乱れ模様にしたものだという。はっきりはしないが、ジットウリダとは「倭文に関わる土地」も考えられる。原料を栽培したのか、倭文を織ったところなのか、その販売に関係したところなのか、わからない

が、その痕跡が中世まで残っていた可能性はある。

#### 【寺田】

テラダ。

大瀬木の飯田インター南の中央道と重なる。

テラダは「寺院所有の田地」(広辞苑)のこと。従って、ここのテラダも「寺院が所有する寺田のあった所」であらう。どの寺院の寺田であったのか、はっきりはしないが、近いところでは少し北方のニシオカ小字に「下大瀬木の観音堂」がある。伊那郡□社佛閣記にある清浄山観音寺ではないかという(伊賀良の民俗(1))。本尊は聖観音で、現在地より北50mほどのところにあったが、織田の兵火に焼かれたという。

#### 【井村】

イムラ。

大瀬木のテラダ小字西隣にある。

イムラとは何か。二説を挙げておく。

①イムラを字面通りに考えれば、イムラとは「流水のある人家の群がっている土地」となるが、どうであらうか。この小字を現在も、新川や井水が流れている。

②ムラ←モリ(盛)と転じた語で、「凹凸の多い地」の意もある(語源辞典)。すなわち、イムラとは「川や井水などが流れている凹凸のある土地」かかもしれない。

#### 【田中】

タナカ。

大瀬木のテラダ小字やイムラ小字の北隣にあり、一部は中央道にかかっている。

タナカとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①タナカといえば、一般的には「田んぼに囲まれた土地」をいうのであろう。現地も、そうではないと否定はできない状況にある。

②タナ(棚)・カ(「場所」接尾語)とも考えられる(語源辞典)。すなわち、タナカとは、「棚状になっている土地」をいうのかもしれない。扇状地の中腹部で緩傾斜地になっている。

#### 【西岡】

ニシオカ。

大瀬木にあり、東側は中央道飯田インターに接している。

ニシオカについても、二説を挙げらる。

①ニシオカだから、「西の方にある小高い土地」を指していると思われるのであるが、ニシの基準になっている場所が分からない。大瀬木の中心でもないし、寺社の中からも探し出せないでいる。見落としがあるのだろうか。あるいは、「西の方に熊野神社がある小高い土地」という解釈が成立するのだろうか。

②ニシは動詞ニジル(躪)の語幹が清音化した語で、「崩壊地形、浸食地形」をいう(語源辞典)。従って、ニシオカとは「浸食崖がある小高い土地」であろうか。この小字の南側に滝沢川が流れている。この川によって浸食されたことがあるのかもしれない。

#### 【宮下】

ミヤシタ。

伊賀良小学校の南方の大瀬木地籍にあり、南端を滝沢川に接している小字。西側には熊野神社がある。

ミヤシタとは「お宮の下方にある土地」をいう。お宮とは西側にある熊野神社である。

#### 【中垣外】

ナカガイト。

大瀬木のミヤシタ小字の東隣にある。

ナカガイトとは「(大瀬木の)中心となっている土地にある屋敷跡」をいうか。

#### 【他耕地】

タコウチ。

大瀬木の中央付近にあり、滝沢川右岸の広い小字になっている。南端は新川に近い。

タコウチ←タゴウチ←タガウチ←タガヒチと変化したものであろう。すなわちタガヒは動詞タガフ(違)の連用形の名詞化した語で、チは「場所」を示す接尾語。ヒがウになっているのはウ音便化である。

以上から、タコウチとは「食い違った地形になっている土地」をいうものと思われる。段差がある緩傾斜地であるが、食い違った棚状の地形を表現しているのではないだろうか。

#### 【瀧場】

タキバ。

大瀬木のタコウチ小字と新川の間にある。

タキバは、「行者が滝行を行った場所」であろうか。あるいは、「垢離の場」であったかもしれない。垢離とは「神仏に祈願するため、冷水を浴び身体のけがれを去って清浄にすること」(広辞苑)である。

この小字に近い寺社には、熊野神社と増泉寺がある。いずれも1km以内にある。

#### 【ホウブツ】

大瀬木のタキバ小字の新川さがんの上流側にある。

ホウブツとは何であろうか。分りにくい地名であるが、語源辞典に依り

ながら二説を挙げたい。

①ホウ←ハフと転じた語で「川岸の崖」をいい、ブツ←フシと転訛したもので「小高い所」を意味する。以上から、ホウブツとは「川の崖の上の小高い丘」をいうか。

②ホウは動詞ホホケル（蓬）の語幹で「ほつれ乱れた様子」をいい、ブツはフチ（縁）の転じた語。以上から、ホウブツとは「縁に崩崖のある土地」かもしれない。

イ段⇄ウ段の交替が多いが、かなり多い変化であるという（国語大辞典）。

#### 【垣外】

カイト。

大瀬木ミヤシタ小字の滝沢川対岸の南側にある。

カイトとは「屋敷のあった土地」をいうのであろう。このあたりは大瀬木の中央部であったと思われる。

#### 【小倉】

コクラ。

大瀬木のカイト小字の南側にあり、滝沢川と新川の間になる。

コクラについても語源辞典に依りながら、解釈を三つ挙げておきたい。

①コはほとんど意味を持たない接頭語か。クラは「倉庫」であろう。従って、コクラとは「倉庫のあったところ」をいうのであろうか。この倉庫は問屋のものか、藩のものか分からないが、この倉庫を管理していたのが、北隣のカイト小字の屋敷の住人であった可能性は高い。

②コは「ちょっとした」意で、クラはクラ（剝）で「崩れ地」をいう。すなわち、コクラとは「ちょっとした崩れ地のあるところ」であろうか。

③コクラは「神仏を祀った小さな堂」の可能性も無いわけではない。はつき

りはしていないが、ここには山神が祀られていた可能性がある。

#### 【ネギヤ】

大瀬木の新川左岸のホウブツ小字の上流側にある。

ネギヤとはネギヤ（祢宜屋）で、「神職の住んでいた所」をいうのである。

ネギヤ←ネコヤ（根小屋）で、「城が山上に築いてあり、それを中心にした町」（広辞苑）をいう場合、東日本には多いといわれているが、伊那谷南部ではまだ気づかないでいる。

#### 【血原】

チハラ。

大瀬木の新川を挟んでその沿岸にある。

チハラとは何か。二説を挙げたい。

①チハラは「チガヤが多く生えた所」だという（広辞苑）。どこにでも群生したイネ科の野草である。ツバナと違って子どもの頃に食べた記憶があるが、これが小字名になるのかどうか、という疑問は残る。

②チ←ツ（津）と転じた語で「水のある所」をいう（語源辞典）。すなわち、チハラとは「流水があり、未墾地が多かった緩傾斜地」をいうのであろうか。

#### 【柿添】

カキゾエ。

大瀬木の国道 153 号線を東西に跨ぐ小字で、南端は新川に接している。

カイゾエとは何か。二説を挙げる。

①カキはカキ（垣）で、「猪垣」であろうか。であれば、カキゾエとは「猪垣に添った土地になっている所」であろうか。

②カキは動詞カク（掻）の連用形が名詞化した語で、「崩崖」をいう（語源

辞典)。従って、カキゾエとは「川の浸食を受けた崩崖に添った土地」をういか。川はむろん新川をいう。

【柳下】

ヤナギシタ。

大瀬木の熊野神社のある小字で、西端には国道 153 号線が、東側にあるミヤシタ小字の間にある。熊野神社の境内のある小字と、その南方にある大きな小字があり、その間にミヤノワキ小字がある。

ヤナには「土手」の意がある（国語大辞典）。千葉や神奈川の方言であるという。ギ←キ（柵）と濁音化した語か。以上から、ヤナギシタとは「土手に柵を立てた場所の下方の土地」をいうのであろうか。ヤナは猪垣を意味していると思われるがどうであろうか。

【横内】

ヨコウチ。

大瀬木の国道 153 号線の西方にあり、等高線に沿う細長い小字になっている。

ウチは「奥まったところ」（国語大辞典）をいう。大瀬木中央からみると、” ちょっと奥まった所 ” という印象があるのであろうか。

以上から、ヨコウチとは「少し奥まった所に、等高線に沿って横に広がっている平地」を意味していると思われる。

【平田】

ヒラタ。

大瀬木の国道 153 号線に沿った小字で、南端はカキゾエ小字に接している。現在はほとんどが畑地で一部に水田と住宅地がある。

ヒラタは「凹凸のない平坦な田の意か」（国語大辞典）とある。

従って、このヒラタとは「凹凸の

ない平坦な土地」をいうのであろうか。

【宮脇】

ミヤノワキ。

南北からヤナギシタ小字に挟まれている。

ミヤノワキとは、いうまでもなく「お宮の傍の土地」をいう。お宮とは熊野神社である。

【イナバ】

イナバ小字の中心は国道 153 号線の西側になる。伊那谷南部に多い小字名で各地にある。

イナバとは「稲干場」をいう。この小字は、現在、水田にはなっていない。もう少し東側の下方にある田んぼから運ばれたのであろうか。

イナバについては、日本国語大辞典に次のような記述がある。少し長くなるが面白いので引用しておきたい。

「収穫した稲穂を干すために、農民が共同使用した特定の草原、また空地。今日でも東北方面に地名として残っていることがある。稲寄せ場。鳩場。日葡辞書 Inaba 〈訳〉その上に稲をわらで束ねて棒の上に置く、原に作られる高い場所。〈方言〉家に近い芝原。新潟東蒲原郡（昔は稲を干す場所にした）。長野県飯田市付近」

【宮ノ上】

ミヤノウエ。

国道 153 号線に沿った西側で、イナバ小字の北隣にある。

ミヤノウエとは、字面の通りで「お宮の上の方にある土地」をいう。お宮とは大瀬木の熊野神社をいう。

【堤上】

ツツミウエ。

国道 153 号線沿いで、大瀬木の北部、北方境にあり、東側は伊賀良保育

園に接している。

ツツミウエとは「水を溜めた池の上の方にある土地」をいう。ツツミとは江戸時代初期に築造されたという北沢の堤をいい、現在は伊賀良保育園になっているところにあった(村史)。

#### 【西原】

ニシハラ。

大瀬木の北方境とその近くの三カ所ある。一つは国道153号線沿いで伊賀良小学校のグラウンドと一部が重なり、もう一つはその西方の三尋石団地を含む広い小字になっており、三つ目は飯田インターに接する。

ニシハラとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①字面通りとすれば、ニシハラとは「(大瀬木中央の)西側にある水利の便がよくない未墾地のある緩傾斜地」をいうのであるが、果たして、ここが大瀬木中央から西側になるのかどうか、疑問がある。

②ニシは動詞ニジル(躓)の語幹の清音化で、「崩壊地形」をいう(語源辞典)。であれば、ニシハラとは「崩れ地もある、未墾地の緩傾斜地」を意味するのであるが、どうであろうか。

#### 【原畑】

ハラハタ。

大瀬木の三尋石団地の南側にあり、現在は大部分が果樹園になっている。

ハラハタとは、畑を四等級に分けた時に、最も年貢の低い等級になっている。従って、ハラハタとは「収穫量が少ない畑地のある土地」をいうのであろうか。

#### 【北沢】

キタザワ。

大瀬木の伊賀良保育園のある土地で、伊賀良小学校の南隣になる。ここ

には下新井沢川が流れている。

キタザワとは「(大瀬木の)北の方にある井水が流れている土地」をいうのであろうか。

#### 【横畑】

ヨコハタ。

大瀬木北部にあり、南側は大原屋敷に接している。

ヨコハタとは「(大原屋敷の)傍にある畑地」をいうのであろうか。

#### 【北ツ畑】

キタツハタ。

大瀬木のヨコハタ小字に三方を囲まれた、小さな小字である。

キタツハタとは何を意味しているのか。これも難しい小字名である。二説を挙げておきたい。

①ツはノにあたる古い助詞か。従って、キタツハタとは「北の方にある畑」であろうか。方角の基準になっているのは大原屋敷と思われる。

②キタツ←キダチ(木立)と転訛した語で、ハタ(端)は「傍」の意。すなわち、キタツハタとは「(畑の)傍にある何本かの木がまとまって生えている所」を意味するか。イ段→ウ段の母韻交替はかなり多いという(国語学大辞典)。

#### 【小竹】

コダケ。

大瀬木の滝沢川沿岸から新川にかかる大きな小字である。現在は、果樹園などの畑が多い。

コダケ(小竹)は「小さな細い竹」で日葡辞書には「Codage 小さな竹」とある(国語大辞典)。この”小さい竹”が何であるのか、はっきりしない。イネ科のササ属か、大きくてもヤダケ属のものだったと思われるがどうであろうか。

従って、コダケとは「笹類が群生していた未墾地の多い野原」をいうのであろうか。

草葺きの屋根には、イネ科の植物の他に、小麦藁、稲藁などの穀物の殻、あるいは笹など手近に大量に入手できる草が使われていた（民俗大辞典）というので、ここの笹も屋根葺きに使われたのかもしれない。

#### 【中畑】

ナカハタ。

大瀬木の滝沢川左岸の微高地にある。

ナカハタとは「（大瀬木の）中央部により近い畑地」をいうのであろうか。

ナカは、滝沢川付近の南北の中央を指しているのかもしれない。

#### 【外垣外】

ソトガイト。

大瀬木の大原屋敷小字の西側にある。

ソトガイト小字の東方には、カイト小字やナカガイト小字があり、それらのカイト小字の地から離れたところにあること、ソトはいうのかもしれない。

ソトガイトとは、「（大瀬木の）中央から離れた所にある屋敷跡」を指すのであろうか。

#### 【大原屋敷】

ダイバラヤシキ。

大瀬木の滝沢川左右の沿岸にあり、ソトガイト小字とヨコウチ小字に東西側で接している。滝沢川周辺の微高地にあり、現在は住宅地と畑になっている。

ダイはダイ（台）で「台地」をいい、バラはハラ（原）の濁音化した語で「開墾地」の意か。

以上から、ダイバラヤシキとは「開墾された台地にある有力者の屋敷があった土地」をいうのであろうか。

#### 【辻】

ツジ。

大瀬木の滝沢川左岸にあり、西側はダイバラヤシキ小字に接している。

ツジは二本以上の道路の交わった所である。市場であり、芸能が行われる所でもあった。道の反対側に現在は大瀬木コミュニティセンターがあるのも象徴的である。また月待塔や庚申塔などの石碑がある。

ツジとは「地域の人が集まり、分かれる場所でもあった道路の交差している場所」をいうのであろう。芸能の場であり、盆行事や厄落としの場でもあり、市が開かれることもあったと思われる。

#### 【竹の花】

タケノハナ。

大瀬木の旧道に接し、南北側を滝沢川と新川に挟まれている。

タケノハナとは何をいうのであろうか。これも分かりにくい地名であるが、国語大辞典に依りながら考えていきたい。

タケはタケ（岳）で「信仰と関係ある山の称」であろう。上伊那郡の方言でもあるという。伊勢神宮のあたりにも多いらしい。”信仰”とは、この小字の西隣にあるフジツカ小字をいうのではないだろうか。ハナはハナ（端）で、「末端」のこと。

以上から、タケノハナとは「信仰と関係する富士塚の末端部の土地」を意味するのではないだろうか。

#### 【川原・河原・河原田】

カワラ・カワラダ。

カワラ（川原）小字は大瀬木の茂都



計川上流部の左岸にあり、カワラ（河原）・カワラダ（河原田）小字はタケノハナ小字の北側にあり、滝沢川右岸になる。

カワラは、字面の通りで「川辺の、水がなくて砂石の多い所」（広辞苑）、そのままであろう。

カワラダも、文字通り「河原を開墾して田とした所」（広辞苑）をいう。

#### 【清水田】

シミズダ。

大瀬木のコタケ小字とアブラメン小字に囲まれており、現在は果樹園などの畑と住宅になっている、小さな小字である。

シミズダはシミズ（清水）・ダ（処）で「自然湧水のある所」を意味するものと思われる。

#### 【油免】

アブラメン。

大瀬木の新川左岸にあり、タケノハナ小字の上流側になり、現在は果樹園になっている。

油免＝灯油免か。灯油免とは「寺社などの灯油を支出するために設定された免田」である（国語大辞典）。従って、アブラメンとは「収穫物が寺社の灯明用の油の費用に充てられる耕作地で、免租地になっている土地」をいうのであろう。

#### 【向垣外】

ムカイト。

大瀬木の新川右岸にあり、タケノハナ小字を挟んで大原屋敷の南方にあたる。

ムカイトとは何か。二説を挙げたい。

①ム←ミ（水）と転じた語の可能性もある。となれば、ムカイトとは「湿地にあった屋敷跡」かもしれない。ムカ

イト小字は、現在、二本の流水の間にある。

②ムカイト←ムカイカイトと重複部分を略したことも考えられる。すなわち、ムカイトとは「向こうにある屋敷跡」をいうのであろうか。北方にある大原屋敷小字から見ての“向こう”であろう。

#### 【細沼】

ホソヌマ。

大瀬木の新川南方の二本の流水の間にある細長い低地で、現在は水田地帯になっている。

ホソヌマとは字面の通りで、「細長い湿地帯」をいうか。

#### 【下松本・上松本】

シモマツモト・ウエマツモト。

大瀬木のホソダ小字周辺に、シモマツモト小字は三カ所、ウエマツモト小字は二カ所にある。

マツモトとは何を意味するのか。これも分かりにくい地名であり、しかも数カ所あるウエとシモの相互の關係に統一性があるようにもみえない。それでも、語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①マツ←マチ（町）と転じたもので、「田の区画」をいい、モトはモト（基）で基準になった所を指しているのかもしれない。すなわち、マツモトとは「田んぼの地割りの基になった土地」をいうか。ウエとシタはその基準になった土地の位置を意味していると思えるのであるがはっきりしない。

②マツはアカマツをいい、モトハモト（許）で「傍」を意味するか。従ってマツモトとは「アカマツ（赤松）の傍の土地」か。目立つようなアカマツがあったのであろうか。

#### 【星喰】

ホシクイ。

大瀬木にあり、東側はマツモト小字群に接し、上流西側はノナカ小字に接する水田地帯になっている。

ホシクイとは何か。これも分かりにくい地名であるが、三説を挙げる。

①ホシクイはホシ（干）・クイ（杭）か。ホシは動詞ホス（干）の連用形が名詞化した語。以上から、ホシクイとは「（稲を）干す杭のあるところ」をいうのかもしれない。他には例を見ないので不安ではあるが、イナバに変わる稲干場であろうか。

②ホシ←ハシ（端）と転じたもので、クイはクヒ（食）で「食い込んだような地形」をいう（語源辞典）。以上から、ホシクイとは「端が食い込んだような形になっている土地」をいうか。しかし、ア段→オ段の交替は稀だというのが気になる（国語学大辞典）。

③ホシ←ボウジ（榜示）と転じた語で「境界を示す杭」をいう。クイはクイ（杭）。従って、ホシクイとは「境界を示す杭がうってある所」かもしれないが、何の境界だかは不明。

#### 【ワル田】

ワルダ。

大瀬木西部の水田地帯にあり、二本の流水に挟まれているが、一部は南側の微高地の先端が入っていて畑地になっている。

ワルダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ワルは動詞ワル（割）に関連し、「割れたような状態」をいう。すなわち、ワルダとは「干割れしやすい田んぼ」をいうのだろうか。微高地の突き出している土地をいうのであろうか。

②ワルは形容詞ワル（悪）の語幹で「良くない」意か。ワルダとは「痩せ地の

田んぼ」をいうのかもしれない。

#### 【野中】

ノナカ。

大瀬木の新川とその南方の流水の間にある水田地帯。

ノナカとは「野原の中」をいい、野原は「草などが生えている広い平地」をいう（以上は広辞苑）。従って、このノハラは「未墾地も残っている広い平地」としておきたい。現在の姿になる前のこの地の状態を指しているであろう。

#### 【田中】

タナカ。

大瀬木のノナカ小字とサイカチ小字のいずれも水田地帯に挟まれた、主に畑地と住宅地になっている所。

タナカとは、字面の通りで「水田に囲まれた土地」をいうのであろう。

#### 【北原】

キタハラ。

大瀬木の北部にあり、滝沢川と新川が流れている広い小字である。現在はほとんどが果樹園で、田んぼはごく一部しかない。

キタハラとは「（大瀬木の）北部にある野原」をいう。この小字が発生した当時は、水利の便が悪く、多くは草刈入会地であった緩傾斜地であったと思われる。

#### 【サイカチ】

大瀬木の西部にある、新川左岸の現在は水田地帯になっているところにある。

サイカチとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。山本にもサイカチ小字がある。

①サイカチはサ（接頭語）・イ（井）・カワ（川）・ウチ（内）で、「流水の

ある浅い谷」をいうか。

②カチーカチ（鍛冶）で、「流水がある鍛冶屋敷のあったところ」かもしれない。矢抜神社は少し上の方にある。寺社の釘の需要は多く、もっとも鍛冶を必要としていたのではないだろうか。

③サイカチは「サイカチが自生していた土地」をいうか。サイカチはマメ科の落葉高木で、若葉は食用になり、豆果は石鹼の代用にしたという。

#### 【昭和】

ショウワ。

大瀬木西部にある。

ではショウワとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、三説を挙げる。

①この地区は昭和5年～8年に開かれた耕地であるという（村史）。だから年号の「昭和」を小字名にしたとも考えられる。しかし、そうでなかったら次のようなことが考えられる。

②ショウ←シホと転じた語で、シホは動詞シボル（搾）の語幹で「谷口などしぼり込んだような地形」をいい、ワはハ（端）で「末端部」の意か。以上から、ショウワとは「しぼり込んだような谷の末端部の土地」をいうか。

③シホは動詞シホル（霑）の語幹で「湿地」の意で、ワはワ（曲）で「山裾の曲がりくねったあたり」をいう。従って、ショウワとは「曲がっている山裾にある湿地」を意味するか。

#### 【地蔵林】

ジゾウバヤシ。

大瀬木西部にあり、キタハラ・コタケ・タナカなどの小字に囲まれている。

ジゾウバヤシとは、字面の通りであれば、「地蔵菩薩が祀られていた樹木

の茂っている土地」を意味するのであろう。

#### 【大畑】

オオハタ。

大瀬木の三尋石市営住宅のあるところ。下新井沢川の右岸になる。

オオハタとは「開墾地のある広い土地」を意味するか。

#### 【ミヒロ石】

ミヒロイシ。

大瀬木の北西部にある。

三六災害以前の土石流によって運ばれた三尋（4.5m～5.4m）ほどの岩がある。この岩が小字名になっている。すなわち、ミヒロイシとは「土石流で流れてきたミヒロイシのあるところ」を意味する。

#### 【三五朗塚】

サンゴロウヅカ。

大瀬木の細田沢川上流部の右岸にあり、ミヒロイシ小字の北東隣になる。

サンゴロウは固有名詞と思われる。従って、サンゴロウヅカとは「サンゴロウの塚」となるが、恐らくは御霊塚と思われるが詳しいことは分からない。地元には口碑が残っているのではないだろうか。

#### 【細田・細田原】

ホソダ・ホソダッパラ。

大瀬木の北方境にあり、細田沢川上流部の左岸にホソダ小字が、右岸にはホソダッパラ小字がある。

ホソダは「細長い田んぼのある所」か。現在はほとんどが果樹園になっていて田んぼは一部にある。扇状地の上流部にあり、狭い谷底部の平地にある耕作地である。

右岸にあるホソダッパラは、扇状地の段丘上の幅の広い小字になってい

る。ホソダッパラとは「ホソダ沿いの緩傾斜地の草原」を意味するのであろう。ハラ（原）は「森や林とは異なり、樹木が群生せず、草が生えている緩傾斜地で、入会草刈地や狩猟の場であることが多い」（民俗大辞典）という。小字発生時には、そんな状態ではなかっただろうか。

#### 【刈安平・刈安原】

カリヤタイラ・カリヤハラ。

これらの小字は大瀬木の西部にあり、キタハラ小字とショウワ小字に囲まれている。カリヤハラ小字は『伊賀良の地名』にはないが、キタハラ小字の中にあり、二辺をショウワ小字とカリヤタイイラ小字に接している、小さな小字である。

カリヤスというイネ科の植物は二種類ある。一つはコブナグサで北海道～琉球まで分布、田畔や原野に多い1年草で上部は斜上か直立し30～40cm。もう一つはカリヤスで本州中部の山地に生え、往々群生する多年草。高さは90～120cm、屋根を葺くカヤの名ともいい、茎葉は家畜の飼料とする。

（以上は牧野植物大図鑑）

カリヤは宮澤恒之氏の指摘通り「秣場・刈敷場の遺称」（伊賀良の地名）と思われる。少し付け加えるとすれば、カリヤは「屋根を葺く草を確保しておいた場所」でもあったのではないか。草葺きを維持するためには広大な採草地が必要であったという（民俗大辞典）。

タイラのタは「語調を整える接頭語」で、ヒラは「山中にある相当広い緩斜面」をいう（国語大辞典）。従って、カリヤタイラとは「屋根を葺くカヤや牛馬の飼料を確保するための緩傾斜地にある草原」をいうか。

カリヤハラは「茅葺き用の草や牛馬の飼料を確保するための草原のある緩傾斜地」であろうか。

#### 【井ノ口・井ノ口原】

イノグチ・イノグチハラ。

大瀬木西部の扇状地の上部にある。

イノグチとは「せき止めてある水を落とす口」（広辞苑）であろう。特に水田の取り入れ口をいうのだという。

イノグチハラは「川から井水を取り入れる口のある、水利の便のよくなかった緩傾斜地」をいうのであろう。茂都計川から井水に水を引いている所である。

#### 【足ヶ口】

アシガグチ。

大瀬木の西端にあり、側稜の尾根から扇状地の最上端部を含む。

アシは「山の裾」をいい、グチ（口）は「ある地点に通じる道などの始まる所」をいう（国語大辞典）。

以上から、アシガグチとは、「山の裾に通じる道のある土地」をいうか。

#### 【山ノ田】

ヤマノタ。

大瀬木西部のアシガグチ小字の尾根東側の谷底部にある。細長い小字で、現在は、上流部が果樹園で下流部は田んぼになっている。

ヤマノタとは、「自然湧水を利用した山地の田んぼがある土地」を意味する。あるいは、水田の最も低い等級である「下々田」である「山田」を暗に示しているのかもしれない。

#### 【ビル田】

ビルダ。

大瀬木最西部の扇状地の最上端で山地境にある。

ビル←ヒルと濁音化した語で「湿地」をいう（民俗地名語彙事典）。す

なわち、ビルダとは「自然湧水のある湿地」をいうか。現在は住宅があるが、かつては田んぼであった可能性はある。なお、「蛭という吸血虫のいる場所の意ではなく・・・」（民俗地名語彙事典）とあるが、湧水のある田んぼであれば乾くことなないので、蛭がいた田んぼが語源であった可能性は否定できないように思えるが、どうであろうか。

#### 【権現山】

ゴンゲンヤマ。

大瀬木最西端の山地境にある、小さな小字である。

ゴンゲンヤマとは「権現様を祀った場所」をいうのであろうが、詳細は不明である。

権現号は明治初年の神仏分離で消えていったが、小字名として伊那谷南部でも各地に残っている。この大瀬木の権現が何を祀っていたのか分からないが、口碑は残っていないのであろうか。この小字の北西側にある山地が元の権現山であったと思われるが、どうであろうか。

#### 【権現山足ヶ口】

ゴンゲンヤマアシガクチ。

大瀬木のアシガクチ小字の西隣にある長い小字である。

ゴンゲンヤマアシガクチとは「権現山の参道に繋がる登り口付近の土地」をいうのであろうか。

#### 【火振原】

ヒフリバラ。

大瀬木の北西部にあり、現在はほとんどが果樹園になっている。

ヒフリバラとは「松明などを振り回していたことのある草原の緩傾斜地」であろうが、何のために松明を振ったのであろうか。奈良で行われていたと

いう雨乞い行事であるのか、草刈場の更新で枯草を焼いたのか、あるいは焼畑があったのか、全くわからない。

#### 【梅ヶ久保】

ウメガクボ。

大瀬木北部で山の神神社がある。

ウメは動詞ウム（埋）の連用形が名詞化した語で「土砂で埋まったところ」をいうのであろう。従って、ウメガクボとは「土石流で埋まった窪地のある土地」を意味するものと思われる。滝沢川の土石流であろうか。

#### 【タキ沢】

タキザワ。

大瀬木の北西端にあり、滝沢川の最上流部になる。

タキ（滝）は「河の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる水」（広辞苑）をいう。すなわち、タキザワとは「急傾斜地を流れる沢があるところ」をいうのであろう。

#### 【梅ヶ久保大牧】

ウメガクボオオマキ。

大瀬木の北東端にある。

ウメガクボは先に触れたように「土石流で埋まった窪地」をいうが、オオマキとは何を意味するのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げる。①マキは動詞マク（巻）の連用形が名詞化した語で、「山で取り巻かれた地」をいう。従って、ウメガクボオオマキとは「土石流で埋まった窪地がある、山で囲まれた広い谷」をいうか。②マキ（牧）は「牧場」か。中近世まで「牧場」の意味で使用されていたという。谷の両側には滝沢川とその支流が流れており、囲うにはよかったのかもしれない。以上から、ウメガクボオオマキとは「土石流で埋まった窪地もある、牧場だった所」か。

【無情堂】

ムジョウドウ。

大瀬木の南西部、矢抜神社の西側にある。

ムジョウドウ（無常堂）は「火葬場」であるという（国語大辞典）。「死にかかっている病人を収容する所」の意もあるが、ここでは採りあげにくい。

以上から、ムジョウドウとは「火葬場があった土地」をいうのであろうか。しかし、火葬がどのように行われていたのかはよく分からない。

【宮ノ上・宮ノ前・宮ノ横】

ミヤノウエ・ミヤノマエ・ミヨノヨコ。

大瀬木の矢抜大明神の周辺にある。

文字通り、ミヤノウエは「お宮の北西側の上の方の土地」、ミヤノマエは「お宮の東になる前方の土地」をいい、ミヤノヨコは「お宮の南の横手の土地」を示している。

【矢平田】

ヤヘイダ。

大瀬木の矢抜大明神の南西側にある。

ヤヘイダとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①ヤヘイは固有名詞か。すなわち、ヤヘイダとは「ヤヘイが所有し耕作している田んぼ」をいうか。

②ヤはヤ（菴）で「湿地」をいい、ヘイダ←ヒエダ（稗田）と転じたものとも考えることもできる。以上から、ヤヘイダとは「湿地で田稗を栽培している田んぼ」と解せないこともない。湧水を利用した水温の低い田であったかもしれない。

【南】

ミナミ。

大瀬木の南西部にある。

ミナミとは「矢抜神社の南の方の土地」を意味しているのであろう。

【田井座】

タイザ。

大瀬木の矢抜神社の前方である南東方向に二カ所ある。小字名発生時には繋がっていたのであろう。

タイザは、「お宮に関わる芸能集団の上演場所か居住地のあった所」であったと思われる。

伊那谷南部の特徴的な小字名である。

【請井地】

ウケジ。

大瀬木南西部の茂都計川氾濫原の上の段丘に二カ所ある。

ウケジとは何か。これも明瞭ではないが、国語大辞典に依りながら、次のように考えたい。

ウケジ←ウケイジ（請井地）と転じたのではないだろうか。ウケシヨ（請所）には下伊那郡の方言で「請負で田植をすること」をいう。請所の土地が請地。名主などが中心になって惣村が請け負って一本の井水の周辺の田植をしていく。その井水周辺の田んぼをウケイジ（請井地）と呼んでいたのではないだろうか。

以上から、ウケジとは「一本の井水の周辺の田んぼの田植を惣村の請負で実施している土地」を意味する、と考えたい。

【高見】

タカミ。

大瀬木の矢抜神社のタイザ小字の前方にある。

タカミは「高い所」をいう（広辞苑）。大瀬木中央からみて、高い土地になることから名付けられたか。

【ツボノ尻】

ツボノシリ。

矢抜神社の前方にあり、ミヤノマエ小字の下方となっている。

ツボノシリ小字は伊那谷南部には多いが、はっきりしないところのある地名である。

ツボは「周辺と異なる、特徴のある土地の区画」をいうのかもしれない。すなわち、ツボノシリとは「特徴のある区画の末端部の土地」を意味するか。ここで”特徴のある区画”というのは矢抜神社の境内を意味する。

#### 【矢田井】

ヤダイ。

大瀬木のイノクチ小字の下流側にある。

ヤダイとは何か。ヤダはヤタの濁音化した語で「低湿地」をいう（語源辞典）。イは「井水」か。以上から、ヤダイとは「井水が流れている低湿地」をいうのであろうか。

#### 【飯田垣外】

イイダガイト。

大瀬木の西部にあり、カジヤバタ小字の上流側にある。

イイダは固有名詞。イイダガイトとは「飯田に関わる屋敷があった土地」であろう。飯田は個人をいうか、あるいは、飯田藩に関わる有力者であったかは、はっきりしない。

#### 【天白】

テンパク。

大瀬木の南西部にあり、カジヤバタ小字の南西隣になる。

テンパクとは「天白神を祀ってあった土地」をいうのであろう。

伊勢から三遠南信に多い地名である。水野口辻生さんは「天白という地名が伊那郡に多数あって、天白社も多く、神事芸能でも大切な役割を担って

いること、また大山祇の神であり、田の神であると同時に耕作に欠くことのできない水の神であるということから、こうした神にまつわるあれこれの民俗信仰が天狗、猿田彦へと発展したと考えてよさそうである」（伊那谷物語）といい、「伊勢神事文化の流入が、天竜川という大動脈に沿ってこの山間地に入り込み、山間民の知恵と生活に結びついたものであろう」と結んでいる。

#### 【カジヤ畑】

カジヤバタ。

大瀬木のテンパク小字の北隣にあり、サイカチ・イイダガイト・ハラタイラ・ワルダなどの小字に囲まれている。

カジヤバタは「鍛冶職人の所有する畑で免租地であった所」をいうのであろう。

#### 【原平・原ノ平】

ハラタイラ・ハラノタイラ。

ハラタイラは大瀬木の南西部にある広大な小字で、ハラノタイラ小字はその東に隣接する。

ハラタイラはハラ（原）・タ（処）・ヒラ（平）で「水利の便が悪く、飼料・肥料・屋根葺きの入会草刈地であった緩傾斜地」をいうか。ヒラは黄泉平坂のヒラで「緩傾斜地」の意。

ハラノタイラはハラ（原）・ノタ（野田）・ヒラ（平）で、ノタは下伊那郡の方言で「湿地」をいう（語源辞典）。以上から、ハラノタヒラは「入会草刈地で湿地の多い緩傾斜地」を意味するのであろうか。

#### 【鳥屋・上鳥屋・中鳥屋】

トリヤ・カミトリヤ・ナカトリヤ。

大瀬木南部の旭が丘中学校の周辺にある。

トリヤとは「鳥小屋」をいう（国語大辞典）。しかし、どんな鳥小屋であろうか。普通に考えれば、トヤであろう。トヤ→トリヤの転訛とも考えられる。

以上から、トリヤとは「捕鳥場があった所」としておきたい。それは渡り鳥を捕らえるものであったか、あるいは鷹狩のための鷹を捕らえるものであったかは明らかではない。

カミトリヤとは、「トリヤ小字の上の方にあった土地」であったろうし、ナカトリヤは「トリヤ小字群の中にあったトリヤがあった所」をいうのであろう。

#### 【富士塚】

フジツカ。

大瀬木のトリヤ小字群の東にある。

ここのフジツカも「富士塚が築かれていた所」をいうのであろう。詳細については不明であるが、富士塚は富士講の人たちが築いた塚で、近世幕府にたびたび弾圧されるほど盛んで山岳信仰のありようを変えた。

#### 【沖】

オキ。

大瀬木の増泉寺の西側にあり、現在はほとんどが住宅地になっている。

オキ（沖）には「田畑の広い所」の意があるが、長野県の方言であるという（国語大辞典）。

従って、ここでも「広い田畑のあった土地」をいうのであろう。やや曖昧な表現か。

#### 【藤九郎原】

トウクロウバラ。

大瀬木の中村境にある大きな小字で、中を国道153号線が通っている。

現在はほとんどが住宅地であるが、一

部は果樹園などの畑になっている。

トウクロウは固有名詞と考えるのが無難であろうか。しかし、どんな人であったのかは不明。

トウクロウバラは「トウクロウが所有していた水の便がよくない草刈場である傾斜地」か。

#### 【コモツケ】

大瀬木のトウクロウ小字の北側の中村境にあり、国道153号線から中央道にまで伸びる長い小字になっている。また、村境を越えた中村にも、コモツケ小字はある。

コモツケとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①コモツケ←コモ（湿地）・ツケ（付）と促音便化した語。コモはゴモク（芥）から転じたもので、ツケは「あるもの傍」の意。以上から、コモツケとは「湿地の傍の土地」をいうか。中村境は現在、田んぼになっている。

②コモ←コボ（毀）と転訛した語で、「崩崖」をいう。つまり、コモツケとは「崩崖のそばにある土地」をいうのであろうか。

#### 【源氏垣外】

ゲンジガイト。

大瀬木のコモツケ小字の北隣にあり、国道153号線の東にかかる。

ゲンジガイトとは「小笠原氏に関わる有力者の屋敷があった所」であろうか。小笠原氏は甲斐源氏の流れになるという（村史）。

#### 【南原】

ミナミハラ。

大瀬木の増泉寺の南にある。

ミナミハラとは「（増泉寺の）南にある草刈地になっている緩傾斜地」をいうのであろうか。

#### 【仲田】



ナカタ。

大瀬木の増泉寺の北隣にある。

ナカタとは「(大瀬木の)中央付近にある田んぼのあるところ」を意味するものと思われる。

#### 【権蔵垣外】

ゴンゾウガイト。

大瀬木の増泉寺東方にあり、国道153号線が貫いている。

ゴンゾウは固有名詞で、ゴンゾウガイトとは「ゴンゾウという有力者の屋敷があった所」であろうか。

#### 【六反田】

ロクタンダ。

大瀬木の三日市場境にある大きな小字で中央道が通り、新川右岸になる。

ロクタンダとは、字面の通りで「六反歩の田んぼがあった土地」をいうのであろう。

#### 【久保】

クボ。

大瀬木南東部にある細長い小字で新川南側の流水に沿っている。

クボとは文字通りで「窪地になっている土地」をいう。

#### 【クネ下】

クネシタ。

大瀬木南東端の三日市場境にあり、現在は果樹園などの畑地が多い。

クネは「屋敷の周囲」をいうか(国語大辞典)。静岡・新潟の方言だという。従って、クネシタとは「屋敷の敷地の下段になっている土地」を意味するのであろうか。

#### 【築地下】

ツキジシタ。

大瀬木のクネシタ小字の隣にあり、三日市場境となっている小字である。

ツキジ(築地)は「沼や海などを埋

めて築いた土地」(広辞苑)のこと。従って、ツキジシタとは「埋め立てた場所の下方の土地」をいうか。恐らくは少し上の方に沼があって、それを埋めたたのであろう。

#### 【穴田】

アナダ。

こおれも大瀬木の三日市場境にあり、中央道のすぐ下側になり、現在は田んぼが多い。

アナ(穴)には「三方を丘陵に囲まれた地」(語源辞典)の意がある。従って、アナダとは「わずかな高さの段丘に囲まれた田んぼ」を意味するか。

#### 【向田】

ムコウダ。

大瀬木のムコウダ小字は最南東端の三日市場境の新川右岸にあり、現在は大部分が果樹園になっている。

ムコウダとは「向こう側にある土地」であるが、どちらから見ての”向こう側”なのだろうか。北側に新川が流れているので、新川の向こう側と考えるのが順当であろう。とすれば、エノキダ小字にそれらしい対象物件があったのであろうか。それとも、離れているが、ツジガイト小字にあった屋敷か。村外は考えにくい。コモツケ小字のように大瀬木と中村にまたがっている小字もあるので、隣村の三日市場にある八王子稲荷社かもしれない。いずれにしてもはっきりしない。

#### 【上大門】

カミダイモン。

中村北部の大瀬木境にあり、南西端は長清寺に接している。

カミダイモンとは「寺院の大きな門の上の方にある土地」をいう。寺院とは長清寺のこと。

### 【行人原】

ギョウニンバラ。

中村北部の国道 153 号線の東西に広がる。北側は県道時又中村線に接している。

ギョウニン（行人）は「仏道を修行する人。行者」（広辞苑）をいう。

修験道は厳しい山岳修行を通して行者の超自然的な能力を開発し、加持祈祷の技法を修得し病氣治しや憑き物落としを行って里の民衆の間に進出していった。近世には修験道の影響を受けつつ、御嶽行者や富士講の行者が積極的な展開という（民俗大辞典）。

ギョウニンバラとは、「民間に進出していった行人が居住していた草刈地の広がる緩傾斜地」をいうのだろうか。あるいは、この地で修をすることもあったのかもしれない。御嶽行者か富士講行者だったと思われる。

### 【北浦】

キタウラ。

中村の中央部から北部にかけて、六カ所にあるが、これらが当初に繋がっていたとは思われない。

キタウラとは何を意味するか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①キタウラは「日蔭地」（語源辞典）であろうか。岡山県の方言であるというが、少しひっかかりがある。

②キタウラとは「屋敷や御堂などの裏手にある土地」をいうのかもしれない。

### 【道下・大道下】

ミチシタ・オオミチシタ。

中村の北端部にある。ミチシタ小字は五カ所、オオミチシタ小字は四カ所にある。大きなミチシタ小字と大きなオオミチシタ小字は道路に沿って繋がっている。

ミチシタとは「道路の下側の土地」であろう。

オオミチもミチと一つながりになっているから、オオは美称の接頭語とみたい。従って、オオミチシタも、同じく「道路の下側の土地」となるのか。

### 【家の前】

イエノマエ。

中村の北西部を中心に六カ所、とこれも多い。

イエノマエとは、字面の通りで「屋敷の前の土地」をいうのであろうが、その屋敷は一軒だけではなく、六カ所とも別々の屋敷と思われる。

### 【茶道・道下茶道】

チャドウ・ミチシタチャドウであろう。『伊賀良の地名』にはミチシタチャミチとあるが、ここでは『長野縣町村字地名大鑑』のミチシタチャドウを採りたい。

中村北部にあり、ミチシタチャドウ小字は道路に沿ったオオミチシタ小字とミチシタ小字の間にある。

チャドウはチャドウ（茶堂）であろう。茶堂とは、民俗大辞典にあるように、「村はずれにあつて旅人の接待と村人の集会にあてたもの」と思われる。すなわち、チャドウとは「旅人の接待にあてた茶堂のあった所」をいうか。

ミチシタチャドウは、文字通り「道路の下側にあつて、「旅人の接待にあてた茶堂のあった所」をいうのである。

### 【寺畑】

テラバタ。

中村北部の長清寺の西方に大小三つのテラバタ小字がある。

テラバタとは「お寺の所有する耕作地」で、免租地になっている土地をい

うのであろう。長清寺の所有地である。

ハタであるが、田んぼ含まれていると思われる。

#### 【よじ原】

ヨジバラ。

中村北西端にある広大な面積を有する小字の他に、中村北部～西部に三カ所、小さな小字がある。

ヨジバラとは何だろうか。分かりにくい地名である。三説を挙げておきたい。

①ヨジハラ←ヨチ（余地）・ハラ（原）で、「所有者のいない、余っている土地で、水利の便も悪く未墾地も多く、広い緩傾斜地」をいうか。

②ヨジバラ←ヨシ（葦）・ハラ（原）と濁音化した語で、「葦の生えている湿地であった所」をいうか。ハラには単に「場所」の意がある（語源辞典）。

③ヨジバラ←ヨチ（余地）・ハラ（原）と濁音化したもので、ヨチは「空いている所」で、ハラは「耕作してない平地」か（以上は国語大辞典）。従って、ヨジバラとは「耕作してない空き地のある土地」をいうのであろうか。

#### 【ウサギ・兎】

ウサギ。

中村の北寄りの国道 153 号線と中央道の間にある。ウサギ小字が三カ所、「兎」小字が九カ所に及ぶ。小字名発生時には、ウサギも「兎」も一つながりになっていたのであろう。

ウサギとは何か。三説を挙げる。

①ウサギは「野ウサギ」のことで、ウサギとは「野兎が出没する土地」で野兎の被害が大きかったところだという（熊谷明氏『伊那谷の地名 3』）。

②ウサ←ユサの転じた語で「砂地」をいい、ギは「場所」を示す接尾語（語

源辞典）。以上から、ウサギとは「砂地の土地」をいうか。

③ウサ←クサ（腐）の転で、「湿地」を意味する（語源辞典）。すなわち、ウサギとは「湿地であった土地」をいうのかもしれない。

#### 【橋場】

ハシバ。

中村北部のウサギ小字に囲まれて小さなハシバ小字が一カ所、茂都計川に架かる久米路橋の近くに一カ所、ミヤガワ小字付近に一カ所の合計三カ所がある。

ハシバとは「橋が架けられているところ」をいうのであろう。不思議なことに、ハシバは辞書類には記載が無い。

#### 【甚右エ門畑】

ジンエモンバタ。

中村のシミズ小字やウサギ小字に挟まれている小さな小字である。

ジンエモンバタとは「甚右エ門の所有する畑」であろう。甚右エ門については不明。

#### 【清水】

シミズ。

シミズ小字は中村には十七カ所ほどある。それだけ大切にされてきたのであろう。

シミズは「わき出る清い水」（広辞苑）である。夏は冷たく、冬は暖かい水で飲料にしたり、漬け物用の菜を洗ったりしたり、交流の場でもあったと思われる。

シミズ小字は「自然の湧水があるところ」をいう。

#### 【川原】

カワラ。『伊賀良の地名』にはカワハラとあるが、『長野縣町村字地名大鑑』によってカワラとしたい。地元の

呼び名にするのが原則であるが、川路でも子どものころからカワラといていたし、辞書類もカワラになっている。

中村に二十八カ所ほどある小字。

カワラとは「川沿いの平地」（国語大辞典）であろうか。

#### 【五十目畑成】

ゴジュウメハタナリ。

中村の中央道南側にあり、イバタ・フルヤシキ・キタウラ・ハヤシコシなどの小字に囲まれている。

ゴジュウメハタナリとは何か。国語大辞典に依りながら、考えていきたい。

メ（目）は近世における銀貨の量目の単位で匁（もんめ）の略。ハタナリ（畑成）＝田畑成＝田畑成引で「江戸時代、用水事情などにより稲作が不可能となった田を畑にすることを認められた場合、それまでの田の石盛を畑の石盛になおして、その差額だけ軽減してもらうこと」をいう。

以上から、ゴジュウメハタナリとは「井水からの水の取り入れが難しくなり、として年貢を50匁軽減してもらった田のあるところ」であろうか。

南端を井水が流れているが、何らかの理由でその水が利用できなかったであろう。

#### 【いなば・イナバ・稲場・稲葉】

イナバ。

中村にはイナバ小字が十三カ所ほどある。

イナバとは「稲干場であった所」をいう。「稲架の普及前に稲干場とした所で、平素は芝草地になっていた」（民俗地名語彙事典）という草地のこと。

この小字は伊那谷南部には多い。

#### 【稲場尻】

イナバジリ。

中村には二カ所ほどある。

イナバジリとは「稲干場の末端部の土地」をいうか。イナバ小字に接していたり、接していなくても近いところにある。

#### 【大畑田田成】

オオバタタナリ。

中村の茂都計川の北の方にあり、周辺には、マエダ・ニシダ・ヤシキ・ウサギなどの小字がある。

タナリ（田成）は「江戸時代、畑地を水田に変えること」をいう（国語大辞典）。当然のことながら、領主は田成を奨励していた。オオバタ（大畑）は「大きい畑」をいうのであろうが、オオは単なる美称とも考えられる。

以上から、オオバタタナリとは「水田に変わった大きな畑があったところ」をいうのであろう。新たに井水が引かれたか、あるいは近くにあった井水が利用できるようになったことによる神田造成であったか。

#### 【前田】

マエダ。

中村にはマエダ小字が二十一カ所ほどある。あまりにも多いので数え落としがあるかもしれない。そのほとんどが、近くにヤシキ小字やカイト小字がある。

マエダとは「有力者の屋敷の前方にある土地」をいうが、寺社のマエである場合もある。

#### 【林くろ】

ハヤシクロ。

ハヤシクロ小字は中村に三カ所ほどある。

ハヤシクロは、はじめには「林のまわり」ではないかとも思ったが、その

まわりに何があったのかと考えると、この小さな小字が密集している土地に当てはめるのは難しいと思うようになった。

そこで、ハヤシクロとは、クロになっているのがハヤシで、囲まれているのは耕作地か居住地ではないか、と判断した。

従って、ハヤシクロとは「周りの林地になっている所」をいうのであろう。林地は植林されたものであろう。ハヤシには水窪の方言で「植林された所」の意もある（語源辞典）。

#### 【井端】

イバタ。

中村には五カ所にイバタ小字がある。

イバタとは「井水の傍の土地」を意味する。

#### 【阿弥陀前】

アミダマエ。

中村北部の中道沿いにある。

アミダマエとは「阿弥陀堂の前の土地」をいうものと思われる。しかし、その阿弥陀堂についての詳細はわからない。

#### 【井下】

イシタ。

中村には十四カ所にもある。

イシタとは「井水の下方の土地」をいうのであろう。とにかく、イ（井）小字群が多い。

#### 【中式リ】

ナカシキリ。

中村の北部に中央道の両側に二カ所ある。

ナカシキリとは何か。これも分かりにくい小字名であるが、二説を挙げておきたい。

①ナカシキリ←ナカジキリと清音化

した語で、「空間を区切るために設けたへだて」（国語大辞典）の意であるが、具体的な内容は不明である。一カ所はフルヤシキ小字に接しているので、屋敷の敷地を区切る垣根であったとも考えられる。もう一カ所は屋敷地ほどの面積になっていることも傍証になるか。

②ナカ←ナガと清音化した語、静岡県榛原郡の方言で「傾斜地」の意があり、シキルは動詞シキル（頻）の連用形で「（山丘など）重なった状態」をいう（以上は語源辞典）。従って、ナカシキリとは「傾斜地で段丘状になっている土地」とも考えられる。

#### 【久保田】

クボタ。

中村にはクボタ小字が三カ所にある。

クボタとは字面の通りで「窪地」または「窪地にある田んぼ」を意味するのであろう。

#### 【古屋敷】

フルヤシキ。

中村北部の中央道南東側にあり、ナカシキリ小字が貼り付いている。

フルヤシキは文字通りで「以前に有力者の屋敷があった土地」を意味するものと思われる。

#### 【林越】

ハヤシコシ。

中村には三カ所ある。

ハヤシコシとは何か。二説を挙げる。

①ハヤシは「樹木の群がり生えている所」で、コシは「付近」（語源辞典）か。すなわち、ハヤシコシとは「樹木の群がり生えている所」をいうか。

②ハヤシには「植林した所」の意もあり、コシは「麓」か。ハヤシコシとは

「植林地の麓」をいうか。

#### 【宮川】

ミヤガワ。

中村に六カ所ほどある。宮川井のことを意味しているのであろうか。

ミヤガワとは「宮川の沿岸にある土地」をいうのであろう。元の意味は「中村の八幡神社の近くを流れる川」を意味するか。

宮川井は茂都計川から引く井の中では最も大きな井で、上流は十郎在家井となっている（村史）。

#### 【三蔵洞・三蔵洞東向・三蔵洞西向】

サンゾウボラ・サンゾウボラヒガシムキ・サンゾウボラニシムキ。

これらの小字は、中村の茂都計川の支流である二ツ山川に開口する谷に沿って並ぶ。二ツ山の北東向き斜面になる。

サンゾウボラとは何か。国語大辞典に依りながら二説を挙げたい。

①サンゾウは「山寺に住む僧」をいう。日葡辞書にもある。従って、サンゾウボラとは「僧のいた山寺があった洞」をいうのであろうか。

②サンゾウには「鍛冶屋、馬方」の意もある。サンゾウボラとは、「鍛冶職人の居住していた洞」か「馬方の住んでいた洞」かもしれない。

#### 【川端】

カワバタ。

中村には五カ所にあつて、いずれも茂都計川沿岸にある。

カワバタとは、文字通りで「川縁にある土地」をいう。

#### 【日焼・火焼・日ヤケ】

ヒヤケ。

これらの小字は中村の北部を中心に十七カ所にある。

ヒヤケとは「ひでりに弱い土地」を

いうか。水の便が悪く、干ばつにあいやすい所をいうのであろう。とにかく中村には多い小字名である。

#### 【川原屋敷】

カワラヤシキ。

中村北部の宮川沿いと茂都計川沿いに、一カ所ずつある。

カワラヤシキとは、「川辺の砂石地にある有力者の屋敷跡」か。

#### 【大塚】

オオツカ。

中村北部にある。

オオツカとは「大きな塚があるところ」をいうのであろう。円墳があつて、横穴石室があり、直刀・土師器・須恵器などが出ている（村史）。

#### 【屋敷】

ヤシキ。

中村だけで二十八カ所ほどある。それにしても多い数である。

ヤシキは「有力者の屋敷」ということになりそうであるが、これだけ多いと、単に「居住地が合ったところ」とすべきか。

#### 【かじ屋畑】

カジヤバタ。

中村北部の国道 153 号線沿いにある。

カジヤバタとは何を意味するか。二説を挙げたい。

①カジヤバタとは、字面の通りで「鍛冶職人が耕作していた畑」か。免租地であつたと思われる。

②バタはバタ（端）で、カジヤバタとは「鍛冶職人の屋敷の傍の土地」か。

#### 【武越】

タケコシ。

中村の北西部に二カ所ある。

タケコシとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①タケは「高くなった所」で、コシは「麓」をいう（語源辞典）。従って、タケコシとは「少し高くなった所の傍の低い土地」をいうのだろうか。

②タケ→タチ（館）で「有力者の屋敷地に近い土地」かもしれない。近くには二カ所ともヤシキ小字があるので成立しそうな解釈であるが、タ行→カ行の子音変化の可能性は小さいのが難点。

#### 【前畑】

マエバタ。

中村にはマエバタ小字は三カ所あるが、マエダ小字に比べるとかなり少ない。

マエバタとは字面の通りで「前の方にある土地」をいう。基準になっているのは有力者の屋敷であろうか。ちかくには、カイト小字群かヤシキ小字群、あるいはイエ小字群がある。

#### 【日陰川原】

ヒカゲカワラ。

中村南西部の茂都計川右岸の谷底部にある。

ヒカゲカワラとは、字面の通りで「日当たりのいい川原」か。あまり日陰にはならない土地とみた。小字図の方は「日影川原」の文字になっている。

#### 【栃ヶ洞】

トチガホラ。

中村の二ツ山の村境に大きな小字と二ツ山の北方に小さな小字の、二つがある。

トチガホラとは何か。二説を挙げる。

①トチガホラとは、文字通りで「トチノキが自生している谷のある所」か。トチ（栃）ハトチノキ科トチノキザクの落葉高木で、主として本州と四国の山村で採集され、ハレの日の食品とし

てのトチモチや日常的な食品である団子や粥につくられてきた。栃の実の採集は共有林野で自由に採集することもあったが、採集場所と最終日を決めておいて共同で採集し平等に分ける所もあったという（民俗大辞典）。この中村ではどうであったのか分からないが、この栃ヶ洞の共有林地で共同採集・平等分配が行われたのであろうか。

②トチは動詞トヅ（閉）と関係し「山などがとり囲んだ所」をいう（語源辞典）。従って、トチガホラとは「尾根に囲まれた谷のある山地」をいうのかもしれない。

#### 【伊勢在家井】

イセザイケイ。

中村の茂都計川の北東側にあり、イシタ小字を挟んで二カ所にあるが、かつては繋がっていたものであろう。その位置関係からみて、伊勢在家井とは村史にある「十郎在家井（宮川）」のことと思われる。

従って、イセザイケイとは「伊勢在家に関わる井水が流れている土地」をいうのであろう。

伊勢在家は伊勢屋と呼ばれていた伊勢神宮の御師の拠点となっていた家のことを指すのだろうか。在家は「出家しないで在俗のまま仏教に帰依する」の意が原義であるが、中世末には神仏習合で、伊勢神宮の周辺には484ヶ寺があったという（民俗大辞典）ので、地方でも神明社関係の在家があった判断したがどうであらうか。

#### 【西田】

ニシダ。

中村の中津川線予定地にある。

ニシダとは何か。二説を挙げる。

①ニシダとは文字通りで、「西の方に

ある土地」をいうのであろう。基準になっているのは、北東側にあるヤシキ小字にあった有力者の屋敷であろう。②ニシは動詞ニジル（躡）の語幹の清音化で、「湿地」をいう（語源辞典）。すなわち、ニシダとは「湿地にある土地（田んぼ）」か。

【川原畑田成・前田畑田成・小坂畑田成・丸山畑田成・小垣外畑田成・垣外畑田成・屋敷畑田成・坂尻畑田成・岡田畑田成・ヤマチ畑田成】

カワラハタナリ・マエダハタナリ・コサカバタタナリ・マルヤマハタタナリ・コガイトハタタナリ・カイトバタタナリ・ヤシキバタタナリ・サカジリバタタナリ・オカダハタタナリ・ヤマチハタタナリ。

全てが中村にある畑田成小字群である。井水の開鑿直後に小字名が発生したものと思われる。

畑田成は「江戸時代、畑を田に転換すること。畑田成が行われた場合、上畑は上田、中畑は中田、下畑は下田となるのが一般的で、石盛の増加分は畑田成石間出高として村高に加えられ年貢諸役も増加した。しかし、田となった土地の位がはなはだ劣る場合は、石盛は畑のときのままとされた」（日本史用語辞典）という。

「川原畑田成」小字は、その地番から中津川線予定地の南側にあったと思われるが、特定できない。「カワラ小字の近くにある、畑から田に転換した土地」を意味するか。

「前田畑田成」は、二ツ山川と茂都計川の間であり、「マエダ小字の近くにあつて畑が田に転換した土地」をいう。

「小坂畑田成」は、宮川の北側であり、「コササカバタ小字の近くにある

畑から田に転換した土地」を意味する。

「丸山畑田成」は、県道時又中村線が中津川線予定地と交差する南側隅にあり、「マルヤマ小字の近くにある畑から田へ変換した土地」をいう。

「小垣外畑田成」は、中村南東部のヤスミイシ小字の近くにあると思われるが、その位置は特定できない。また、その近くにもコガイト小字はみつかっていない。

「垣外畑田成」は中村に三カ所ある。一つは南東部で茂都計川と金屋川の間付附近に、あとの二つは西南部の村境にある。近くにはカイト小字はないが、ヤシキ小字やナカガイト小字がある。カイトバタタナリとは「家敷跡の畑が田んぼに転換した土地」をいう。

「家敷畑田成」は、垣外畑田成の南西側にあり、近くには「家敷」小字がある。ヤシキバタタナリとは「ヤシキバタ小字の近くにあった畑で田んぼに転換した土地」をいう。

「坂尻畑田成」小字は伊賀良小字区にはないが、地番からみて朝臣集会場の東方にあたる。シミズ小字を挟んで南西にサカジリ小字を確認できる。サカジリバタタナリとは「サカジリ小字の近くにあった畑で田んぼに転換した土地」をいう。

「岡田畑田成」は、一般県道親田中村線の西方にあり、南東側のオカダ小字に接している。オカダハタタナリとは、「オカダ小字の近くで畑が田に転換した土地」をいうのであろう。

最後に、「ヤマチ畑田成」小字はオカダハタタナリ小字の北東側にある。ヤマチハタタナリも「ヤマチ小字の隣にある畑が水田に転換された土地」をいう。



### 【蓬塚・よもぎ塚】

ヨモギヅカ。

「よもぎ塚」小字は中村北部にあり、蓬塚古墳の名で呼ばれている円墳があり横穴石室が確認されている。また、「蓬塚」小字は中村南西部の久米境にある。

ヨモギヅカとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ヨモギ←ヨボ・キと転じた語で、ヨボは「川や山の屈曲点」をいい、キは「場所」を示す接尾語。以上から、ヨモギヅカとは「尾根先端部が屈曲している所で、一部に土の盛り上がりがある土地」をいうか。

②ヨモギはヨ（横）・モギで、モギは動詞モグ（挽）の連用形で「崩崖」をいう。すなわち、ヨモギヅカとは「崩れ地が横に連なる場所で、一部に土のもりあがりがある土地」かもしれない。

### 【上の原】

ウエノハラ。

中村北部の国道 153 号線上と中央道と国道の間の二カ所にある。

ウエノハラとは「中央からみて少し上の方の高い所にある水利の便のよくない緩傾斜地」をいうのであろう。

### 【栗木入】

クリキイリ。

国道 153 号線が茂都計川を渡るところにある。

クリキイリとは何を意味するのか。クリは動詞クル（割）の連用形が名詞化した語で「えぐられたような状態」をいい、キは「場所」を示す接尾語、イリは「谷あい」のこと（以上は語源辞典）。従って、クリキイリとは「崩壊地のある谷あいの土地」をいう。

茂都計川に沿う細長い小字になっていて、首肯できる小字名になっている。

### 【宮ノ原】

ミヤノハラ。

中村の八幡宮付近に二カ所、北部の国道 153 号線上に一カ所ある。

ミヤノハラとは「お宮があり未墾地も多い緩傾斜地」をいうのであるが、北部のミヤノハラ小字については、現在、近くにはお宮がない。あるいは、山神を祀る祠でもあったのであろうか。

### 【金山】

カナヤマ。

中村最北部の茂都計川右岸にある。

カナヤマといえば、鉾山ということになるが、ここに鉾山があったとは聞いていない。

では、カナヤマとは何をいうのであろうか。二説を挙げておきたい。

①カナヤマとは「鍛冶職人の屋敷があった林地」をいうのかもしれない。緩傾斜地の下側である南東隣には、イエノマエ小字があるのは暗示的である。

②カナ←カク（掻く）・ナグ（薙）と転じたもので、「掻き薙がれたような土地」をいう（語源辞典）。従って、カナヤマとは「崩崖のある林地」をいうか。茂都計川によって削られたことは十分に考えられる。

### 【二ツ山】

フタツヤマ。

中村の村境にある。

フタツヤマとは「峯が二つになっている山のある土地」であろう。

### 【坊主すべり】

ボウズスベリ。

中村の国道 153 号線上で山本境にある小さな小字で、二ツ山の西麓にな

る。

ボウズスベリとは何か。寺院に関係する小字と思えるが、はっきりはしない。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①スベリは「土地の傾斜している所」をいう。つまり、ボウズスベリとは「僧侶が居住していた傾斜地」をいうのであろうか。

②ボウズには「寺領地」の意があるという。すなわち、ボウズスベリとは「寺領のある傾斜地」を意味するか。

#### 【小丸山】

コマルヤマ。

中村の二ツ山の側稜が突き出ている所にある。

コは「ほとんど意味をもたない接頭語」（語源辞典）か。コマルヤマとは「円錐形の山で神聖な場所」としておきたい。北側からみると二ツ山の中腹にある円錐形の峯にも見える。山神などが祀られていたところではないだろうか。

#### 【西平向】

ニシダイラムキ。長野縣町村地名大鑑にはニシヒラムキとなっているが、この方がわかりやすい。

『伊賀良の地名』の小字図にある「西平田」がこの小字であれば、二ツ山の北麓に近い傾斜地になる。小字表の方には「西平田」は見えないので、間違いと判断した。

ニシダイラムキとは何か。よく分からないが、「ダイラムキの西側にある土地」としたいところである。しかしダイラムキ小字は記載がない。ただこの小字の東側にあるムカイビラ（向平）小字がダイラムキ（平向）に転じたと考えれば、うまく繋がる。すなわち、ニシダイラムキとは「向平小字の

西側にある土地」ということになるが、どうであろうか。

#### 【くらがり洞】

クラガリボラ。

二ツ山の北向きの谷になっている。

クラガリボラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①クラガリボラとは字面の通り「日当たりが悪くて暗い谷」をいうか。樹林が茂っているのであろう。

②クラガリ←クラ（割）・カリ（刈）と転じた語で同義反復となっている。従って、クラガリボラとは「崩れ地のある谷」をいうのかもしれない。

#### 【愛宕横・愛宕前】

アタゴヨコ・アタゴマエ。

これらの小字は中村の二ツ山の北側に張り出した尾根にある。

アタゴヨコは「愛宕社の横手の土地」をいい、アタゴマエは「愛宕社の前方の土地」をいう。

愛宕社があったのは、西側にあるムカイビラ（向平）小字であろう。村史によれば、祭神は軻遇突知命（かぐつちのみこと）。記紀に登場する火の神で、愛宕神社や秋葉神社の祭神であり、近世以降に信仰を集めた神であったらしい。

#### 【向平】

ムカイビラ。

中村二ツ山の北向き傾斜地の中腹部から麓にかけて三カ所と三日市場境に二カ所がある。

ムカイビラとは「向こう側にある傾斜地」をいうのであろう。”向こう側”の基準になっているのは、二ツ山のムカイビラは北の方にあるヤシキ小字やイエノマエ小字に関わる有力者の屋敷をいい、三日市場境のムカイビラは南西方にあるヤシキ小字か八幡宮

をいうのであろうか。

#### 【中島・中嶋】

ナカジマ。

中村には四カ所ある。一つは北部の二ツ山川と茂都計川の間であり、一部が中央道にかかっており、もう一つは中平にあり二本の井水に挟まれている。三つ目の「中嶋」小字は下中村の県道時又中村線の近くに二カ所ある。

ナカジマとは何か。二説を挙げる。

①ナカジマとは、「流水に囲まれた土地」をいう。この小字が名付けられた時にはすでに井水はながれていたのであろう。

②ナカジマとは、「平地の中であって少し高くなった所」を指す場合もあるか。

#### 【山こせ・山コセ】

ヤマコセ。

「山こせ」小字は中村北部の二ツ山の北麓にあり、「山コセ」小字は県道時又中村線沿いにある。

コセは「長野県の一部で、一方が山側になったミチをいう。山陰（やまかげ）」（国語大辞典）をいう。すなわち、ヤマコセとは「（二ツ山の）山陰になっている土地」を意味するのであろう。これは二ツ山北麓の「山こせ」小字についてはその通りであるが、県道時又中村線の「山コセ」小字には適応しにくい。

では、後者のヤマコセ（山コセ）とは何か。二説を挙げる。

①ヤマには「林」の意があり、コセはコ（川）・セ（瀬）をいう（語源辞典）。以上から、ヤマコセとは「林があり、川も流れている土地」をいうか。

②コセ＝コサで「木が茂って陰をつくること」（国語大辞典）。つまり、ヤマコセとは「林地で木陰の多いとこ

ろ」をいう。小字発生時の状況を示しているのであろうか。

#### 【久弥添】

クネゾエ。

中村北部の茂都計川右岸の中央道の南にある。

クネは「屋敷の周囲の竹などの生け垣」をいうのであろうか。従って、クネゾエとは「屋敷の周りの生け垣に沿った土地」を意味するものと思われる。

#### 【石原】

イシハラ。

中村の二ツ山北東山麓の茂都計川右岸の一カ所、八幡社の南西方に小さな二カ所ある。

イシハラとは「小石の多い平地」をいう（広辞苑）。

二ツ山山麓のイシハラは、茂都計川がもたらした小石の多い平地で、八幡社の近くのイシハラはもっと広域の土石流が扇状地上に広がった時に形成されたものであろう。

#### 【日影・日陰・日かげ】

ヒカゲ。

中村にはヒカゲ小字が十六カ所に散在する。

ヒカゲには①「日当たりのいい土地」②「日当たりの良くない土地」の二つの正反対の意味がある。これは充てられている漢字では判断できない。中村北部では中央道付近に五カ所あり、「日陰」も「日影」もあるが、すべてが①の意味のヒカゲと思われる。他にも①は六カ所にあり、残りの五カ所が②を意味するものと思われる。

「日当たりがいい」方が多いのは当然であろうか。

#### 【山越】

ヤマコシ。

中村の二ツ山の頂上から南東に伸びる尾根の先端部に二カ所ある。『伊賀良の地名』の図には、一カ所しか記載はないが、もう一カ所、記載されている場所から少し下流側にある。

ヤマコシとは、「山の腰のところにある土地」を意味するか。傾斜角が緩くな付近のことを、人体の腰の部分に見立てたのであろう。

#### 【なぎた】

ナギタ。

中村の二ツ山の東側麓にあり、現在は果樹園などの畑地になっている。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語で、「山などの崩れた所」をいい、下伊那郡の方言であるという（国語大辞典）。タは「場所」を示す接尾語。以上から、ナギタとは「崩れ地があった土地」をいうのであろう。

#### 【日やけ田】

ヒヤケダ。

中村の二ツ山東麓にあり、二つのナギタ小字の間にある。

ヒヤケダは「早のため水が涸れ、いたんだ田」（広辞苑）だという。

従って、ここのヒヤケダも「早の時に水が涸れやすい田んぼ」を意味するのであろう。自然湧水を頼りにしている水田だから、旱魃のも弱かったと思われる。

#### 【ぶでん】

ブデン。

これも中村の二ツ山東麓にある。

ブデンとは何を意味するのであろうか。ブデン←フデンと転じた語と思われる。ではフデンとは何か。

フデン（負田）には「平安中期以降、正税を国衙に納め、雑役を領主に対して負担する」（国語大辞典）という意味があるが、小字名の発生は中世後期

とすれば、伊賀良で国衙に正税を納めていたとは考えにくいので、この場合は当てはまりそうにもない。

フデンはフデン（封田）か。フデン（封田）については、国語大辞典は「封戸に指定された戸の保有する田。神領・院御領などにこの名称が残る」とある。このことから、ここ中村のブデンとは「神領の田のあったところ」を意味すると考えることができそうだ。近くにある神社は愛宕神社であるが、他の神社かもしれない。

#### 【垣外】

カイト。

茂都計川の久米路橋の北西方に二カ所、八幡宮の東方に三カ所、その南方に一カ所、下中村に二カ所ある。見落としもあるかもしれないが、合計八カ所と少ない数ではない。

カイトは「屋敷があった所」としておきたい。

#### 【恰・阿だか】

アダカ。

下中村第三組合性格改善施設に一カ所、中村の釜屋川の両岸に四カ所ある。

アダカ←アタカと濁音化した語で、ア（亜）は「準ずる」の意（広辞苑）で、タカ（高）は「平地の中の微高地」をいう（語源辞典）。

以上から、アダカとは「ちょっとした平地の中の微高地」をいうのであろう。見る方向によって、少しでも高ければ、アダカと名付けていたように思える。伊那谷南部では目につく小字名である。

#### 【家の尻】

イエノシリ。

中村北部の中津川線予定地の南東側に二カ所あり、近くのヤシキ小字に

接している。

イエノシリとは「屋敷の敷地の裏手にある土地」であろうか。

#### 【六地藏】

ロクジゾウ。

中村の久米境にあり、ウエノハラ小字とゴンゲンバラ小字に囲まれている小さな小字。

ロクジゾウとは「六地藏が祀られていた場所」を意味するのであろう。ここには石碑群があり、その中には六体の地藏菩薩は祀られていないが、「六道権化大菩薩庚申供養塔」がある。このことをさしているのであろうか。あるいは別に六地藏があったのかどうか。延宝八年（1680）の年号が彫られているという（飯田市の石造文化財）。

六地藏は寺の入口・墓・辻などに立つというが、境の神の信仰とも合体していると伝えられており（仏教民俗辞典）、それ故に、このロクジゾウ小字も村境にあったのであろう。

#### 【坂尻】

サカジリ。

中村には三カ所にある。いずれも、茂都計川やその支流の谷に下りきった所にある。

サカジリとは「坂道の下りきった所」を意味するのであろう。

#### 【砂田】

スナダ。

中平公会堂の南西方に二カ所、下中村第三組合生活改善施設の東方に二カ所ある。

スナダは「砂地の田」（国語大辞典）であろう。中平は扇状地上に、下中村は茂都計川氾濫原にあり、いずれも茂都計川が運んだ砂が堆積している所と思われる。

#### 【垣外尻】

カイトジリ。

中村の朝臣集会所の東方にある。

カイトジリとは「屋敷跡地の下の土地」をいうのであろうか。コゾガイト小字やナカガイト小字に接している。少し離れているがヤシキ小字もある。

#### 【竹ノ腰・竹ノ越・竹ノコシ】

タケノコシ。

中村公会堂の東、下中村第三組合生活改善施設の南、下中村にもう一カ所、中川に一カ所、さらに八幡宮の南西方に一カ所の合計五カ所にある。

タケノコシとは「微高地の下方にある土地」をいうか。タケはタケ（高）で「微高地」をいい、コシはコシ（腰）で人体の腰の部分に見立てたものであろう。

#### 【舞台・舞タイ】

ブタイ。

下中村第三組合生活改善施設の南西方と中村公会堂の南東方にある。後者は『伊賀良の地名』図には「舞臺」となっているところである。もう一カ所の中村 2876～2877 の地も「舞臺」ではないかと思われるがどうか。

ブタイとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①ブタイは「小台地状の地形」をいう。従って、ブタイとは「少し高くなっている平坦地」を意味するか。周辺のどこか一方から見て高ければブタイと呼んでいたのではないだろうか。

②ブタイ←ムタ（沼）・キ（井）と転訛したもので、ブタイとは「湿地で流水のあるところ」かもしれない。流水は自然湧水もありうる。

#### 【朝倉】

アサクラ。

中村公会堂と南の茂都計川との中程の所に二カ所ある。

アサクラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①アサクラはアサ（浅）・クラ（割）で「浅い谷」をいう。従って、アサクラとは「浅い谷になっている土地」をいうか。

②アサ＝アズで「崩崖」。クラはクラ（割）で「谷」の意。以上から、アサクラとは「崩崖のある谷」か。

#### 【田中前】

タナカマエ。

中村の八幡宮の南西方にあり、茂都計川左岸に沿う細長い小字であり、現在は水田になっている。

タナカマエとは、字面の通りで「水田地帯の前方にある土地」であろうか。水田地帯の背後には八幡宮があり、マエというのは南西方の茂都計川をいうのであろう。

#### 【ヒエ田・冷田】

ヒエタ・ヒエダ。

これらの小字は中村の八幡社の南西方の段丘の麓部分にある。

ヒエダ（タ）とは何か。ヒエタ＝ヒエダであろう。二説を挙げる。

①ヒエタとは「水温の低い田んぼ」か。段丘麓の自然湧水を利用していたのであろう。

②ヒエタとは「田稗を栽培していた田んぼ」であろうか。水温の低い田んぼでも育つ穀物として、近世には奨励されていた。

#### 【溝畑】

ミゾバタ。

中村の八幡宮の南西方にあり、現在は田んぼになっている。

ミゾは「地を細長く掘って水を流す

所」（広辞苑）で、ハタはハタ（端）か。以上から、ミゾバタとは「井水が傍を流れている土地」をいうのであろう。

#### 【日影川原】

ヒカゲカワラ。

中平の茂都計川右岸にある。

ヒカゲカワラとは「日当たりのよくない川原」であろう。

#### 【権現原】

ゴンゲンバラ。

中平の茂都計川右岸に三カ所、そこから南の方の朝臣の惣教寺の近くに一カ所ある。

権現は神仏習合を象徴する名称で明治初年の神仏分離令以後は地名として残るだけになっている。

ゴンゲンバラとは「権現様に因む水利の便が悪く未墾地の多い緩傾斜地」をいうのであろうか。

ここでいう権現は八幡大権現である可能性が高いが、他にあるのかもしれない。

#### 【中張】

ナカハリ。

朝臣の久米境にある山地になっている。

ナカハリとは何か。二説を挙げたい。

①ナカハリとは「中段にある側稜の張り出した所」をいうか。

②ナカハリ←ナカハラと転じた語で、ナカハラとは「中段の傾斜地になっている所」をいうのであろうか。上の段はウエノハラ（上ノ原）小字になっている。分筆などナカハラと区別する必要が生じてナカハリとしたのかもしれない。

#### 【寺尾原】

テラオバラ。

朝臣のナカハリ小字やゴンゲンバラ小字に接している。

テラ←タイラ（平）と転じた語で、オ（峰）は「岡」をいう。従って、テラオとは「平らな岡」のこと（以上は語源辞典）。

以上から、テラオバラとは「平らな岡がある傾斜地」を意味するのである。

#### 【森ノ内】

モリノウチ。

朝臣の茂都計川右岸にある。

モリ（森）は「樹木の茂り立つ所」であるが、特に神社のある木立をいう場合が多い（広辞苑）。近くには氏神様を祀っていると思われる祠もあるようだ。

モリノウチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ウチは「山谷の小平地」をいう。つまり、モリノウチとは「お宮もある木立が茂り小平地もある山地」をいうか。

②ウチにはウチ（打）で「切り取られたような地形」の意もある。従って、モリノウチとは「崩れ地もあり樹木が茂る山地」かもしれない。

#### 【上ノ原】

ウエノハラ。

朝臣のナカハリ小字の上の段丘にある。これも久米境にある。

ウエノハラとは「最上段の段丘面にある野原」か。

#### 【神楽免】

カグラメン。

中平の茂都計川左岸にあり、現在は水田になっている。

カグラメンとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①カグラメンとは「収穫した米を神楽

などの神事芸能を行うための費用に充てる田んぼで免租地になっている土地」をいうのであろうか。神楽を奉納するお宮は中村八幡宮と思われる。②カグラはカク（欠）・ラ（「場所」接尾語）で「断崖」をいう（語源辞典）。従って、カグラメンとは「崩崖のよる災害常襲地で免租になっている所」をいうことも考えられる。

#### 【川原滝場】

カワハラタキバ。

中平の八幡社南方で茂都計川左岸にあり、現在は水田になっている。

タキバは、この地域では「御嶽行者が滝行を行った所」ではないだろうか。鼎の名古熊神社の滝場では50人もの御嶽行者が修行していたこと茂あったという（名古熊区誌2000）。

以上から、カワラタキバとは「川原にあった八幡社の禊ぎの場であり、御嶽行者の修行の場でもあったところ」をいうのであろう。

#### 【平台前】

ヘイダイマエ。

中平の八幡社南方になる前方で茂都計川の手前にある。

ヘイダイはヘイダイ（幣台）で「神前などに語弊を立てて置くための台」をいう（国語大辞典）。しかし、このことをこの小字に当てはめるには、お宮が少し離れすぎている。

祭礼にあたって神霊を迎えるために心身を清浄にして慎みの生活に入る時に神域に榊や御幣を立てたことがある。ここの八幡社で行われたかどうかは不明であるが、この榊か御幣を立てる台を置いた所ではないか、と考えることもできる。

以上から、ヘイダイマエとは「齋忌に入るしるしとして立てられた御幣

を置く台のあった場所の前方の土地」をいうのであろうか。

#### 【平台川原】

ヘイダイカワラ。

『伊賀良の地名』の小字図には記載はないが、地番から判断して、ヘイダイマエ小字に接して、より茂都計川に近い場所になる。

ヘイダイカワラとは「幣台のある場所に接する川原地」を意味するのであろう。

#### 【経田・京田】

キョウデン。『長野縣町村字地名大鑑』にある呼び名である。『伊賀良の地名』にはキョウダとあるが、伊那谷南部ではキョウデンの方が一般てきななので、キョウデンを採りたい。

いずれも、中平の八幡宮の南方にある。

キョウデンは「寺院に寄進された田」をいうのであろうか。神仏習合の時代だったから、寺社に寄進された田んぼとみた方がいいのかもしれない。免租地であったと思われる。

従って、キョウデンの所有者は南にある惣教寺か、北にある八幡宮か。

#### 【石田】

イシダ。

中平の八幡宮の南方と中電の伊賀良変電所の北側の二カ所にある。

イシダとは「小石混じりの土地(田)」をいうのであろう。

#### 【社込】

シャゴメ。

長清寺の南方のマルヤマ小字の中に小さいのが一カ所、中平公会堂の南西に一カ所ある。

シャゴメとは何か。難しい地名である。一応、三説を挙げておく。

①シャゴメ←シャグジと転じた語で、

「ミシャグジを祀った所」か（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）。ジ→メの転訛がありうるのかどうかは難点かもしれない。

②シャゴメ←ジャコウゴメ（麝香米）と転じたか。従って、ジャゴメとは「香り米を栽培したことのある土地」か。東北地方に多く、赤米と同じようにハレの食事に供する地方もあったという（民俗大辞典）。お宮の神事に供されたと思われるが、この地で果たして栽培されたことがあるかどうか。

③シャ(社)は「寺社」や「土地の神」の意があり（国語大辞典）、ゴメ＝コメで動詞コム(込)の連用形が名詞化した語で「囲い込まれた土地」をいうのであろう。以上から、シャゴメとは「微高地などに祠や墓地のある場所」を意味するか。

#### 【橋場浩】

ハシバコウ。

中平公会堂のすぐ南西側にある。

コウ←コ(処)と長音化した語で「場所」を示す接尾語（語源辞典）。従って、ハシバコウとは「橋が架かっている場所」をいうのであろうか。宮川のほとりになる。

#### 【堤・堤下・堤端】

ツツミ・ツツミシタ・ツツミバタ。

これらは中平公会堂の西方にある。ツツミシタ小字はツツミ小字の北東隣にあり、ツツミバタ小字はこれらの小字の北西方にあり、近くには現在も大きな溜め池がある。

ツツミ(堤)とは、この地域では「水をためた池」（広辞苑）を指すことが多い。この中村のツツミも「溜め池のあった土地」をいうのであろう。

ツツミシタとは「ツツミ小字の下流側の土地」をいい、ツツミバタとは「溜



め池の傍らの土地」をいう。

#### 【小坂畑】

コサカバタ。

中村のツツミ小字の南西隣にある。コサカバタのコはほとんど意味をもたない単なる接頭語で、コサカバタとは「微傾斜地にある畑地」をいうのであろう。

#### 【水口】

ミズクチ。

中村のツツミ小字群の少し上流側にあり、ほぼ宮川に沿っている。

ミズクチとは、字面の通りで「水を取り入れる口のあるところ」であろうか。「水を捨てる口」の意味もあるが、取り入れ口の方が気になるのであろうか。

#### 【山の神】

ヤマノカミ

中平の甲子様を祀る日待塔が二基ある。ここに山の神が祀られていたと思われるのであるが、詳細は不明。

ヤマノカミとは、文字通りで「山の神が祀られていた場所」であろう。

#### 【神ノ木】

カミノキ。

中平のヤマノカミ小字の北隣にある大きな小字である。

カミノキとは何か。文字を見れば神木（シンボク）になってしまうが、音の方が先にあったのだから、この場合は神木ではないだろう。

カミノキはカミノキ（紙の木）で「樹皮を紙の原料とする雁皮または楮の異称」という（広辞苑）。従って、カミノキとは「雁皮か楮を栽培している土地」を意味するものと思われる。

#### 【丸山】

マルヤマ。

中村北部の県道時又中村線と茂都計川の間にある。

マルヤマは「形が丸く見える山」（国語大辞典）であるが、この地で“丸く見える山”というの、そんな小山があるのだろうか。あるいは二ツ山をいうのかもしれない。いずれにしても頂上部に祠があったり、山全体が神奈備・神体山になっているのであろう。

マルヤマとは「丸い形の山で信仰の地にもなっている所」としておきたい。

#### 【宮川】

ミヤガワ。

中平公会堂の南西方～南方にかけて五カ所ほどある。

ミヤガワは井水の名で、八幡社の社領であったジンデン（神田）小字を流れる井水ということで名付けられたという（村史）。

従って、ミヤガワとは「八幡社の社領を流れる宮川の川筋の土地」を意味するのであろう。

#### 【宮原】

ミヤハラ。

中村の中平公会堂周辺に五カ所ほど集中しており、二カ所は八幡社と公会堂の中間点付近にもある。

ミヤハラとは、一般的には「お宮のあった場所」である。それに間違いはないと思われるが、八幡社があったところなのか、別のお宮があったのかはつきりしない。

#### 【畑田】

ハタダ。

中平公会堂の北西側、県道時又中村線の南側にあり、宮川に沿う。

ハタダとは何をいうのであろうか。二説を挙げる。

①ハタダとは単純に解釈すれば「畑と田んぼのある所」か。井水が通るようになって、畑を水田に転換したが、一部は少し高かったために畑のままになっている、そういう土地を指しているのかもしれない。

②ハタダとはハタタナリ（畑田成）の略か。すなわち、ハタダとは「畑を田に変換した土地がある所」か。

#### 【狐塚】

キツネヅカ。

中村のキツネヅカ小字は中平公会堂の北側にあり、県道時又中村線に沿う。

キツネヅカとは「狐を神としてまつた祭場としての塚」という（民俗大辞典）。近世になって稲荷信仰が流布すると狐塚には稲荷社が祀られるようになって、動物の狐にタイする信仰が薄れていったという。

ここにも塚はあったと思われるが、詳細は不明。

#### 【寺畑】

テラバタ。

長清寺の境内と重なる。

テラバタとは何か。二説を挙げておきたい。

①字面の通りで「お寺の所有する畑」であろうか。

②テラバタはテラ（寺）・バタ（端）で「お寺の傍の土地」をいうのかもしれない。

#### 【大名塚】

ダイミョウヅカ。

中平公会堂の敷地とその付近に二カ所、公会堂と中村八幡宮との中間点付近に三カ所あるが、いずれもある小さな小字である。

ダイミョウヅカは、大名が葬られている所ではないだろう。ここには径

12.8mの大きな円墳があり、この大きさを大名級をみて名づけられたものであろう。

従って、ダイミョウヅカとは「大きな円墳がある所」を意味するのであろうか。

#### 【橋詰】

ハシヅメ。

中村中平の宮川沿いにあり、ハシバ（橋場）小字に接する。

ハシヅメは「橋のつきるところ。橋のたもと」（広辞苑）をいう。従って、ハシヅメとは「（宮川に架かる）橋のたもとの土地」をいうか。

#### 【山ギハ】

ヤマギワ。

中村の中平公会堂と八幡社の中間点付近のミヤ小字群の中にある。ダイミョウヅカ小字もある所。

ヤマギワとは「樹木の茂る高所の傍の土地」をいうのであろう。ヤマは側稜の先端部をいうか、あるいは大きな円墳を指すのか、はっきりはしない。

#### 【下大門】

シモダイモン。

中村の小茂都計川と県道時又中村線の間で、中村会館のある大きなミヤハラ小字の北隣にある、これも大きな小字になっている。

シモダイモンとは「（長清寺の）下の方から入る大門に通じる土地」をいうのであろうか。この小字を見ても長清寺境内の大きさがわかる。

#### 【横大門道下】

ヨコダイモンミチシタ。

長清寺の前から横に広がる大きな小字である。

ヨコとは「前後の方向に対して左右の方向」（国語大辞典）をいい、シモダイモンから長清寺に近づいた時に

左右に通じている参道を「横大門道」としたのであろうか。

以上から、横大門道とは「(長清寺への)参道の下側の土地」をいうのであろう。参道の上側にも、この小字はひろがっているが、後に付け加えられたものと思われる。

#### 【新天】

シンテン。

長清寺の南隅にある小さな小字である。現在、ここには溜め池がある。

シンテンとは何か。わかりにくい地名である。二説を挙げる。

①シンテン←シンデン(新田)で、「新しく造成された田んぼのあるところ」か。今までは畑であったのか、あるいは荒地であったのか分からないが、恐らく井が通るようになって水田になった所であらうか。

②シンデン(神殿)で「神を祀る殿舎があった所」であらうか。江戸時代中期には、長清寺には「鎮守明神社」があったという(村史)。神仏習合の時代だったのだから、あり得ることと思われる。

#### 【旧境内】

キュウケイダイ。

長清寺にある。

キュウケイダイとは、文字通りで「(長清寺の)もとの境内であった土地」をいう。

#### 【北ノ沢】

キタノサワ。

中村の北部、長清寺の北側にある。

キタノサワとは「(中村の)北部を流れる流水の沿岸部の土地」をいうか。あるいは、キタは長清寺の北側ともとれないこともない。

#### 【コモツケ】

中村北部の小茂都計川沿いに三カ

所ある。

モツケ(茂都計)に対するコモツケ(小茂都計)であらうか。モツケと区別するために「ほとんど意味をもたない単なる接頭語」(語源辞典)をつけたのであらうか。

コモツケとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①モツケ=モツツケ=トツツケだという(国語大辞典)。トツツケはこの地方の方言で「先端部」のこと。以上から、コモツケとは「先端部にある土地」となる。この「先端部」が何なのか問題になるが、大瀬木や三日市場との境界になるので、「中村の先端部」をいうのか、それとも少し離れているが、扇状地の先端部を意味しているのか、はっきりはしない。

②モツケ←モチケと促音便化した語か。モチは副詞モチモチに関連し、「粘り気のある状態」すなわち「湿地」をいい、ケは「様子。気配」をいう接尾語(語源辞典)。以上から、コモツケとは「しけっぽい土地」をいうか。

#### 【荒神田】

アラジンデン。『長野縣町村字地名大鑑』にはコウジンダと振っている。

中村の三日市場境に、大小の三カ所ある。

「荒神田」とは何を意味するのか。二説を挙げる。

①コウジンデンで「かまど神コウジン様の供物料田」であらうか(宮澤恒之氏『伊賀良の地名』)。

②アラジンデンはアラ(新)・ジンデン(神田)で、「新たに寄進されて神社領となった水田」をいうか。ジンデン(シンデン)とは「神社に付属して、その収穫を神社の祭典や造営、または神職の給料などの諸費にあてるため

の田地。不輸租田とした」（国語大辞典）という。

#### 【油免】

アブラメン。

中村会館と三日市場境の間に、三カ所ある。

アブラメンは伊那谷南部の特徴的な小字名か。各種の辞書類にはない。

アブラメンとは「収穫物による収入を寺社の灯明油に充てるために免租だれている耕作地」をいうのであろうか。

#### 【大洞沢】

オオボラザワ。

中村会館北東側の小茂都計川の氾濫原にある。

オオボラザワとは「広い谷で川が流れている土地」をいうのであろうか。

#### 【野際】

ノギワ。

中村のオオボラザワ小字と同じ谷の中に二カ所ある。

ノギワとは「湿地もある緩傾斜地のあたり」をいうか。

#### 【中原・仲原】

ナカハラ。

中村北部の中村会館の北方に一カ所、朝臣の惣教寺の西方に一カ所ある。

北部のナカハラは「小茂都計川の谷の緩傾斜地の中程にある土地」をいうか。

また、朝臣のナカハラは「上の段丘にある上原より下の段丘にある傾斜地」をいうのであろうか。上原のある段丘と茂都計川との間にあるのでナカハラと名づけたか。

#### 【神田】

ジンデン。

中村北部にあり、ノギワ小字とナカ

ハラ小字に挟まれている。

ジンデンは「収穫物を神社の神事などを行う費用に充てるための田んぼで免租地になっているところ」をいうのであろう。

#### 【妻ノ神】

サイノカミ。

中村八幡社の北方に三カ所ある。

サイノカミとは「悪霊の侵入を防ぐ道端の神様」（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）であらう。少し南側にずれているが、双体道祖神がある。

#### 【大洞】

オオボラ。

下中村交差点から運動公園通りを北に進んだ周辺に六カ所ほどある。かつては繋がっていたのであろう。

オオボラとは「広い谷」をいうか。」

#### 【広見】

ヒロミ。

中村の八幡宮の北方にあり、小茂都計川の氾濫原になっている。

ヒロミとは「広い場所」をいう。ミは「場所」を示す接尾語（以上は国語大辞典）。これだけの意味なのか、他に何かを含んでいるのかはわからない。

#### 【七ツ田】

ナナツダ。

中村の八幡宮のすぐ北方の谷底部に二カ所あるが、もともとは繋がっていたものであろう。

ナナツダとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ナナツは「数多くの～」の意で、ナナツダとは「多くの田んぼがあるところ」か。しかし、それほど多くの田んぼがあったとは思われないが、地名発生時には多かったということであらうか。

②ナナツは単なる美称とも考えられるという。すなわちナナツダとは「田んぼになっている所」か。

【奈木尻・ナキ尻・ナギジリ】

ナギジリ。

中村八幡社の北方、運動公園通りを跨いで一カ所、下中村の小茂都計川沿いに二カ所、下中村の茂都計川右岸に一カ所、森下沢川沿岸に一カ所などが目につく。

ナギジリはナギ（薙）・ジリ（尻）で「崩壊地の末端部の土地」をいう。

【新ラシ・アタラシ】

アタラシ。

下中村の茂都計川と小茂都計川の間に四カ所あり、現在は果樹園、居住地、一部は水田にもなっている。

アタラシとは何か。二説を挙げたい。

①アタラシは「新開地の称か」（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）ということも考えられる。もともと形容詞アタラシ（惜）には「そのままにしておくのは残念だ。もったいない」（国語大辞典）の意がある。未墾地にしておくのはもったいないという意味をこめている地名か。

②アタラシ←アタラシヤ（新屋）の省略形か。とすれば、アタラシとは「分家」を意味する。

【平ラ】

タイラ。

中平の八幡宮の東隣にあり、台地の先端部になっている。

タイラといえば「平坦地」ということになるが、小字界図をみるとそこは傾斜地になっていて平らではない。

小字図が正しいとすれば、タイラは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①タイ←ダイ（台）と清音化したもので、ラは「場所」を示す接尾語。従って、タイラとは「丘になっている土地」をいうか。

②タイ←タエ（絶）と転じたもの。動詞タユ（絶）の連用形が名詞化した語で「連続したものが切れる」ことをいう。以上から、タイラとは「平地から傾斜地の移るところ」で、その境目をいうか。

【澁屋】

シブヤ。

下中村交差点の南東隅に、二カ所ある。段丘崖の麓になっている。

シブヤとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げたい。

①シブは「水あか、水サビのたまった地」をいい、ヤ（屋）は「住居」か。従って、シブヤは「湿地もある居住地」か。

②シブはシボム（萎）の語源で「谷口」、ヤはヤツ（菴）の略で「湿地」をいう。すなわち、シブヤは「谷が狭まった湿地」をいうか。

【家ノ廻り】

イエノマワリ。

下中村の交差点南東隅のシブヤ小字の近くに二カ所ある。

イエノマワリとは、字面の通りで、「屋敷の周辺の土地」をいうのであろう。

【徳明】

トクミョウ。

中川にあるが、下中村交差点の運動公園通りに沿った北側になる。

トクミョウとは何か。これも難しい地名である。二説を挙げる。

①トクはトキと関係し「崩壊地形、浸食地形」をいう（語源辞典）。イ段⇄ウ段の交替はかなり多いといわれて

いる。ミョウはミヨから転じたもので「水で掘れて深くなった所」（国語大辞典）の意もある。房総付近の方言であるという。以上から、トクミョウとは「（大雨などで）崩れたり、掘られたこともある土地」をいうか。方言の地が離れていることが気になる。

②固有名詞も考えられないわけではない。すなわち「徳明さんに関わる土地」か。

#### 【白前】

シロマエ。

下中村交差点のシブヤ小字とトクミョウ小字に挟まれている。

シロマエとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①シロはシロ（代）で「田地」のこと（国語大辞典）。従って、シロマエとは「水田地の前の方の土地」をいうか。

③シロには「丘上や山腹の平坦地」の意もある（語源辞典）。すなわち、シロマエとは、「段丘の下の方の土地」をいうのかもしれない。

#### 【マセグチ】

下中村交差点の南側にある。

マセはマセ（馬柵）で「放牧場などで馬が外に出ないように横木を渡して作った垣」をいう（国語大辞典）。

従って、マセグチとは「放牧場の出入口で横木を渡して馬が出ないようにしてある場所」をいうのであろう。

#### 【小祭面】

コマツリメン。

下中村交差点に南側のマセグチ小字の南端に接する。

コマツリメンとは何か。二説を挙げる。

①コマツリはコ（木）・マツリ（祭）で「樵夫などが木を伐る時に山の神を祭ること」（広辞苑）をいう。従って、

コマツリメンとは「山の神を祭る神事に必要な経費を捻出するために耕作する田んぼで、免田になっていた所」をいうか。

②コ（小）は「ほとんど意味を持たない単なる接頭語」で、マツリメンは「お宮の神祭に必要な経費に充てるための水田で、免租地になっている土地」をいうのかもしれない。

#### 【北沢】

キタザワ。

中村の北部村境にある小字で、六カ所ほどある。この小字の中や傍らを小茂都計川が流れている。

キタザワとは「（中村の）北部にあって流水のある土地」をいう。

#### 【北澤平】

キタザワヒラ。『伊賀良の地名』にはキタザワダイラとあるが、ここでは『長野縣町村字地名大鑑』の記載を採りたい。

キタザワヒラとは「キタザワ小字の近傍にある傾斜地」をいうか。

#### 【二方洞】

ニホウボラ。

下中村の三日市場境に近いところに大きなのと小さいのがある。

ニホウボラとは、「両側に谷のある土地」をいうのであろうか。南西側に小茂都計川が、反対側の北東側には臼井川が流れている。

側稜の場合、ほとんどが両面に谷があるのだから、もっと多くあってもいいと思えるが、飯田市内にはここにしかない小字である。

#### 【七郎ヶ洞】

ヒチロウガホラ。

下中村の東方にあり、フホウガホラ小字の南側に貼り付いている。

ヒチロウは固有名詞であらう。すな

わち、ヒチロウガホラとは「七郎が所有している洞」を意味するか。

#### 【ホダシタ】

中川の北東部にあるキタザワ小字に囲まれて小茂都計川周辺に三カ所、茂都計川の近くに一カ所ある。

ホダ←ボタと転じた語で、ボタは「田畑の畔」をいう。下伊那郡や愛知県北設楽郡の方言だという（国語大辞典）。

従って、ホダシタとは「田畑の畔の下側の土地」をいうか。

#### 【猫舞】

ネコマイ。

中川の県道時又中村線と小茂都計川の間にある。

ネコマイとは何か。

①家号もあり、口碑も残っている。その家に大きな三毛猫がいて、ある夜、音がするので家人がそっと覗くと、女の子の赤い木屐のを着て手ぬぐいで頬被りをして手に箒をもって踊っていたという。それでネコマイ（猫舞）という（伊賀良の民俗（1））。これらの猫にまつわる怪異的な話の伝播には、葬制にまつわって猫の怪異を語る旅の宗教者やその芸能化した者たちの関わりがあったものだろうという（民俗大辞典）。その中には舞々の舞人がいたのであろうか。以上からネコマイとは「舞々芸能者たちの宿とした場所」であったのかもしれない。

②ネコはネ（根）・コ（処）で「微高地」のいい、マイ（舞）は「ぐるりと回り込んだ地形」をいう（語源辞典）。以上から、ネコマイとは「曲流する川に囲まれた微高地」をいうか。

#### 【北野】

キタノ。

中川の県道時又中村線の北側にあ

る。

キタノとは「（中村の中央より）北の方にある緩傾斜地」を意味しているものと思われる。

#### 【西部】

ニシブ。

中川のキタノ小字に囲まれて二カ所にある。

ニシブとは何か。語源辞典によれば、ニシ←ニジ（滲）と転じて「湿地」のこと、ブ←フと濁音化した語で「～になっている所」をいう。

以上から、ニシブとは「湿地になっていた所」をいうのであろうか。

#### 【サカリ】

下中村交差点の東方に五カ所あり、現在は畑と住宅地になっている。

サカリとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げたい。

①サカリはサカ（坂）・リ（接尾語）で「緩傾斜地」をいうか。リは「方向。場所」を示す接尾語。

③サカリはサ（接頭語）・カリ（刈）で、サは「語調を整える接頭語」で、カリは「草を刈ること」をいう。以上から、サカリとは「草刈場であった所」であらうか。

#### 【サガリ】

中村の久米境にあり、金屋川の開析した小さな谷の二カ所にある。

サガリ←サカ（坂）・オリ（下）と転じたか。従って、サガリは「谷底部の緩傾斜地」を意味するものと思われる。

#### 【南下リ】

ミナミサガリ。

下中村の茂都計川と県道時又中村線の間であり、現在は果樹園などの畑地になっている。

ミナミサガリとは「南下がりになっ

ている緩傾斜地」をいうか。

【地蔵前】

ジゾウマエ。

中川の県道時又中村線の北東側に沿って、ネコマイ小字の南側に接する。現在は水田になっている。

ジゾウマエとは「お地蔵様を祭る場所の前の土地」をいうのであろう。マエは”低い方”をいうか。ここで地蔵というのは『飯田市石造文化財』のいう「六面幢」をいうのであろうか。

【中垣外】

ナカガイト。

三カ所にある。一つは中川の木師山神社の南方の県道時又中村線を越えた所にあり、現在は果樹園になっている。二つ目は朝臣集会所のところに、三つ目は朝臣の茂都計川支流右岸に三カ所ある。

ナカガイトとは「中程にある屋敷があった土地」か。ナカが明確ではないが、南北軸から見たときに、”中程の”位置をいうのであろうか。

【大京】

ダイキョウ。

中川の県道時又中村線沿いとその南方の二カ所にある小さな小字。

ダイキョウとは何か。これも難しい地名である。二説を挙げる。

①ダイキョウ←タ(田)・イ(井)・キョ(渠)と転じたものか。すなわち、ダイキョウとは「田に引く水を流す溝のある所」を意味するか。

②ダイキョウ←ダイ(大)・キョ(渠)と長音化したか。ダイキョウとは「大きな溝のあるところ」か。この小字のある二カ所とも、現在は幅のある井水が流れている。

【島崎】

シマザキ。

中川の県道時又中村線の南西方にある。

シマザキとは「周りに井水のある段丘の先端部」をいうか。

【ボウシメン】

中川の木師山神社の南西方にあり、北側は県道時又中村線に接している。

ボウシメン←ホウシ(法師)・メン(免)と濁音化した語であろう。従って、ボウシメンは「寺院の所有田で、収穫物を法事や寺院の維持等に充てた耕作地で免租地になっていた所」をいうのであろう。

【北浦】

キタウラ。

中川の公会堂の南側と、下中村の茂都計川右岸の、二カ所にある。

キタウラとは「北側の裏手にある土地」をいうか。基準になるのは、中川公会堂のキタウラはナカムラ小字であろう。中村の中心的地帯ということ、ナカムラ小字があると思われるからである。また、下中村のキタウラの場合は、基準になっているのは、トノガイト小字であろう。

【中村】

ナカムラ。

中川にあるが、中村の中心的地帯ということ、ナカムラ小字が生まれたのであろう。

【御飯前】

ゴハンマエ。

中川の茂都計川が曲流する左岸沿岸とその北方の二カ所にある。

ゴハンマエとは何か。竜丘にも二カ所あり、由来・解釈に苦しんだが、まだ、正解と思われるところまで到達できないでいる。

ここで改めて考えた上で仮説を一つ加えたい。



ゴハンマエ←ゴハン（御飯）・マイ（幣）と転じたのかもしれない。マイ（幣）は「神への供え物」をいう（国語大辞典）。

以上から、ゴハンマエとは「神前に供える米を栽培する田のある土地」をいうのかもしれない。

#### 【三七作り】

サンヒチヅクリ。

中川のナカムラ小字の隣に一カ所とそれより東方に一カ所ある。

サンヒチは人名であろうか。すなわち、サンヒチヅクリとは「三七の所有地になっている土地」をいうのであろう。

#### 【隠居畑】

インキョバタ。

中川のナカムラ小字の北西側の隣にある。

インキョバタとは何か。二説を挙げる。

①インキョバタとは「隠居の費用をまかなうための畑」であろうか。隠居田には、そうした意味があるが、畑はどうであろうか。

②インキョバタとは「隠居が耕作する畑」かもしれない。耕作しやすい畑であろうか。

#### 【川垣外】

カワガイト。

中村八幡社の南方にある。

カワガイトとは「湧水のある屋敷跡地」をいうのであろう。

#### 【辻】

ツジ。

中村の八幡社南方にあって、県道時又中村線と茂都計川との中間点付近に三カ所ある。

ツジは二本以上の道が交わった所であるが、境界性と公共性の特性をも

ち、精霊や旅人の送迎の場で人々が集まり市が開かれ占いや芸能の場でもあったという。

ここ中村のツジで、どのようなことが行われていたのかはわからない。

#### 【北沼】

キタヌマ。

中村八幡宮の南方、二つのツジ小字に挟まれている。

キタヌマとは、①一般的には「北の方にある沼地だった所」をいうのであろうが、あるいは②キタ←キダ（階）と清音化した語として、「階段状になっている沼地のあるところ」をいうのかもしれない。

#### 【各垣外】

カクガイト。

中村八幡宮の南方、キタヌマ小字の北側に接している。

カクガイトとは何を意味するのか。語源辞典に依り二説を挙げる。

①カクはカハ（川）・ク（処）か。すなわち、カクガイトとは「流水のある屋敷跡地」をいうのだろうか。湧水だったと思われる小川の上流側にはカワガイト（川垣外）小字がある。

②カクはカ（欠）・ク（処）で、小崩壊があったか。であれば、カクガイトとは「小さな崩れ地があった屋敷跡地」ということも考えられないこともない。

#### 【弥次郎】

ヤジロウ。

中村八幡宮の南方、県道時又中村線と茂都計川の中間点付近にあり、現在は水田になっている。

ヤジロウ（弥次郎）といえ、人名となるが、小字名でも人名がそのまま地名になることは少ない。語尾にハタ（畑）やタ（田）のつくことが多い。

ヤジロウとは何か。語源辞典によれば、ヤジはヤチ（菴）と同じで、ロは漠然と「場所」を示す接尾語で、ヤジロウとは「湿地」を意味するという。ヤジロウ←ヤ（菴）・シロ（代）としても「湿地」をいうことになるという。

#### 【松木田】

マツキダ。

中村八幡宮の段丘の南西側の麓にある。

マツキダとは何か。二説を挙げる。

①キダ（段）は「わかれめ」（広辞苑）のことで、マツキダとは「アカマツの自生している段丘と麓の境の土地」をいうか。

②マツは動詞マツハル（纏）で「巻いたような地形」をいう（語源辞典）。つまり、マツキダとは「段丘と平坦地の境が巻いたようになっている土地」をいうか。

#### 【藤ノ木田】

フジノキダ。

中村八幡社の南西方のマツキダ小字のとなりになる。

フジノキダについても二説を挙げる。

①フジーフチ（縁）の濁音化した語で「川べり」をいう（語源辞典）。従って、フジノキダとは「流水があって土地の分かれ目になっているところ」をいうか。

②フジーフシ（節）と濁音化したもので、「微高地」をいう（語源辞典）。つまり、フジノキダとは「微高地で段差がある土地」をいうのかもしれない。

#### 【神田日焼】

ジンデンヒヤケ。

中村八幡社の南方にあるジンデン小字の南側にあり、現在は畑地になっ

ている。

ジンデンヒヤケとは「ジンデン小字の近くにある早に弱い土地」をいうのであろう。

#### 【家ノ軒】

イエノノキ。

中川の茂都計川に近い所にあり、ツジ小字やキタヌマ小字に接しており、現在は住宅地になっている。

イエノノキとは、はっきりはしないが、「家々の裏手の土地」をいうか。

#### 【長面】

ナガツラ。

中川のイエノノキ小字の南側、より茂都計川に近い所にあり、ほとんどが水田で、一部は果樹園になっている。

ナガツラとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ナガツラとは、文字通りで「長く連なった土地」をいのであろうか。

②ナガは動詞ナガル（流）の語幹で「傾斜地」をいい（語源辞典）、ツラ（面）は「地形を表す名詞について、その表面」をいう（広辞苑）。以上から、ナガツラとは「表面が傾斜地になっている所」をいうか。

#### 【イタチ】

中川のナガツラ小字の南側にある小さな小字で、二カ所にある。

イタチとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①イタチはイ（接頭語）・タチ（立）で、イは「語調を整え、意味を強める接頭語」、タチは動詞タツ（立）の連用形が名詞化した語で「高くなった所」をいう。以上から、イタチとは「少し高くなった所」をいうか。

②イタ（損）・チ（接尾語）で「崩れ地」をいう。チは「場所」を示す接尾語。従って、イタチとは「崩れ地のあ

るところ」をいうのであろうか。

【カチ作り】

カチヅクリ。

中川の茂都計川左岸にあり、イタチ小字に混じる。

カチヅクリとは何か。三説を挙げたい。

①カチ←カヂ（鍛冶）と清音化した語か（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）。従って、カチヅクリとは「鍛冶製品を生産する場のあった所」をいうか。

②カチはカハ（川）・ウチ（内）で、「川に近いところ」をいうか。ヅクリは「耕作」のこと（語源辞典）。よって、カチヅクリとは「川辺の耕作地」を意味するのであろうか。

③カチは動詞カツ（搗）の連用形で「たたき落とす」から「崩れ地」をいい、ツは「水のある所」、クリ（涅）で「湿地」のこと（語源辞典）。以上から、カチヅクリとは「崩れ地もあり、湧水のある湿地」をいうか。

【向フ】

ムカウ。小字表には「何フ（ナニフ）」とあるが、ここでは小字図に従って「向フ（ムカフ）」としたい。

中村の県道親田中村線が茂都計川を渡る朝日橋付近にあり、川の両岸にある小字。

ムカウ（向）は「むきあう（向合）の変化した語」で、「相對する」ことをいう（国語大辞典）。だから、茂都計川の両岸にムカウ小字があることになる。

以上から、ムカウとは「川を挟んで相對している土地」を意味する。

【細洞】

ホソボラ。

朝日橋の東側にある。

ホソボラは「細長い低地のある土

地」をいうのであろう。現在でも、隣には畑地があるが、細長い田んぼになっている。

【山崎】

ヤマザキ。

下中村で茂都計川が曲流する所にある。

ヤマザキとは「押し出したようになっている台地の先端部」をいうのである。台地に押されて茂都計川が曲がっているようにみえる。

【大垣外】

オオガイト。

下中村のヤマザキ小字の南側にある。それより南には、ヤシキ小字・ヤシキガイト小字・トノガイト小字など垣外・屋敷小字群がある。

オオガイトとは「大きな屋敷のあった土地」であらうか。現在、オオガイト小字は二カ所に分かれているが、小字発生時には大きく繋がっていたものと思われる。

【屋敷垣外】

ヤシキガイト。

下中村のオオガイト小字の南方にある。

ヤシキガイトも「屋敷のあった土地」であらう。これも有力者の屋敷だったと思われる。

【川原山】

カワラヤマ。

下中村の茂都計川右岸にある。山の斜面がそのまま川に落ち込んでいるようにみえる。

カワラヤマとは、「川の傍らにある山地」か。氾濫原のない川とでもいべきか。

【坂下】

サカシタ。

下中村の茂都計川右岸にある権現

原丘陵の北東向き斜面麓にある。

サカシタとは、字面の通りで「急傾斜地の麓の土地」をいう。

【道下】

ミチシタ。

下中村の二カ所にある。一つは茂都計川とサカシタ小字の間に、もう一つはもっと南の方の金屋川左岸にある。

いずれのミチシタも、文字通りで「道路の下側の土地」をいう。この小字は茂都計川に沿った道路と川に挟まれている。

【反垣外】

ソリガイト。

下中村で茂都計川が曲流する箇所と県道時又中村線と茂都計川の間にある。

ソリは動詞ソル（剃）の連用形が名詞化した語で「そり落とされたような地形」をいう（語源辞典）。

従って、ソリガイトとは「そり落とされたような崩れ地がある屋敷の跡地」をいうのであろう。

【瀧場】

タキバ。

下中村の茂都計川の曲流点直近下流側左岸にある。木師山神社は遠くはない。

タキバは「御嶽行者が滝に打たれる行をおこなった所」と思われる。

【柳下】

ヤナギシタ。

下中村の茂都計川左岸で川と県道時又中村線の間にあり、現在は水田になっている。

ヤナギシタとは何か。語源辞典に依りながら二説。

①シタは副詞シタシタはシトシトに通じ「湿地」をいう。従って、ヤナギシタとは「柳が自生している湿地」を

いうか。

②ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（「場所」接尾語）で、「傾斜地」をいう。以上から、ヤナギシタとは「傾斜地の下側の土地」か。傾斜地の下方の平坦地を指すか。

【幕垣外】

マクガイト。

下中村の県道時又中村線沿いで、カイト・ヤシキ・イエ小字の集まっている所にある。

マクガイトとは何か。これも分かりにくい地名である。

マク（幕）は「布を縫い合わせたりして作り、目隠しや風よけのためのへだてとして用いるもの」か（国語大辞典）。従って、マクガイトとは「カイト小字やヤシキ小字にある屋敷を隔てる場所に位置する屋敷があった所」をいうのであろうか。

【ダイ垣外】

ダイガイト。

下中村の県道時又中村沿いにあり、南～西側からみると、少し高くなっている。

ダイはダイ（台）で、「平たくて高い土地」（広辞苑）であろう。従って、ダイガイトとは「少し高い平地にある屋敷跡」を意味するものと思われる。

【ク子ソへ・クネソへ】

クネソエ。

「クネソへ」小字は下中村の所沢丘陵の北東向き斜面に二カ所あり、「ク子ソへ」小字は下中村のダイガイト小字の南側に接している。

クネとは、元来は「竹などを編んだ垣根」をいうが、愛知県北設楽郡では「山腹で峰のような形の所」をいう（国大辞典）。

従って、下中村のクネソエとは「少

し高くなった所に沿った土地」をいうのであろう。

#### 【牧山一ツ塚】

マキヤマヒトツツカ。

下中村の茂都計川直近の県道時又中村線沿いに二カ所ある。小字発生時には一つながりになっていたものと思われる。

マキヤマは「少し高くなっている丘を取り巻いている麓」をいうか。従って、マキヤマヒトツツカとは①「一カ所だけ高くなって場所がある、丘を取り巻く麓」をいうのであろうか。あるいは、②「塚が一つあった、少し高くなっている丘」をいうのかもしれない。ツカは村史にはないのが、早い時期になくなった可能性もある。

#### 【社古地・社久地】

シャゴジ・シャクジ。

これらも下中村の茂都計川直近の喧噪時又中村線沿いにある。

シャクジ・シャクチ・サクチ・サグチ・サクジン・サゴジンなどと呼ばれている神であり、洩矢神と思われる諏訪在来の古い神であり、三遠南信を中心に広がっており、神格も伝承も多岐にわたる。田の神とか農神ともいわれている。伊那谷南部にも多い御左口神のことであらう。

シャゴジ・シャクジとは「御左口神が祀られていたことのある土地」を意味する。

#### 【甚九郎田】

ジnkロウダ。

これも下中村の茂都計川直近の県道時又中村線沿いにある。

ジnkロウダとは「甚九郎の所有田」をいうのであろう。

#### 【二反田・三反田・五反田】

ニタンダ・サンタンダ・ゴタンダ。

下中村老人集会施設の東方で、茂都計川と県道時又中村線の間にある。

これらの小字名は田んぼの面積を表しているものと思われる。現在の面積は変わってきているので、小字名の発生時のおおよその面積であらうか。

#### 【観音前】

カンノンマエ。

下中村の茂都計川右岸の氾濫原にあり、西側には下中村老人施設がある。

カンノンマエとは「観音堂の前の土地」を意味する。

現在、下中村老人施設が、村史のいう、かつての中山観音堂と思われる。本尊は十一面観音で、一度、永正十四年（1517）に洪水で流されたが源氏ヶ滝でみつかり現在地に移し祀られたという（村史）。

#### 【塚本・ツカモト】

ツカモト。

ツカモト小字は二ヶ所にある。一つは下中村の県道時又中村線が小茂都計川を渡る三遠橋から小茂都計川に沿って北に延びて広がる大きな小字である。もう一つは西方にあるウナガシ丘陵の南東側斜面にある二つの小さな小字である。

東側のツカモトとは「塚の傍の土地」をう。現在、ツカの跡地を県道時又中村線が通っている。大規模な円墳があったという。県道の西側に「琴平大神・秋葉大神・愛宕大神・児玉大塚・塚神」の石碑があり、近くの墓地にある平盤の大石は石室の天井石だという（下伊那史第二巻）。このことは村史にも『飯田市の石造文化財』にも記載がない。

西側のツカモトは「墓地のある丘陵の麓に近い斜面」をいうのであらう

か。

#### 【ツカモト川原】

ツカモトカワラ。

下中村に二カ所ある。一つは茂都計川が小茂都計川と合流するすぐ上流側左岸に、もう一つは上流側の茂都計川と県道の間にある。

ツカモトカワラとは「ツカモト小字の傍の川原の地」をいうのであろうか。

#### 【トヤバ】

ツカモトジリ。

下中村の茂都計川とツカモト小字に囲まれたところにある。

トヤバ（鳥屋場）は「網を張って小鳥をとる所」をいう（国語大辞典）。栃木県と下伊那郡の方言になっている。従って、トヤバも「鳥屋場のあるところ」を意味するのであろう。現在は禁止されているが、渡り鳥のツグミやホオジロ、ヒワなどを捕らえ食用にした。

#### 【番場】

バンバ。

下中村のツカモト小字の北側に接しており、茂都計川と小茂都計川の間で南に延びた丘の先端部になる。

バンバとは何か。二説を挙げておきたい。

①バンバには「山の台地」の意がある（国語大辞典）。石川の方言であるというのが気になるが、東側の小茂都計川のある谷からみれば、明瞭な台地になっている。以上から、ここのハンバは「段丘先端部のの台地になっている所」か。

②バンバ←ハンバと転じた語で「開墾し残した丘」をいう（国語大辞典）。従って、ここのナンバとは「何かの理由で未墾地になっていた丘」をいうの

であろうか。開墾されなかったのは牧場であったためかもしれない（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）。

#### 【井ノ上】

イノウエ。

下中村の県道時又中村線と重なる。

イノウエとは「流水の上の方の土地」をいう。流水とは、ここでは茂都計川を指しているものと思われる。かつては自然の川もイ（井）と呼んでいたという（語源辞典）。

#### 【屋敷前田】

ヤシキマエダ。

下中村の県道の東側の台地にあり、イノウエ小字の東端に接する。

ヤシキマエダとは、字面の通りで「屋敷の前方にあった土地（田）」をいう。

#### 【栗谷本】

クリヤモト。

下中村の段丘先端部に近い、県道時又中村線の東側にある。ヤシキマエダ小字を挟んで二カ所にある。

クリヤモトとは何を意味するのか。国語大辞典に依りながら二説を挙げる。

①クリヤは「飲食物を調理するところ。台所」のこと。従って、クリヤモトとは「有力者の屋敷の台所に近い土地」をいうのであろうか。隣にはヤシキ小字やイエノマエ小字がある。

②『伊賀良の地名』にあるように、クリヤはミクリヤ（御厨）のことで、「伊勢神宮に神饌を貢進する所領」をいう。伊勢・志摩両国のほか東国にも数多く置かれたらしい。クリヤモトとは「伊勢神宮の所領地の近くにあった土地」を意味するか。伊賀良には伊勢在家の小字もある。

#### 【的場】

マトバ。

下中村の小茂都計川と県道時又中村線の丘陵にある。

マトバとは何か。二説を挙げたい。

①マトバは、一般的には「弓を射る場所」をいう。弓神事が行われた所だろうか。八幡社で行われることが多いというが、やや離れているか。シャグジ小字は近いが、御左口神社に弓神事があったのかどうかは疑問である。

③マトバ←マ（接頭語）・ドバ（土場）と清音化したか。マは単なる接頭語でドバは「一時木材を集積しておく場所」（語源辞典）。以上から、マトバとは「一時的な材木置き場のある土地」をいうか。

#### 【鳴雷・ナルカミ】

ナルカミ。

下中村の茂都計川と小茂都計川の間  
の丘陵上に二カ所ある。

ナルカミとは「鳴神様を祀っている土地」をいう。100年ほど前に落雷があつて、鳴神様を祀るようになったという。毎年4月29日が例祭の日で5軒でお祭りをしているという。

#### 【戸引・トヒキ】

トヒキ。

下中村のマトバ小字とナルカミ小字の間にある。

トヒキとは何か。二説を挙げる。

①トヒキはトヒ（樋）・キ（接尾語）で、トイ（樋）は「井水」のことをいい、キは「場所」を示す接尾語。以上から、トヒキとは「井水のある所」をいうか。

②トヒキ←トヒ（樋）・ヒキ（引）でヒキは動詞ヒク（引）の連用形が名詞化した語で「徐々に低くなる状態」をいう（語源辞典）。従って、トヒキとは「井水が流れている緩傾斜地」を意

味するか。

#### 【田ノコシ】

タノコシ。

下中村のトヒキ小字の西側にある小さな小字である。

タノコシとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①タ（田）は「耕作地」をいい、コシは「傍ら」をいう。従って、タノコシとは「耕作地の近くにある土地」をいうか。ここは小字名発生時には耕作地ではなかったのかもしれない。

②タノはタナ（棚）の転で「段丘など棚状の土地」をいう。すなわち、タノコシとは「段丘の下の方の土地」をいうのだろうか。コシはコシ（腰）で身体の腰の部分に見立てたものと思われる。

#### 【浪人垣外】

ロウニンガイト。

下中村の県道時又中村線と小茂都計川の間にあり、垣外小字群の中にある。

ロウニン（浪人）は「浪人が居住した所」という（語源辞典）。この場合の浪人は、律令制で本貫の地を離れた者ではなく、仕官してない武士であろうか。

すなわち、ロウニンガイトとは「浪人の屋敷地」をいうのであるが、仕官していない武士が土着したことを意味しているのであろうか。

#### 【古川】

フルカワ。

『伊賀良の地名』の小字図には「古川」とあるのは、この「古川」の誤記か。

下中村の北東側の谷底部にある。

フルカワとは「以前に川が流れていた土地」をいう。現在は小茂都計川が

谷の北東端を流れているが、かつてはこの谷の中を川筋を絶えず変えながら流れていたのであろう。それが治水工事によって谷の北東端に寄せられたものと考えられる。

#### 【棚田】

タナダ。

下中村の小茂都計川の谷底部と斜面側の一段上の田んぼも含んでいる。タナダとは「段差のある水田」をいうのであろうか。

#### 【茶畑】

チャバタ。

下中村の小茂都計川の北東側の傾斜地にある。南西向きの斜面になっている。

チャバタは「茶の木を植えてある畑」であろう。

#### 【森ノ前】

モリノマエ。

下中村の小茂都計川の谷底部と少し上流側の北東の斜面に小さな小字と二カ所にある。

モリノマエとは「樹木が茂り立つ所の前方の土地」をいう。確かに北東側の傾斜地には樹木が茂っていたであろうが、それだけだったのだろうか、という疑問は残る。

#### 【新府・上新府・下新府】

シンプ・カミシンプ・シタシンプ。

これらの小字は、下中村の小茂都計川の谷底部にあるが、北東側の傾斜地も含む広い範囲にわたっている。

シンプはシンプ（神封）が転じた語で、「社領」をいう（国史大辞典）。田んぼの租税は、神社に納められていたのであろう。

カミシンプは「上流側にある神社領」で、シタシンプは「下流側にある神社領」であろうか。

どの神社の社領であったのか、はっきりはしないが、木師山神社か八幡社であろう。

#### 【一ツ田・二ツ田・三ツ田】

ヒトツダ・フタツダ・ミツダ。

これらの小字は、下中村の茂都計川と釜屋川の間にある。

数字は田んぼの数を表しているか。すなわち、ヒトツダとは「田んぼが一枚ある土地」で、フタツダは「田んぼが二枚ある土地」、ミツダは「田んぼが三枚ある土地」をいうのであろうか。

#### 【ヨコスラ】

下中村の第三組合生活改善施設の南側に隣接する。

ヨコスラとは何か。

スラのス（砂）は「砂地」をいい、ラは接尾語で「事物をおおよそに示す」（国語大辞典）。従って、スラとは「砂地のあたり」をいうか。また、ヨコは「四万堂の横」をいうのであろうか。

以上から、ヨコスラとは「四万堂の横にある砂地の多い土地」を意味するか。

#### 【道添】

ミチゾエ。

下中村の茂都計川の谷にある。右岸で、現在は田んぼや果樹園などの畑になっている。

ミチゾエとは、文字通りで「道路に添った土地」である。茂都計川と併行している南北の道。

#### 【竹ノ下】

タケノシタ。

下中村の茂都計川右岸のカンノンマエ小字の南側と、金屋川左岸の二カ所にある。

タケはタケ（岳）で、上伊那郡や伊



勢などの方言とされている、「信仰と  
かんけいのある山」（国語大辞典）で  
あろうか。

従って、タケノシタとは、「神聖な  
丘陵の麓の土地」を意味するか。

#### 【垣外屋敷】

カイトヤシキ。

下中村茂都計川右岸のヤシキ小字  
の間にある。

カイトヤシキとは、字面の通りで  
「屋敷跡地」をいうのであろう。

#### 【溝口】

ミゾグチ。

下中村の茂都計川右岸にあり、ヨコ  
スラ小字に貼り付いている小さな小  
字である。

ミゾグチとは「井水と田んぼの間の  
水の出入口のある所」をいう。

#### 【横次良】

ヨコジラ。

『伊賀良の地名』の小字図にはない  
が、地番からみて下中村の茂都計川右  
岸にあり、ヨコスラ小字の西側にあた  
るか。

ジラ＝スラ（国語大辞典）で、ヨコ  
スラを言い換えた小字であろうか。

#### 【カケ田】

カケダ。

下中村茂都計川右岸のヨコスラ小  
字と道路の間にある。

カケは動詞カク（欠）の連用形が名  
詞化した語で、「崩れ地」をいうので  
あろう。従って、カケダとは「崩れ地  
があるところ」を意味する。

#### 【夜行洞】

ヤギョウボラ。

下中村の茂都計川右岸にあり、権現  
原丘陵の東側斜面にある大きな小字  
と、もう一つ小さな小字が二つのシマ  
ンドウ小字に挟まれている。

ヤギョウ←ヤギ（柳）・オ（尾・丘）  
と転訛した語か。ヤギ＝ヤナギで①柳  
か②ヤナ（斜面）・ギ（「場所」接尾  
語）で「斜面」をいうのであろう。（以  
上は語源辞典・国語大辞典による）

以上から、ヤギョウボラとは何か。  
二説を挙げる。

①「丘陵にある柳の木が自生している  
洞」であろうか。

②あるいは、「傾斜地の裾にある洞」  
か。

#### 【四万堂】

シマンドウ。

中村の茂都計川右岸の氾濫原に二  
ヶ所ある。

シマンはシマンロクセンニチ（四万  
六千日）の略で、「観世音・地蔵菩薩  
の縁日。この日にお参りすると46,000  
日の間、お参りしたのと同じ功德があ  
るといふ」（国語大辞典）。

従って、シマンドウとは「観世音菩  
薩か地蔵菩薩を安置する御堂のある  
所」を意味するのではないだろうか。  
近くにあるカンノンマエ（観音前）小  
字の観音は、四万堂の観音様を指して  
いるものと思われる。

#### 【七通り】

ナナドオリ。

中村の茂都計川右岸の氾濫原にあ  
る。

ナナドオリとは何か。語源辞典に依  
りながら二説を挙げたい。

①ナナは数字であるが「数が多い」こ  
とを指しているか。ドオリ←トオリと  
転じたもので「道路」をいう。従って、  
ナナドオリとは「多くの畔道がある土  
地」をいうか。緩傾斜地になっており、  
水田の境目にもなる畦道は等高線に  
沿うように何本もあることをいうの  
であろう。

②トオリには「新田」の意もあるらしい。ナナドオリとは「多くの新田がある土地」をいうのかもしれない。

【日ヤケ七通り】

ヒヤケナナドオリ。

中村のナナドオリ小字の南隣から西側に広がる小字である。

ヒヤケナナドオリとは「ナナドオリ小字の一画にある旱に弱い土地」を意味するか。

【石塚】

イシヅカ。

中村の茂都計川右岸の氾濫原にあり、南側の大林丘陵の麓にある。

イシヅカとは「小石の多い微高地」をいうのであろうか。

【温沼】

オンヌマ。

この小字も、中村茂都計川右岸の氾濫原の南端にある。

オンヌマとは何か。二説を挙げる。

①オンヌマ←オヌマと転じたか。オは「語調をやわらげる接頭語」（語源辞典）。従って、オンヌマとは「沼地になっている土地」であらうか。

③オンヌマ←オビ（帯）・ヌマ（沼）と撥音便化したか。すなわち、オンヌマとは「細長い湿地に繋がっている土地」をいうことも考えられる。

【林栽】

ハヤシサイ。

『伊賀良の地名』の小字図にはないが、地番からみてオンヌマ小字の西端付近にあると思われる。

サイには「狭い谷間の地形」の意がある（語源辞典）。すなわち、ハヤシサイとは「樹木の生えている狭い谷になっている土地」をいうのであろうか。

【溝マタギ】

ミゾマタギ。

下中村西部のウナガシ丘陵の東部山麓にある。

ミゾマタギとは、文字通りで「道路が水路を跨いでいる土地」を意味するか。

【丸垣外】

マルガイト。

下中村西部のウナガシ丘陵の北麓にあり、釜屋川と丘陵に囲まれており、現在は田んぼになっている。

マルガイトとは何か。マル（丸）は「川の曲流部、山裾の湾曲部」をいうのであろう（語源辞典）。ガイトはカイトの濁音化した語であるが、多くのカイトのように「屋敷跡」とするのは難しいように思える。このカイトは「限られた一区画」（国語大辞典）としたい。

以上から、マルガイトとは「山麓と川に囲まれた区画の土地」を意味すると思われる。山麓はウナガシ丘陵麓で、川は釜屋川を指す。

【砂原】

スナハラ。

下中村のウナガシ丘陵の北側傾斜地の裾に近い緩傾斜地にあり、現在は果樹園になっている。

スナハラとは「砂地の入会草刈地」をいうのであろうか。

【桜本】

サクラモト。

下中村のウナガシ丘陵の東麓にあり、井水と釜屋川に囲まれて二ヶ所にあるが、かつては繋がった細長い小字であったと思われる。

サクラモトとは何か。二説を挙げる。

①サクラモトとは、字面の通りで「山桜が自生していた傾斜地の麓」をいう

か。

②サはサ(狭)で、クラは動詞クル(剝)の連用形クリが転訛した語で「崩れ地」をいい、モトハモト(元)で「きわ。傍」の意か(以上は語源辞典)。以上から、サクラモトとは「崩れ地のある細長い谷のきわの土地」を意味するものと思われる。

#### 【所免】

トコロメン。

下中村のウナガシ丘陵の北麓にある小さな小字である。

トコロメンとは何を意味しているのか。これも分かりにくい地名である。二説を挙げておきたい。

①トコロ(所)は、もともと国衙の部署であり、そこに所属する在地下級官人をいうこともあったという。中世にもその名残があって、在地の役人の称であったと思われる。メン(免)は「給田」であろうか。従って、トコロメンとは「現地の役人に与えられていた給田」をいうのであろうか。

②トコロメンとは「田租を収穫高につきいくらと決める、その田(所)の免付け」(宮澤恒之氏『伊賀良の地名』)か。早によると思われる災害常襲地で年貢などが減免されることの多い土地だったのかもしれない。近くにはヒヤケナナドオリ(日ヤケ七通り)小字がある。

#### 【石前田】

イシマエダ。

下中村のウナガシ丘陵の東麓に、二ヶ所ある小さな小字である。

イシマエダとは字面の通りで「小石の多い、前方にある田んぼ」をいうのであろう。マエの基準になっているのは、丘陵側にあるヤシキ小字にあったと思われる屋敷か。

#### 【字桜本】

アザサクラモト。

『伊賀良の地名』の字界図には載っていないが、地番からみて南東側のイシマエダ小字の北東端に当たる。

アザサクラモトとは何を意味するのか。二説を挙げる。

①サクラモト小字から分離するときの名づけられたのかもしれない。とすると、アザサクラモトとは「サクラモト小字とは別の土地」をいうのかもしれない。

②アザはアズ(埤)と同じく「崩崖」をいう(語源辞典)。すなわち、アザサクラモトとは「サクラモト小字の中にあつて崩崖のある土地」をいうのであろうか。

#### 【西ヶ久保】

ニシガクボ。

下中村のウナガシ丘陵の南東側裾にある。

ニシガクボとは「中村の中央から西よりにある、窪んだようにもみえる緩傾斜地」をいうか。丘陵側からみれば窪地であるが、麓からみれば緩傾斜地になっている。

#### 【塩坪】

シヨツボ。

下中村の西端部、山本境に大小のシヨツボ小字が五ヶ所ほどある。

シヨ←シホと転じた語で、シホは動詞シホル(霑)の語幹で「湿地」をいう(語源辞典)。従って、シヨツボとは「湿地にある田んぼの区画」をいのであろうか。現在は田んぼでないところも、小字にはあるが、かつては田んぼのある土地に繋がっていたためにシヨツボ小字のままになっているのであろう。

#### 【荒神平】

コウジンダイラ。

中村朝臣の山本境にあり、森下沢川左岸になる。

コウジンダイラとは「荒神を祀っていた丘陵の小平坦地」をいうものと思われる。

荒神の信仰は多岐にわたり、屋内では火伏の神であるが、屋外では作神（農作の神）となるのだろうか。いずれにしても荒神信仰に共通しているのは、荒々しく崇りやすいという性格であるという。この荒神平でどのような神事が行われていたのか、不明のことが多い。

#### 【吉田】

ヨシダ。

中村の最南西部の森下沢川左岸にある。

ヨシダとは「葦が生えていた湿地にある田んぼ」を意味するのであろう。アシ（葦）はアシ（悪）に通じるので、アシのことをヨシと呼んでいた。

#### 【新五郎】

シンゴロウ。

中村朝臣の県道親田中村線を挟んでヨシダ小字の北側にある。

シンゴロウは固有名詞であらう。すなわち、シンゴロウとは「新五郎の所有地」をいうのであろう。

#### 【公文所】

クモンジョ。

中村朝臣の山本境にあり、森下沢川左岸になる。二ヶ所にあつて、一つは現在は水田になっているが、もう一つは県道の中にある。

クモンジョは「荘園時代に公文所があつた土地」をいうのであろう。

公文所とは「荘園で所領に関する文書を納め、所領・年貢のことをつかさどつた所」（広辞苑）をいう。村史は、

伊賀良庄には、ここ中村以外にも下殿岡・山本・駄科に「公文所」小字があり、そこには荘官すなわち所領を寄進した在地の豪族がいたのではないかという。

#### 【井口】

イグチ。

中村のクモンジョ小字の周辺に、二ヶ所、小さなイグチ小字がある。

イグチとは「水田への水の出入口があつた所」をいうのであろう。

#### 【岡田】

オカダ。

中村朝臣集会所の近くに一つあるが、もう一つ、クモンジョ小字の近くに小さい小字がある。

オカダとは「微高地にできた上田のあるところ」をいうか。上田は中田の上にある良質の田んぼをいうのであろう。近くには「垣外畑田成」小字がある。

#### 【火打田】

ヒウチダ。

森下沢川左岸の県道親田中村線周辺に四ヶ所ほどある。

ヒウチはヒ（樋）・ウチ（内）で、ヒ（樋）は「川」で（語源辞典）で、ウチ（内）は「何かを中核とする一定の限界のなか」（広辞苑）を意味する。以上から、ヒウチダとは「（森下沢川周辺の低地にある田んぼ）」を意味するものと思われる。

#### 【朝臣前】

アツソマエ。

下中村の森下沢川左岸の氾濫原にあり、県道親田中村線の北西方になる。

アツソマエとは「アツソの前方の土地」をいうことは確かであらうが、ではアツソとは何をいうのか、はっきり

しない。いくつか仮説を挙げておきたい。

①アッソ←アソン（朝臣）と転じた語で天皇家から分かれて臣籍に降下した氏に与えられた姓で、旧家の家号になっている。従って、アッソマエとは「朝臣家の前方の土地」（山内尚巳氏『伊那谷の地名1』）

③アッソ←アソウ（麻生）と音便化した語で、「茨城県行方郡麻生町の西浦の水際と朝臣洞の大沼際、椎・栗など広葉樹林や猪・猿などが棲息する温暖な風景は、二つ山東麓の朝臣洞や光明寺洞に違和感なくかさなる」（宮澤恒之氏『伊賀良の地名』）という。

④アッソ←アヒ（合）・ソ（背）と促音便化した語で、ソ=セ（背）で「側稜」をいう（語源辞典・国語学大辞典）。二ツ山の側稜の鞍部を二本の山の背がぶつつかっているよに見立てたのであろうか。以上から、アッソマエとは「側稜の鞍部の手前の土地」をいうか。

#### 【所沢】

ショザワ。

下中村の権現原丘陵の南東側にある丘陵で、南端は釜屋川で区切られている。

ショザワ←シホザワと転訛した語で、シホは動詞シホル（霑）の語幹で「湿地」の意（語源辞典）。以上から、ショザワとは「川が流れている湿地のある土地」。”サワのある丘陵”は考えにくく難点ではあるが、今のところ、この説しか挙げられない。

#### 【大沼・大沼平・大沼淵田】

オオヌマ・オオヌマヒラ・オオヌマフチダ。

これらの大沼小字群は下中村の朝臣にある。県道親田中村線付近からそ

の南東方に散在し、現在はほとんどが水田になっている。

オオヌマとは、字面のとおりで「大きな沼があった土地」をいうのであろう。

「大沼平」は、『伊賀良の地名』ではオオヌマダイラとなっているが、ここでは『長野縣町村字地名大鑑』を採って、オオヌマヒラとしたい。オオヌマヒラとは「オオヌマ小字の土地に近い傾斜地」をいうのであろう。

フチダとは「川べりにある田んぼ」をいう。従って、オオヌマフチダとは「オオヌマの近くにある川べりの田んぼ」をいうのであろう。

#### 【鳥ヤバ】

トリヤバ。

朝臣の「荒神平」小字の丘陵の北東側の斜面にある。

トリヤバ=トヤバであろう。すなわち、「霞網などを張って渡り鳥の小鳥を捕獲した場所」をいうのであろう。

#### 【小曾垣外】

コソガイト。

朝臣のトリヤバ小字のある丘陵の麓に近い傾斜地に二ヶ所ある。

コソガイトとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コソはコソ（社）・ベ（戸）のコソで「神社に奉仕する社人」をいう。従って、コソガイトとは「社人が住んでいた所」をいうか。

②コソ←コシと転訛したもので、コシは動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で「水が湧き出る所」をいう。すなわち、コソガイトとは「自然の湧水のある屋敷跡」を意味するか。

#### 【久保田仔リへ】

クボタコリへ。

朝臣の県道親田中村線に懸かり、現

在は水田になっている小字。

クボタコリへとは何か。クボタは「窪地にある田んぼ」をいう。コリへはコリ（垢離）・へ（辺）か。コリは「神仏へ参詣するに際し、水浴して心身を清めること」をいい（民俗大辞典）、へ（辺）は「あたり」の意。以上から、クボタコリへとは「窪地に水田のあるところで、神仏へ参詣する時に水浴して穢れを流した場所のあたり」をいうのであろう。「明德坊」小字や「権現原」小字が付近にはあり、近くを茂都計川支流が流れている。

#### 【ふち田】

フチダ。

朝臣の茂都計川支流を挟んで、コゾガイト小字の対岸にある。

フチダとは「川べりの田んぼ」をいうか。

#### 【ヤマチ】

朝臣の茂都計川支流の右岸に沿う。

ヤマチとは何か。二説を挙げる。

①ヤマ（山）・チ（「場所」接尾語）で、ヤマチとは「樹木のある土地」をいうか。

②ヤ（蒨）・マチ（町）で、ヤマチとは「湿地にある田んぼの区画」をいうのかもしれない。

#### 【宮ノ前】

ミヤノマエ。

朝臣のナカハラ小字やミョウトクボウ小字に混じって、二ヶ所にある。ミヤノマエとは「お宮（または神社領）の前方の土地」をいうのであろうが、どこのお宮であるかは明瞭ではない。北側にあるゴンゲンバラ（権現原）小字にお宮があったとすれば、「権現様をお祀りしているお宮」になるが、どうであらうか。

#### 【明德坊】

ミョウトクボウ。

朝臣の県道親田中村線の西方に、大小二ヶ所のミョウトクボウ小字がある。

ミョウトクボウとは僧堂の称であろう。従って、ミョウトクボウとは「明德坊という僧坊があった土地」を意味するのであろう。近くには、惣教寺がある。この惣教寺の僧坊であったのだろうか。本尊は阿弥陀坐像で、森田草平が疎開していたことがあるという（村史）。

#### 【寺ノ前・寺ノ上】

テラノマエ・テラノウエ。

これらの小字は、朝臣の惣教寺の前方と後方の丘陵にある。

いずれも文字通りで、テラノマエとは「惣教寺の前方の土地」をいい、テラノウエとは「惣教寺の裏手の丘陵にある土地」を意味するのであろう。

#### 【茶畑】

チャバタ。

朝臣の惣教寺の南東方で県道親田中村線を越えた所にある、小さな小字である。

チャバタは「お茶を栽培していた畑」をいうのであろう。その場所は南向きの緩傾斜地になっている。

#### 【梨ノ木下田】

ナシノキシモダ。

朝臣の権現原丘陵の南西向き傾斜地の最上部にある。

ナシノキシモダとは何か。語源辞典によれば次のようになる。ナシノキはナシ（平）・ノキ（軒）か。ナシはナラシ（平）の転で「平坦地。緩傾斜地」をいい、ノキは伊那郡・水窪の方言で「家の裏手の土地」をいう。ダはダ（処）か。

以上から、ナシノキシモダとは「平

坦地の裏手にある下の方の土地」となるか。

#### 【殿垣外】

トノガイト。

下中村の茂都計川氾濫原と権現原丘陵の間の段丘や斜面に、二ヶ所ある。

トノガイトとは「有力者の屋敷があった所」をいう。近くには「屋敷」小字や「屋敷垣外」小字が集まっており、この地がかつての下中村の中心地であったことが考えられる。在地の豪族が住んでいた土地であろうか。

#### 【狐洞】

キツネボラ。

中村の久米境にある。ウエノハラ小字とナカハラ小字の間の段丘崖になっている。

キツネボラとは何を意味するか。語源辞典に依りながら二説を挙げておく。

①キツネボラとは「狐が棲息していた洞のあった土地」を意味するか。

②キツネ←キツレ←クヅレ（崩）と転訛した語で、「崩壊地形」をいうか。従って、キツネボラとは「崩崖のある小さな谷のある土地」をいうか。

#### 【馬場平】

ババノタイラ。

中村最西部の久米境に、大小の二ヶ所にある。丘陵の頂上部と緩傾斜地は、現在、果樹園と畑になっている。

ババノタイラとは何か。これも語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①ババは「山上の平坦地」をいう。従って、ババノタイラとは「頂上が平坦地になっている丘陵」を意味するか。

②ババはハマ、ハバに同じく「崩崖」をいう。つまり、ババノタイラとは「平坦地も崩崖のある急傾斜地もある土

地」かもしれない。

#### 【牧山】

マキヤマ。

下中村の最南部に大小のマキヤマ小字がある。

マキヤマとは「牧場になっていた山地」を意味するのであろうか。広大な小字で、牧場しか考えられないのではないだろうか。中世の武士団は、官牧を横領して馬を生産したという。牧場は中世にも必要とされていたのであろう。

#### 【マムシ洞】

マムシボラ。

下中村南西部のマキヤマ小字の中に、七ヶ所ほどにある。

マムシボラとは字面の通りで「マムシが多い洞」をうのであろう。

マムシ（蝮）は「有毒。全身暗灰色か赤褐色で黒褐色の銭形斑が多い。目と鼻にある孔器で、餌とする小動物の体温を感知する」（広辞苑）とある。

#### 【中ソリ】

ナカソリ。

下中村南部に、これもマキヤマ小字の中に二ヶ所ある。谷底部にあり、現在は荒地や田んぼになっている。

ナカソリとは何か。二説を挙げる。

①ソリは動詞ソル（剃）の連用形が名詞化した語で「土砂が斜面を押し流した所」をいう（松崎岩夫氏）。従って、ナカソリとは「土砂を押し流した谷の中程のところ」を意味するか。

②ソリには「何枚かの田が段階をなしていつうちが一番上と下との中間の田」の意がある（国語大辞典）。島根・茨城の方言であるという。以上から、ナカソリとは「長い谷の中程にある田んぼ（ところ）」をいうこともありうる。現地はその通りの状況になってい

る。

#### 【狐山】

キツネヤマ。

下中村南東部の上川路境にあり、標高 565.4m の独立峰がある。

キツネヤマとは何か。二説を挙げる。

①キツネはキツ(急)・ネ(嶺)で「けわしい峰」をいう(語源辞典)。すなわち、キツネヤマとは「けわしい峰のある山」をいうのであろう。

②キツネヤマとは字面の通りで「狐が棲息している山」かもしれない。

#### 【ショブ平】

ショブダイラ。

下中村の南部に二ヶ所ある。側稜の斜面にある。

では、ソブダイラとは何を意味するのか。二説を挙げておきたい。

①ショブ←ソブと転訛したもの(服部英雄)で、ダイラは「傾斜地」としたい。従ってソブダイラとは「錆びの出る湧水のある傾斜地」をいうか。

②ショ←シオで動詞シオル(霑)の語幹から「湿地」をいい、ベ=へ(辺)で「あたり」の意(語源辞典)。すなわち、ソブダイラとは「湿地のあたりの傾斜地」を意味することもあるか。

なお、ダイラには「傾斜地」の意味は、どの辞書類にもない。これはヒラ→平→ダイラと変わってきたのではないかと思えるが、どうであろうか。

#### 【川治平】

カワジダイラ。

下中村西部にある小さな小字である。

キが古く「川」を意味したのに対し、カハは日本の各地で「池。井戸。堀」を表す用語として使われてきたという。また、ジは「場所」を示す和語チ

が転じた語であるという。(以上は語源辞典)

従って、カワジダイラとは「泉のある平坦地」を意味するものと思われる。

#### 【ウナガシ】

下中村南西部のウナガシ丘陵を中心に四ヶ所にある。

語源辞典よれば、ウナは「山の嶺」をいい、ガシ←カシと濁音化した語で、動詞カシグ(傾)の語幹から「傾斜地」をいう。

以上から、ウナガシとは「丘陵の峰と側面の傾斜地」を意味するものと思われる。

#### 【月夜田】

ツキヨダ。

下中村西部の南平境にある。

ツキヨはツキ(築)・ヨ(節間)で「高い所にある谷間」を意味する(語源辞典)。谷間ではあるが河流より一段高い段丘上に見られる地名だという。

従って、ツキヨダとは「上流部にある谷間の地(田んぼ)」をいうのであろう。

#### 【山橋】

ヤマハシ。

下中村西部の牧山丘陵の山裾に二ヶ所ある小さな小字。

ヤマハシはヤマ(山)・ハシ(端)で、「丘陵の山裾にある土地」を意味する(語源辞典)。

#### 【ハン洞】

ハンボラ。

下中村西部の、ツキヨダ→サガリ→ハンボラと一つながりの谷になっている。ハンボラ小字は、この谷の開口部になっている。

ハンボラとは何か。これも語源辞典



に依りながら二説を挙げる。

①ハン←ハニ（埴）と転じた語で、ハンボラとは「赤土のある洞」をいうか。赤土があるかどうかは未確認。

②ハン←ハミと撥音便化したもので「崩れ地」をいう。従って、ハンボラとは「崩れ地のある洞」であろうか。

#### 【山ノ入】

ヤマノイリ。

下中村の南部に三ヶ所ある。

ヤマノイリとは「丘陵の谷間に入ったところ」をいうか。

#### 【細リ洞】

ホソリボラ。

下中村南部のヤマノイリ小字の間にある。

ホソリは動詞ホソル（細）の連用形が名詞化した語である。従って、ホソリボラとは「細くなっている洞」をいうのであるが、川を遡行した時にだんだんと細くなることを意味しているのであろうか。

#### 【小丸山】

コマルヤマ。

下中村南東部の竜丘境に二ヶ所あるが、もとは一つなかりになっていた大きな小字であったのであろう。

コ（小）は「ほとんど意味をもたない接頭語」であろう。マルヤマは麓の方から見て、「円錐形の山」をいうのであろう。単に、丸い山をいうだけでなく、信仰の対象になっていたのではないかと想われるが、はっきりはしない。

#### 【スズ山】

スズヤマ。

下中村西部のマキヤマ小字の間にあり、現在は果樹園になっている。

スズヤマとは何か。スズは「笹原」のこと（語源辞典）。すなわち、スズ

ヤマとは「笹原のある山地」をいう。ササ（笹）は「イネ科のタケ属で小形のもの総称」（国語大辞典）である。

#### 【風越】

カザコシ。

下中村南東部の上川路境にあり、一つに谷に大小二つのカザコシ小字がある。上川路にもカザコシ小字があり、一つなかりになっている。

カザコシとは、「風の通り道になっているところ」をいう。異の方向（南東）に開けている谷で、南東風が強いところと考えられる。

#### 【大林・小林】

オオバヤシ・コバヤシ。

いずれも下中村の南東部にある。オオバヤシ小字は側稜の尾根の先端部にある大きな小字で、その北側で釜屋川が茂都計川に合流している。コバヤシ小字はオオバヤシ小字の南西側にある小さな小字である。

オオバヤシは「樹木が茂る大きな山地」をいい、コバヤシは「小さな林になっている土地」をいうのであろう。

#### 【大亀ヶ洞】

オオカメガホラ。

下中村南東部の上川路境に二ヶ所ある。

オオカメガホラとは何をいうのであろうか。語源辞典に依りながら二説を挙げておきたい。

①カメ←カミ（上）と転訛した語で、「川の上流部」をいう。つまり、オオカメガホラとは「川の上流部にある大きな谷」をいうのであろう。

②カメ←カミ（嚙）と転じたもので、動詞カムの連用形が名詞化した語で「浸食地形、崩壊地形」をいう。すなわち、オオカメガホラとは「崩崖のある大きな洞のある所」をいうか。

なお、いずれもイ段→エ段と母韻交替しているが、この変化は極めて多いという（国語学大辞典）。

#### 【瀧ヶ入】

タキガイリ。

下中村の南東部で小茂都計川が茂都計川に合流してぶっつかっている所にある。

タキ（滝）は「河の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる水」（広辞苑）をいう。従って、タキノイリは「穹硫の入口にある土地」をいうのであろう。すぐ下流側にはホッキ小字があって、峡谷の入口になっている。

#### 【ホッキ】

下中村の南東部の竜丘境にあり、茂都計川右岸になる。

ホッキとは、下伊那郡の方言で「溪谷沿いの急傾斜面に通路の開かれた所」をいう（語源辞典）。ホキから転じた語で、伊那谷南部特有の小字名である。竜丘や下久堅などにもある。因みにホキの語は土佐、岐阜、岡山にあるという。

#### 【大畑】

オオバタ。

中村東部の丘陵の頂上部の平坦地を中心にした広い小字で、現在は果樹園と畑になっている。

オオバタとは「畑地になっている広い土地」をいうのであろう。

ここには寺があったといわれており、西方台地端には径 30m に近い円墳があり、仿製鏡が出土している。

#### 【壺ツ塚】

ヒトツヅカ。

中村の西部に二ヶ所あるが、かつては一つの小字であったと思われる。

径が東西で 26.1m、南北で 20.8m の円墳があり、出土品は不明で、『下

伊那史第 2 巻』は「墳墓としては疑わしい。山伏塚の類かもしれない」とある。

ヒトツヅカとは「塚が一つある土地」をいうのであろう。

#### 【角石ヶ洞】

カドイシガホラ。

中村最西部の桐林境にある。

カドイシ（角石）は「火打ち石」をいい、信州・北設楽郡をはじめ、全国各地で方言として使われていたという（国語大辞典）。

従って、カドイシガホラとは「火打ち石がある谷」を意味する。

火打ち石はホルンフェルスか石英であるが、ここでは良質の石英が採取できたのであろう。

#### 【白奈木】

シラナギ。

下中村南部にあり、県道時又中村線の近くの茂都計川左岸になる。

ナギは動詞ナグ（薙）の連用形が名詞化した語で「山のくずれてなぎおとしたようになったような所」（国語大辞典）をいう。

従って、シラナギとは「白っぽい崖のあるところ」をいうのであろう。白いのは花崗岩によるか。

#### 【大畑平】

『伊賀良の地名』はオオビタダイラになっているが、ここでは『長野縣町村字地名大鑑』に従ってオオビタビラとしたい。

オオバタビラとは「オオバタ小字の近くにある傾斜地」をいうのであろう。

村境を越えた上川路にもオオバタ（大畑）地名が続く。小字発生時には、この村境は無かったのであろう。

#### 【柳ヶ洞】

ヤナギガホラ。

下中村南東部に大小、三ヶ所ある。ヤナギガホラとは何か。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①ヤナギガホラとは、文字通り「柳の木が自生している洞」であったかもしれない。

②ヤナギはヤナ(斜面)・ギ(接尾語)か。ヤナは千葉県・神奈川県では「畑の縁の斜面」をいう。ここ伊那谷でも、こうした用語があったと思われるほど現地に合っている。ギ←キと濁音化した語で、「場所」を示す接尾語。以上から、ヤナギガホラとは「畑の縁の斜面になっている所」を意味するか。

#### 【白井】

ウスイ。

下中村南東部の白井川に沿って、大小四ヶ所にある。

ウスイとはウス(薄)・イ(井)か。古語のウス(薄)にはアサ(浅)と類似する意義があるという(以上は語源辞典)。従ってウスイとは「河の浅いところ」をいう。

沿岸にウスイ小字のあるところで、白井川の谷の幅は広くなっており、川幅も広がっていたのであろう。

#### 【大奈木・大ナギ】

オオナギ。

下中村東部に三ヶ所ある。

ナギ(薙)は、下伊那郡や北設楽郡などの方言になっていて「山などのくずれた所。崖」(国語大辞典)をいい、オオ(大)は接頭語で美称として使われているのであろう。

以上から、オオナギは「崩崖のある土地」をいうのであろう。

#### 【ツトキノ洞】

ツトキノホラ。

下中村東部の白井川右岸の洞にあ

る小さな小字。

ツトキはツ(津)・トキ(解)で、ツ(津)は「水のある所」をいい、トキは動詞トク(解)の連用形が名詞化した語で「バラバラにほどけること」をいう(語源辞典)。ノは連体格を示す格助詞。

以上から、ツトキノホラとは「自然湧水がある崩壊地になっている小さな谷」を意味するか。

#### 【大ツルネ】

オオツルネ。

下中村の最南東端にある広大な小字で桐林境にある。白井川に添う台地の北東向き傾斜地にあり、峰も三つほどある。

ツルネ(蔓畝)は「峰つづき」の意(広辞苑)。

従って、オオツルネとは「峰が連なっている広い傾斜地」をいうのであろう。

#### 【大畑尻】

オオバタジリ。

下中村南東端のオオツルネ小字の中に、二ヶ所ある。

オオバタジリとは「大畑段丘の段丘崖にある土地」を意味するか。この小字の西側の畑段丘は上川路になっているが、この段丘面はオオバタ小字になっている。

ここも、小字発生時には村境は無かったに違いない。

#### 【駒ヶ洞】

コマガホラ。

中村の白井川左岸にあり、三日市場と駄科に挟まれている。

コマガホラとは何か。語源辞典に依りながら二説を挙げる。

①コマ←コウ・マ←カハ(川)・マ(間)と転訛した語で、「川の間にある土

地」をいうか。従って、コマガホラとは「川の間にある小さな谷」をいうか。この小字は、臼井川に、その支流が流れ込む合流点の近くにある。

②コマ（駒）は馬の生産・飼育に関わる地名をいう。すなわち、コマガホラとは「馬の牧場にある洞」を意味するか。